日本写真家協会会報

NO.180
(2023. Sep.)

■座談会「写真の現在、そして未来とは？」
■焦点「写真家はインボイス制度とどう向き合えばよいか！」
■ JPS2023 年新入会員展「私の仕事」

JPS

Photo Bruce Osborn

ヨドバシカメラ
GOLD POINT CARD
www.yodobashi.com
ポイントカードは、ヨドバシカメラが初めに考案したシステムです。

新規会員募集中 日本写真家協会会員様専用の

ゴールドポイントカード

12%ポイント還元

※現金・デビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。

専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!

ヨドバシカメラ
www.yodobashi.com

新宿西口本店 〒160-0023 新宿区西新宿1-11-1 ☎ 03(3346)1010	**マルチメディア新宿東口** 〒160-0022 新宿区新宿3-26-7 ☎ 03(3356)1010	**マルチメディア Akiba** 〒101-0028 千代田区神田花岡町1-1 ☎ 03(5209)1010	**マルチメディア錦糸町** 〒130-8580(駅ビルテルミナ1・2・3階) 墨田区江東橋3-14-5 ☎ 03(3632)1010	**マルチメディア上野** 〒110-0005 台東区上野4-10-10 ☎ 03(3837)1010
マルチメディア町田 〒194-0013 町田市原町田1-1-11 ☎ 042(721)1010	**八王子店** 〒192-0082 八王子市東町7-4 ☎ 042(643)1010	**マルチメディア吉祥寺** 〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町1-19-1 ☎ 0422(29)1010	**マルチメディアさいたま新都心駅前店** 〒330-0843 さいたま市大宮区吉敷町4-263-6 ☎ 048(645)1010	**マルチメディア川崎ルフロン** 〒210-0024 川崎市川崎区日進町1-11 ☎ 044(223)1010
アウトレット京急川崎 〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町21-12 ☎ 044(221)1010	**マルチメディア横浜** 〒220-0004 横浜市西区北幸1-2-7 ☎ 045(313)1010	**マルチメディア京急上大岡** 〒233-0002(京急百貨店1・8・9階) 横浜市港南区上大岡西1-6-1 ☎ 045(845)1010	**千葉店** 〒260-0015 千葉市中央区富士見2-3-1 ☎ 043(224)1010	**マルチメディア新潟駅前店** 〒950-0901 新潟市中央区弁天1-2-6 ☎ 025(249)1010
マルチメディア宇都宮 〒321-0964(トナリエ6・7・8階) 栃木県宇都宮市駅前通り1-4-6 ☎ 028(616)1010	**マルチメディア甲府** 〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-3-3 ☎ 055(230)1010	**マルチメディア郡山** 〒963-8002 福島県郡山市駅前1-16-7 ☎ 024(931)1010	**マルチメディア仙台** 〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡1-3-1 ☎ 022(295)1010	**マルチメディア札幌** 〒060-0806 北海道札幌市北区北六条西5-1-22 ☎ 011(707)1010
マルチメディア名古屋松坂屋店 〒460-8430(松坂屋名古屋店南館4・5階) 愛知県名古屋市中区栄3-16-1 ☎ 052(265)1010	**マルチメディア梅田** 〒530-0011 大阪府大阪市北区大深町1-1 ☎ 06(4802)1010	**マルチメディア京都** 〒600-8216 京都府京都市下京区東塩小路町590-2 ☎ 075(351)1010	**マルチメディア博多** 〒812-0012 福岡県福岡市博多区博多駅中央街6-12 ☎ 092(471)1010	ヨドバシカメラの インターネットショッピング www.yodobashi.com

Canon
make it possible with canon

8

クリエイティブ
フルサイズ
NEW EOS R8

もっと背伸びしていい。もっとよく張りでいい。
もっと我がままでいい。このカメラが応えてくれる。
スマートなのに、パワフルなフルサイズ。
その名は8。「撮る」の先にある「創る」へ。
好きな表現を、好きにやろう。

110 million EOS 160 million RF/EF

EOSは2023年3月に累計生産台数1億1,000万台※1、交換レンズRF/EFレンズシリーズ※2は2023年5月に累計生産本数1億6,000万本を達成しました。
※1 銀塩（フィルム）とデジタルの双方を合わせた累計生産台数。映像制作用のシネマカメラを含む。※2 EFレンズ、EF-Sレンズ、RFレンズ、RF-Sレンズ、EF-Mレンズ、EFシネマレンズ、エクステンダーを含む。2023年6月29日時点。

Home Page
◎キヤノン EOS R8 ホームページ
canon.jp/eos-r8

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

■*Gallery*　JPS ギャラリー　泊 和幸、森田雅章、鈴木是清、浅井秀美　石川裕修、小柴一良 …… 5
■*First Message*　会長就任にあたって …… 熊切大輔　11
■*Focus*　写真家はインボイス制度とどう向き合えばよいか！ …… 上西 知　12
■*Telescope*　地方の公立施設だからこそできること …… 渡部晋也　14
～高知県立美術館での取り組み～
■*Zooming*　写真の散歩道（連載７） …… 鳥原 学　16
ウクライナ報道から「戦争と写真」を考える
■*Wonder Land*　＜座談会＞変革の時を迎えて～新任理事大いに語る …… 18
出席者：熊切大輔会長、大津茂巳理事、土屋勝義理事、寺師太郎理事、
松倉広治理事、吉川信之理事　司会：小池良幸専務理事、伏見行介常務理事
■*Workshop*　著作権研究（連載 55）生成 AI 画像と写真著作権 …… 吉川信之　22
■*Wonder Land*　＜座談会＞写真の現在、そして未来とは？ …… 24
出席者：尾﨑たまき、笠原美智子、タカザワケンジ、塚崎秀雄、馬場道浩
司会：伏見行介常務理事
写真解説（表紙・表４）
■*New Face Gallery*　JPS2023 年新入会員展「私の仕事」 …… 31
■*Award*　「笹本恒子写真賞」2023 年第 6 回受賞者決定 !!　高橋宣之さん …… 34
■*Memorial*　田沼武能氏追悼「一写入魂の会」開かれる …… 35
■*Exhibition*　第 48 回 2023JPS 展入賞作品紹介 …… 36
■*Education*　2022 年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告 …… 40
■*Congratulations*　おめでとうございます　第 49 回「日本写真家協会賞」受賞 …… 42
（株）ワン・パブリッシング『CAPA』編集長・菅原隆治さん
■*General Meeting*　2023（令和 5）年度第 24 回定時会員総会報告 …… 43
■*Archives*　「日本写真保存センター」調査活動報告 (39) …… 寺師太郎　44
原板アーカイブとメタデータの重要性
■*Topics*　賛助会員トピックス …… 46
■*Report*　セミナー研究会レポート …… 49
2022 年度第３回、2023 年度第１回・第２回技術研究会報告、
著作権セミナー　第２回知っておきたい写真著作権＆肖像権セミナー
国際交流委員会ウェブサイト企画「表現者たち」Vol.11 ～ 13
■*Message*　Message Board …… 52
■*Exhibition*　2023JPS 展報告・第 49 回 2024 JPS 展案内 …… 54
■*Books*　JPS ブックレビュー …… 57
■*Information*　追悼 = 正会員・菅田隆雄、前定賢三、渡辺幹夫、小池 汪、吉野 信 …… 61
／経過報告／編集後記
■*Gallery*　X ギャラリー　髙橋忠照、小宮広嗣、笹生公希 …… 72
表紙・ブルース・オズボーン、表４・岡 克己

広告案内
■（株）ヨドバシカメラ
■キヤノンマーケティングジャパン（株）
■キヤノンギャラリー
■（株）タムロン
■リコーイメージング（株）
■（株）シグマ
■（株）アフロ
■（株）堀内カラー
■（一社）日本写真著作権協会(JPCA)
■富士フイルム（株）

キヤノンギャラリーのご案内

Canon
make it possible with canon

キヤノンギャラリー S・キヤノンオープンギャラリー 1・2（品川）

■「キヤノンギャラリー S」では、キヤノンマーケティングジャパンのメインギャラリーとして、2003年5月に開館以来、著名なプロ写真家出展による、さまざまなジャンルの作品展を開催しています。

■「キヤノンオープンギャラリー1・2」では、さまざまな企画展やグループ展をはじめ、キヤノンマーケティングジャパンの収蔵するフォトコレクションの展示などを行っています。

キヤノンギャラリー（銀座・大阪）

■「キヤノンギャラリー」（銀座・大阪）では、プロ・アマを問わず、公募により選出された写真家の作品展を開催しています。（応募要項についてはホームページをご確認ください）

キヤノンギャラリー S

キヤノンギャラリー銀座

CANON GALLERY 50th

キヤノンギャラリーの開設 50 周年を記念し、企画展示を開催しております。
◎品川　〒108-8011 東京都港区港南2-16-6 キヤノン S タワー 1F・2F　開館時間：10:00~17:30（日・祝日と弊社休業日は休館日）TEL:03-6719-9021
◎銀座　〒104-0061 東京都中央区銀座3-9-7 トレランス銀座ビルディング 1F　10:30～18:30（日・月・祝日と弊社休業日は休館日）TEL:03-3542-1860
◎大阪　〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-4 中之島フェスティバルタワーウエスト1F　10:00～18:00（日・月・祝日と弊社休業日は休館日）TEL:06-7739-2125

Home Page ◎キヤノンギャラリーホームページ　canon.jp/gallery　キヤノンマーケティングジャパン株式会社

生命の躍動 ―― 泊　和幸

北海道・道北で暮らすキタキツネは、早朝ずぶ濡れになりながら、子育てのために臆することなく川に入り、獲物を捕らえる事が出来る。俊敏に動き回るサクラマスを捕らえるのは、身体能力の高いキタキツネといえども容易ではない。急所を噛み締め、動きを止めながら生命の鼓動を感じている。60cm以上の大物に、尾びれで激しく首を振り動かされムチ打ち状態にされても、何度も急所を抑え込み、精魂尽きながらも激闘を制する事が出来た。
写真集『里山の宇宙キタキツネ』
写真展「里山の宇宙で暮らすキタキツネ」

変わりゆく「バングラディシュ」――― 森田雅章

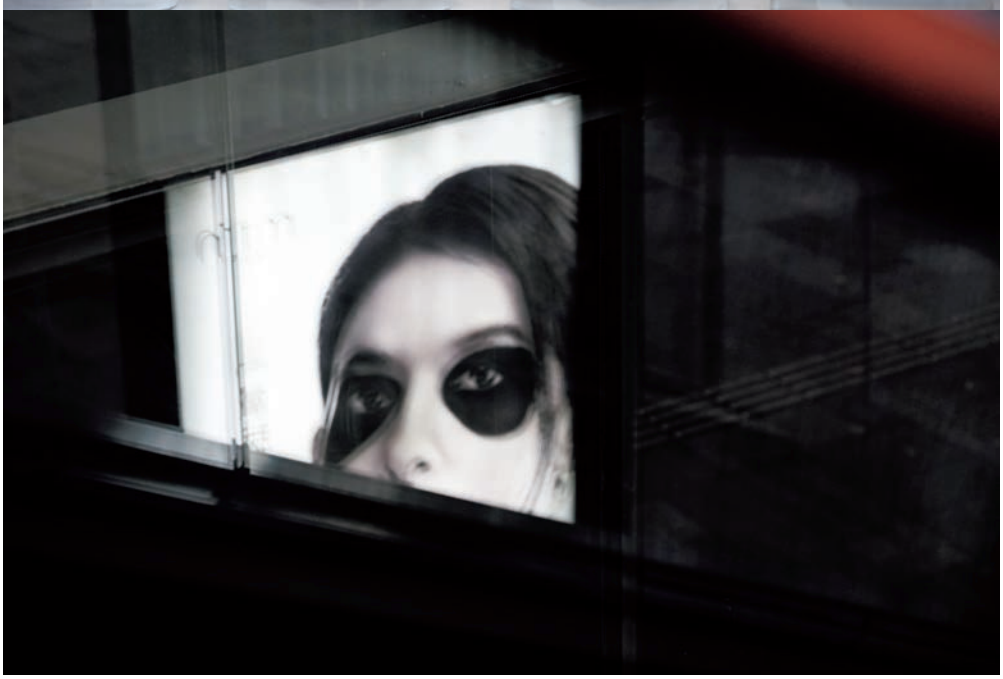
この25年でバングラディシュは変わった。特にこの10年の変化は著しく、底辺の人達の賃金は5倍近くになった。25年前は１日１食しか摂る事の出来なかった人達も、今は１日３食摂れており、街中でも裸足が当たり前だったが、今はサンダルを履かない人はほぼいない。ダッカは高層ビル、大型ショッピングモールが増え、高くても高級ショッピングモールで買物をする人が増えているという。貧しい国バングラディシュは昔の話となった。
写真展「変わりゆく　バングラディシュ」

郷時間（さとじかん）―――――――― 鈴木是清

大きな宇宙の幾万年から続く変動、そこに生きる者たちがあらゆる事象を受け入れながら生まれては消え新しい息吹が湧き出ている。戦争も温暖化による災害も人間のわがままなものからきているのではないかと思う。自然が恵みを与えてくれたもの、形ある全ての生命体を破壊しているように思える。「住まわせて頂いている。」大切なもの、忘れてはいけないものがここにある。豊かな自然と共に、穏やかな暮らしの時が流れている。
写真集『郷時間』
写真展「郷時間（心の慕景）」

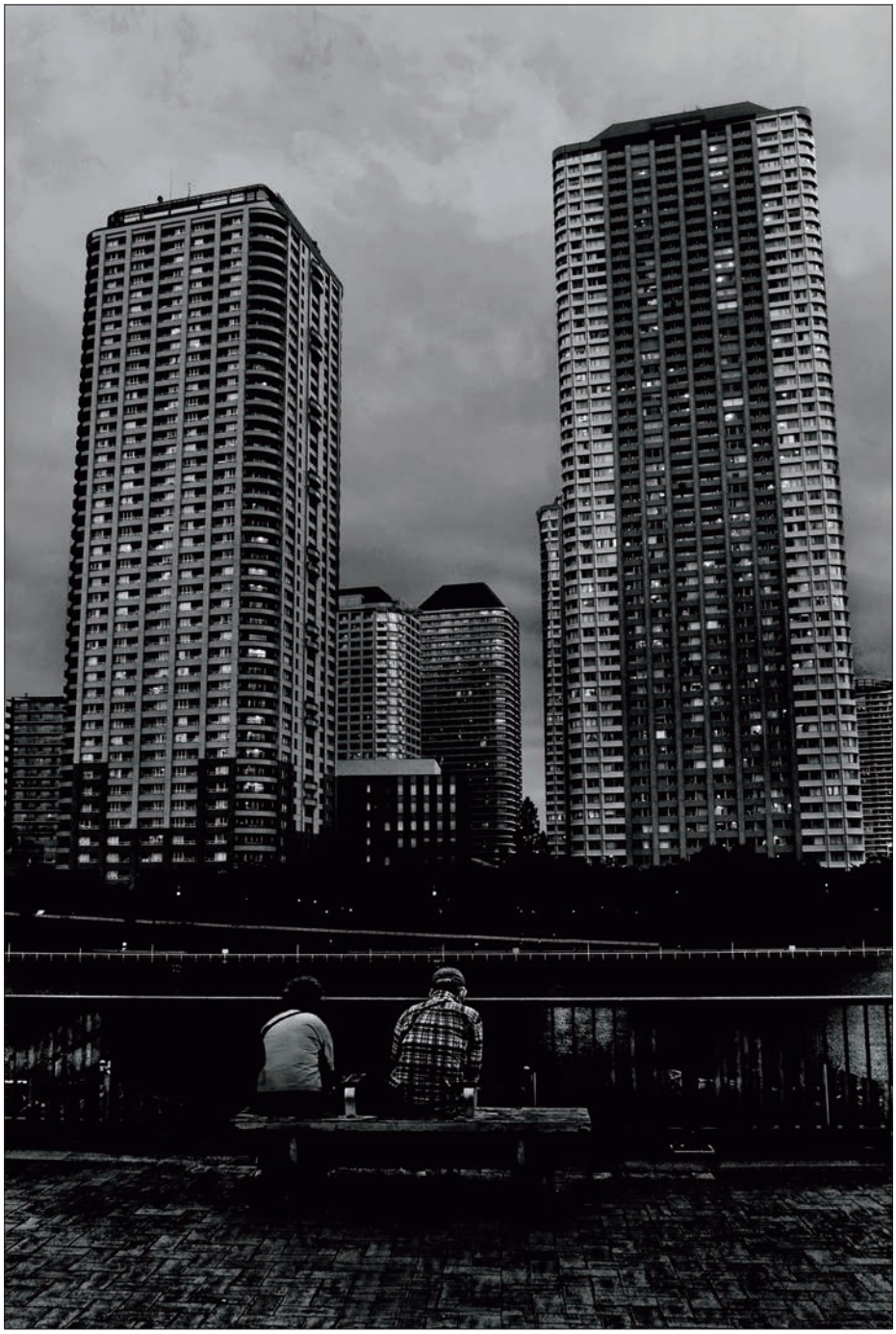
着物にマスク ―――――――――――――― 浅井秀美

浅草には着物姿（浴衣姿）が良く似合う。日本人だけではなく、数年前より着物レンタル店が増え、外国人の着物姿グループが浅草寺を参拝、街を散策、記念写真を撮って喜んでいた。だが2020年、新型コロナウィルス禍、4月7日には東京にも緊急事態宣言が発令されると、仲見世の多くが休業、参拝客は激減した。写真は2020年8月2日浅草の裏通り。マスク姿の美女4人、顔が隠れてかわいそう。着物にマスクは悲しいね。
写真集『東京・下町日和 -平成から令和へ- 』



「成都」～拌飯「まぜごはん」～ ――― 石川裕修

中国・四川省成都市。この町は北京、上海に次ぐ文化都市。特に市内にある太古里地区は素晴らしい。中国の先進若者文化がここでは見られる。古来「蜀漢（しゅうはん）」の時代から世界の文化が集まる街だ。他にも歴史も深く感じられる。三国志、仏教寺自然。若者達は世界先端のファッションをここで見て買うこともできる。中国国内でも訪れたい都市NO.1です。行けば日本人は中国のイメージが変わるかもしれない。
写真集・写真展「『成都』～拌飯『まぜごはん』～」



「写真・東京暮色」より ―――――― 小柴一良

構図の中に人物が入っていると、いつもながら余計な想像をしてしまう。ここに写っている人は何を仕事とする人で、二人は夫婦か兄弟か？ここで何をしているのか？この二人は夫婦で東京の住人ではなさそうだ。地方からはるばる子どもを訪ねてやってきた。今日は留守番を頼まれたが近くの隅田川まで散歩。疲れたのでベンチで休憩中。今回の想像はそんなところです。
写真集『写真・東京暮色』

会長就任にあたって

会長　熊切 大輔

2023年5月26日に開催した第24回定時会員総会にて、会長の職を拝命することとなりました。

関係者の皆様によく「最年少会長か？」と問われますが、54歳での就任は木村伊兵衛氏、渡辺義雄氏に次ぐ３番目で、社会的に見ても決して若すぎる就任ではありません。そんな印象を持つほど、写真家として、そして人生経験の豊富な先輩方が歴代務めてこられた会長職という重責を改めて実感し、身の引き締まる思いで日び務めております。

現在、写真業界は大きな変化の波にさらされています。新型コロナウイルス感染症による未曾有の影響は写真業界に大きなダメージを与えました。また、写真誌の休刊、カメラの販売台数の減少などがおこり、それはすなわち写真家にとっても非常に厳しい活動状況を生み出すこととなりました。

社会的には改善の兆しを感じられるような状況になりつつありますが、いぜん緊張感が続くなかでの会長就任にあたって、今まで通りの協会運営のありかたを見直す必要を強く感じました。経済産業省が「2025年の崖」という発言をしています。簡単にいえばその年までにDX（デジタルトランスフォーメーション）化できない組織は淘汰されるということです。そんな時限的で急激な変化を求められる時代にあった新しい考え方や手法、スピード感のある対応を積極的に考えていかなければなりません。

そこで今回「つながるJPS」と銘打ってアジェンダ（行動目標）を設定しました。「つながる」というキーワードはさまざまな局面で重要になってきます。これをベースに協会全体及び各委員会が明確に目標を持って行動していくことが必要だと考えています。

まず全体的には、前理事会で決まった本年度の事業計画の運営を着実にこなしつつ同時に来年度、そして将来的に改革に着手できるようしっかりと準備をする必要があります。そんななか、長期的な改革の道のりを未来へつないでいきます。

会長として、いの一番の行動目標は全国の会員の皆様のもとに赴いて意見交換、全国行脚をしたいと考えています。改めて皆様の意見を直に聞き、全国の会員とのつながりを改めて深めていきたいと思っています。

各運営委員会担当の理事の顔ぶれも、大きく若返りました。それぞれにテーマを持っての就任となりましたが、今までは役所でいう縦割り構造のようなものが存在していました。これからは各委員会が横でのつながりを強化して、より風通しの良い活発な活動になるよう工夫していこうと早速、さまざまな検討に着手してもらっています。

対外的には賛助会員の皆様をはじめとする各メーカー、写真関連会社、写真団体の皆様との連携強化をしていきたいと思います。お互い協力することで生まれるイノベーションを実感できる方法を模索、実行していきたいと考えています。

時代が変わると新たな問題も生まれてきます。生成AIという新しい技術は現代ならではの面白い表現ではあるものの、一方で著作権の侵害の可能性などさまざまな問題が浮かび上がってきました。著作権をしっかりと守っていくのも我われJPSの大きな使命です。技術の進化と共に姿かたちを変えていく新技術の行方をしっかりと注目し対応していく必要があります。

協会の象徴的な存在でもあるJPS展はまもなく節目の50回を迎えようとしています。開催できなくなっていた名古屋展再開の可能性の模索などこれを機により一層JPS展が盛り上がるよう努力していきます。

このように会全体がつながりを強め、一丸となってJPSをそして写真界を盛り上げていけるよう皆様のお力をお貸しいただければと強く願っています。

最後に、おそらく史上最も難しい状況を２年４期お支えいただいた野町和嘉前会長に感謝の意を表したいと思います。

写真家はインボイス制度とどう向き合えばよいか！
～10月から始まるインボイス制度への対応～

税理士　上西 知

■はじめに

2023年10月1日より消費税インボイス制度が始まります。数年前に成立している制度ですが、いまだに世間が理解しているとは思えませんので、あらためてインボイス制度について、写真家（フリーランスである個人事業者）を対象として、厳密な法律用語を使わずに問題点及び対策をつかんでいただくことを目的として周知をいたします。

■インボイス制度とは何なのか？

インボイス制度を語るには、まず消費税の仕組みを知っておかなくてはなりません。消費税の納税金額は、売上にプラスした10％の消費税を「預かった消費税」として考え、経費の中に入っている消費税は、預かった消費税から支払ったものとして、年末時点で「預かった消費税の残高」を納税する仕組みになっています。年間の売上に係る消費税が80万円で、経費の中に入っている消費税が50万円ということになりますと30万円を国に納める仕組みです。この基本的な計算方法を「原則課税」といいます。

現行の消費税法では、２年前（基準期間という）の消費税の係る売上が1,000万円以下であれば、消費税の申告をして税金を納めなくてよかったのです。これらの方が「免税事業者」となります。

納める消費税を計算するときに、それぞれの取引に消費税が入っているかどうかの判定は「取引の内容」によっていましたが、インボイス制度の導入により「インボイス番号の記載がある請求書・領収書」を基に判定することに変わるということがポイントです。

■インボイス制度の問題点

今まで年間売上が1,000万円以下の方がたは、消費税を納めておりませんので、消費税について考えることが無かったと思いますし、売上先も何も考えることは無く取引をしておりました。しかし、インボイス制度の導入により、異変がおきてきます。これらの方がたがインボイス番号をとらないということになりますと、売上先の消費税納税額の計算において「預かった消費税」から写真家に支払う経費の中に入っている消費税をマイナスするときに、0円となってしまうため、納税額が増えてしまうのです。

こうなりますと、どんなことが想定されるでしょうか。売上先は、まったく同じ取引なのに消費税増額分、利益が減ってしまいます。ひいては「値下げ交渉」もしくは、「発注業者の見直し」となるかも知れないのです。消費税改正によって税負担が変わるのはまだしも取引の内容にも影響が出るというのは大問題です。

■インボイス制度は特に免税事業者に対策が必要

現在も確定申告のときに消費税の申告をされている方は、インボイス番号をとっても前から消費税を納めているので、あらたに消費税を納めるということにはなりません。しかし免税事業者の方は、インボイス番号をとることによって消費税の申告納税義務が生じるため、今まで納めなくてよかった税金が増えるのです。

インボイス番号取得を10月1日に間に合わすために今年の３月末日までに届出を出すことになっていたのですが、９月30日まで延長されました。おそらく、複雑すぎて判断できない方が右往左往しているため提出件数が増えないのだろうと思います。

■インボイス番号は取得したほうがよいのか？

免税事業者の方から一番多く寄せられる質問が、「インボイス番号をとった方が良いですか？」です。誰もが税金を安くして手取り額（利益）を増やしたいと考えるのは当然です。それを税理士に相談に来られるのです。では、一番良い方法はどちらでしょうか？

答えはわからないのです。それは売上先の状況によるからです。写真家に年間800万円の仕事を依頼しているとなりますと、消費税だけで80万円なので重要問題です。しかしスポットで３万円の仕事の依頼ならば、消費税は3,000円なので、大きな問題にはならないでしょう。

もし写真家のお客様が事業者で無い方（一般消費者）ばかりだとしますと、消費税の申告納税をしていない方ばかりです。その場合は、売上先が消費税の増税で困るということがありませんので、皆様はインボイス番号をとる意味が無いということになります。写真スタジオを経営されているケースが該当すると思います。

では売上先が事業者だと必ず先方に影響がでるかといえば、そうでもないケースがあります。消費税の基本的な計算方法（原則課税）を説明しましたが、イレギュラーがあります。基準期間の売上が5,000万円以下の事業者は、業種によって預かった消費税の○％を納めればよいというものがあるのです。これを「簡易

課税」といいます。たとえば写真家に仕事の依頼をした出版社があるとします。出版社はおおむね製造業という分類にあたるため、預かった消費税の30％を納めればよいとなるのです。この計算方法を選択している事業者の場合、経費の中に入っている消費税を計算する必要が全く無いために、写真家がインボイス番号をとるかどうかには無関心になります。売上先が簡易課税であれば何の対策もいらないということになるのですが、それらを先方に確認できますか？簡易課税を選択しているということは、売上が5,000万円以下だと伝えることになりますので、わざわざ教えてくれるでしょうか。本当に一番節税をしようとすると取引先の個人情報を入手する必要がでてくるのです。

現在の状況を見ておりますと、建設業等は元請の力が強いと思いますので、一人親方的な仕事をしている方は、頼まれた場合、ほとんどインボイス番号をとられているように感じます。取引を続けるためにやむを得ない選択だと思います。では写真家の方がたにとっての正解は何かといいますと、「迷われているのなら様子を見られてはどうでしょうか」と考えています。

現在も売上先から番号取得の確認連絡が多くの事業者に行われています。大きな会社は取引への影響を懸念してインボイス番号を間違いなく取ります。そうすると支払先がインボイス番号をとるかどうかが気になることと、経理的な準備を含めて調査を始めているのです。これらの連絡が入ったがために、インボイス番号をとらなくてはいけないと感じる方も多いようですが、強制することはできません。あくまで皆様の判断にゆだねられます。それは公正取引委員会が、優位な立場をもってインボイス番号の取得を強要してはならないと発表しているからです。ただし価格交渉等はしても良いことになっていますので、そこら中で交渉が始まる可能性があります。そのときに問題となるのが、売り手と買い手の認識の差があります。例えばガレージの契約です。借り手は消費税込みで１万円と考えて処理をしてきていますが、貸し手は消費税制度が始まってから一度も消費税をもらってないと考えるのです。このような認識の違いから交渉するときにもめることが考えられます。

10月１日までに、インボイス番号の取得を決断する必要はあるでしょうか？わざわざ火中の栗を拾う必要があるでしょうか？取引先がどう判断するかわからない状況で決断をする必要があるでしょうか？

私なら、取引先から動きがあれば話し合い、その時点で決めればよいと思います。インボイス番号は、その時から申請をすれば番号は発行されますので、交渉中は値引きに応じても良いかも知れません。番号をとることになれば、価格を戻してもらえば良いと思います。そのために「迷われているのなら様子を見られてはどうでしょうか」となるわけです。

■６年間の経過措置がある

上記の内容から考えますと、出版社がインボイス番号をとらない写真家の方へ年間800万円の仕事を依頼すると消費税80万円がプラスされるが、消費税の計算上は引いてもらえないために、出版社が80万円増税になるということでした。

しかし実際は経過措置が６年にわたり用意されていて、最初の３年間は80％、残りの３年間は50％、消費税の計算上引くことができるのです。つまり上記の出版社はいきなり80万円の増税になるわけではなく、80％引けるので16万円だけ３年間は増税となるのです。その後の３年間は40万円だけ増税になるのです。

■インボイス番号を登録した後の対策

検討したり交渉したりしながらインボイス番号をとることを決断された場合は、節税を考えてください。通常、写真家の方がたは、上記でも少しお伝えしました「簡易課税」を自ら選択される方が良いと予想します。

簡易課税を選択しますと、写真家の場合、サービス業に分類されますので、売上と共に預かった消費税の50％を納税するという方法です。ここでも損か得かという問題がでてきますが、ポイントは年間売上金額の半分以下が消費税のかかる経費の方は簡易課税が有利となります。なぜなら年間売上の50％を消費税のかかる経費があったものとして計算するのが簡易課税だからです。ご自分の前年の確定申告書をご覧になられて売上に対して消費税のかかる経費が何％くらいあるかを確認することをしてください。だいたい毎年同じような比率になることが多いです。私は売上の50％も消費税のかかる経費はないだろうと予想しているわけです。ただし簡易課税は２年間継続することになっています。例えば300万円の営業車を購入されますと30万円の消費税がかかりますので、経費ではありませんが控除できるため、設備投資がある年は消費税が下がることが多いのです。しかし、簡易課税を選択していると売上だけから計算する方法なので消費税は安くならないということになるので、設備投資も含めて２年先まで検討する必要があるのです。

非常に難解な消費税を限られた紙面上でお伝えしておりますので、運用に際しては十分注意をされてください。

上西　知（うえにし・さとる）
昭和40年生まれ。平成元年から税理士事務所に勤務し、平成13年に独立開業。平成21年より社会保険労務士・司法書士・不動産業と提携し「Team 創愛」を結成、現在に至っております。税理士業界に携わって今年で34年目になります。

地方の公立施設だからこそできること
～高知県立美術館での取り組み～

渡部晋也（JPS 会員）

高知市にある高知県立美術館で、9 月 24 日まで前 JPS 会長、野町和嘉さんの写真展「地平線の彼方から」が開催されている。今年で開館 30 周年を迎えるこの美術館は、収蔵する美術品にシャガールの大規模なコレクションがあることで知られているが、もう一つ、サンフランシスコ生まれながら、3 歳で移り住んだ高知で育ち、後に国際的に活躍された写真家、石元泰博（1921-2012）さんの作品を収蔵していることも大きな特色である。生前からの本人との交流を通して寄贈は始まり、逝去後にわたり本人と遺族から寄贈された数は、プリント 34,753 枚、ネガフィルム約 100,000 枚、ポジフィルム約 50,000 枚、その他、石元さんが愛用した機材や書籍などの資料、さらに家具に至る膨大なものだ。おそらく公立の美術館が特定の作家によるこれだけの作品を収蔵していることは極めて珍しいことだろう。見方を変えれば高知県および県立美術館は石元泰博、野町和嘉という大きな写真作品のコンテンツを保有していると考えられ、国内でも写真作品の収蔵について大きな経験値を持つ公立美術館と見ることができる。そこで、どういった経緯で高知県立美術館のケースが成立したか、そして野町さんの写真展について紹介していきたい。

■石元泰博フォトセンターの成立まで

まずは高知県立美術館がどういった経緯で石元泰博さんから作品の寄贈を受けたのか。館長でもあり石元泰博フォトセンターの設立に係わった館長である藤田直義氏はこう回想する。

高知県立美術館館長 藤田直義氏
撮影：渡部晋也

「最初、石元さんから生前親交のあったウチの学芸員に作品を寄贈したいという申し出がありまして、実際に一部を寄贈されました。ただ当初は担当の学芸員は１人だけでしたし、作品の整理なども進んでいませんでした。そして石元さんも奥様も亡くなられた後に、ご遺族と話し合いになったんです。石元作品をどこで保管するかについては、当時色いろな意見がありまして、美術館側の施設や担当者の資質についても問われました。そこで高知県が主体になりまして石元泰博写真作品等利活用検討専門家委員会を組んで何回か協議しました。その委員会にはJPS の松本徳彦さんや、石元さんと深いお付き合いのあった PGI の山﨑信さん。高知県立牧野植物園の牧野富太郎記念館を始め、石元さんが多くの作品を撮影している建築家の内藤廣さん等が委員として参加されました。その結果、高知県としても本腰を入れて予算をつけ、美術館が石元フォトセンターとして専門の学芸員を 3 人配置し、フィルム収蔵庫や展示室を用意することで決まったんです。それまでは書庫だったところや会議室を作り替えて設備を整えました」

石元さんの作品を十分に活用するには東京またはそれに準ずる場所で保管すべきとの意見はもっともだが、松本さんの回想では、石元さん自身がなるべく一箇所にまとめておきたいと希望されていたとのことである。評価すべきはそうした意思に対してしっかりと予算をつけて環境を整備した県と美術館の対応だろう。これは今後、公立施設が作品収蔵に取り組むにあたっての良い前例となることと思われる。

■写真作品に向かう姿勢の変化

学芸員が増えたことで、石元作品の整理研究や著作権管理なども行き届くようになるわけだが、それ以外の写真展の開催などについても影響を及ぼしている。

「写真の展示も増えていますね。これまでに巡回展ですが石川直樹さん、本城直季さん、 佐藤健寿さん等の写真展を開催しました。さらに数年前からはジャンルや年齢を問わず、学芸員が推薦した高知ゆかりの作家を取り上げるシリーズ「アーティスト・フォーカス」を立ち上げ、昨年後半には南国市在住で、パリフォト、AIPAD といった国際的アートフェアにも出品している角田和夫さんを採り上げました。これは当館独自の企画になります」

石元康博展示室　（写真提供：高知県立美術館）

もちろん石元作品に関してはさまざまな切り口による展示が年間通して企画されている。筆者が訪れたときには高知が生んだ植物学者、牧野富太郎さんをモデルにした NHK の朝ドラマ「らんまん」放映を記念して、「HANA」と「牧野富太郎記念館」の 2 シリーズが展

示されていた。こうした取り組みが県民の写真鑑賞眼を育てることは想像に難くない。

■中央に頼らない企画運営と高知人気質

さて、本稿を企画するきっかけとなったのは野町さんの写真展の10日ほど前に行われた「リトル・デス・クラブ」というドイツ人パフォーマー、バーニー・ディーターによるキャバレー・ショーがきっかけだった。高知県立美術館は音楽や演劇ができるホールも備えていて、ここではさまざまな作品を上演しているのだが、この「リトル・デス・クラブ」もそのひとつ。イギリスのエジンバラ演劇祭でこのショーに出会った藤田館長が、これは面白いと招聘を決めたのだが、通常は東京を拠点にして全国を巡演させるものだが、東京側のプロモーターから手が挙がらなかったので、諦めずに単独開催を決めたという経緯がある。今回の野町展にしても開館15周年記念の「聖地巡礼」は巡回展だったが、今回の「地平線の彼方から」は単独開催。既に東京他で開催した3つの展示をまとめたものとはいえ、一部未発表作品もあるし、何より展示スペースの違いがある。担当した学芸員の天野さんによれば、東京開催も考えて声をかけたが、色よい返事はなく結果として単独開催となったという。こうした強い独立心を感じさせる姿勢に高知の県民性を感じるのだが、それについてあくまでも個人の印象と断りを入れつつ、藤田館長はこう答えた。

美術館外観　（写真提供：高知県立美術館）

「私自身、実感はありませんけれど、高知人は反骨精神、反権力の意識は昔から強いかもしれません。例えば板垣退助、中江兆民たちの自由民権運動や、婦人参政権の発祥。大逆事件に巻き込まれた幸徳秋水も高知人ですからね」

さらにもう一つ。筆者は過去に移民としてブラジルに渡り、彼の地でアマチュアながらも膨大で印象的な作品を遺した大原治雄（1909～1999）の写真展を当館で開催したときに取材したことがある（2016年）のだが、家族で海を渡った大原のように海外移民が他県に比べて多く（さらに北海道開拓に向かった県民も多い）、ブラジル移民の父と呼ばれた水野龍も高知だ。さらに江戸時代最後期に偶然とはいえアメリカに渡ったジョン万次郎。なにより幕末期に海の向こう側をにらんでいた坂本龍馬と、海外を意識してきた人材が多いという説があり、もちろん石元・野町両氏もそこに含まれる。それについても尋ねると「そうかもしれませんね。地形上、山側はなかなか越えることができないから外との往来は大変。だから自然と出口が海に向かうのではないでしょうか」という答えが返ってきた。

野町和嘉写真展「地平線の彼方から」会場
撮影：渡部晋也

写真展初日に行われた野町さん自身によるギャラリーツアー
撮影：渡部晋也

■会場と作品のマリアージュ

最後になるが開催中の野町和嘉写真展「地平線の彼方から」についてご紹介しておきたい。今回の企画は先述した通り美術館開館30周年記念であると同時に、野町の写真家生活50周年の節目でもある。それ故に企画を進めた学芸員の天野さんには「野町さんの集大成を見せる」という意識があったという。

2つの展示会場に展示された215点の作品は、最初のサハラ旅行で撮影した砂漠の写真に始まり世界中の秘境やそこに暮らす人びとを捉えた「地平線の彼方から」。キヤノンの依頼で撮影を行った「世界遺産」。ロシアのウクライナ侵攻に刺激されて構成した「シベリア収容所1992」の3パートに分かれている。どの作品群も東京他で過去に展示されているものだが、会場が違うと全く印象が異なってくる。さらにアルジェリアのタッシリ・ナジェールの岩絵をほぼ等身大でプリントし、壁のほとんどを占める巨大な作品はまさに圧巻。改めて作品と展示する会場とのマリアージュを意識させる展示だった。

関係者によるテープカットも行われた写真展初日には野町さん自身によるギャラリーツアーも行われ、県内はもちろん近隣から大勢の来場者が会場に駆けつけた。折しもNHKの朝ドラマ「らんまん」で注目されている高知県。主人公のモデル、牧野富太郎ゆかりの植物園も一見の価値ある場所と見所が多いからこそ、時間がとれるなら併せて訪れてみてはどうだろう。

連載　7回目　写真の散歩道

ウクライナ報道から「戦争と写真」を考える

鳥原　学（写真評論家）
Torihara Manabu

●いま、報道写真が必要だ

ウクライナでの戦争が始まって、すでに1年半が過ぎた。この間、戦争についての写真を絶えず目にしてきた。当初はそれらの映像に強い恐怖と怒りを覚えた。だが、いまでは心を痛めつつも、それが薄れてしまったような気がすることもある。

そんなときスーザン・ソンタグが半世紀ほども前に、『写真論』で指摘をしていたことを思い出した。確かに衝撃的な写真は人びとの感情に訴え、その良心を呼び覚ますことができる。ところが私たちはいつしかその刺激にも慣れて、心の痛みは表面的な倫理感や政治的知識へと合理化されてしまうのだと。

その作用に抗するためには、だからこそより強い写真や映像の力が必要なのではないか。それは現地で起きていることを、多様な写真家がそれぞれの社会的角度と距離から見つめ、説得力豊かに表現し、感情だけでなく思考を促すような表現だ。誰もが映像を撮る総写真家時代であるからこそ、写真に対して読者の目が厳しくなるとともに、より優れたビジュアル表現への、関心とニーズも高まっている。

欧米の有力紙や国際通信社のWebメディアを見ていると、この点についてはかなり注力していることが分かる。報道メディアの足場が紙媒体からほぼ完全にウェブに移るなかで、それに対応している。

例えば『ニューヨークタイムズ』のサイトでは、開戦時点から優れた写真家によるレポートを定期的に掲載している。例えば昨年5月にアップされた、マグナムのパオロ・ペレグリンによる特集「ウクライナでの1カ月」では、モノクロ写真の深みのある表現で、戦争の痛ましさをよく伝えていた。

また一周年にあたる今年2月24日には「ウクライナの写真家たちが語る『忘れられない映像』とは？」と題した特集を組んでいる。戦争を取材した14人の写真家が、写真とともに、現地で最も印象に残った出来事について語っている。写真家それぞれの写真と言葉に触れるうちに、犠牲者に対する厳粛な気持ちがよみがえる。これら写真特集は写真自体が強いうえに、Web上の写真レイアウトが大胆で見やすく、伝わってくるものが大きい。

海外メディアのビジュアル報道への注力ぶりは、ヨーロッパの国際通信社でスタッフカメラマンとして働く私の知人からも聞いている。ウクライナで数か月を過ごした彼は、とくにこの戦争取材で動画と写真の役割が重くなってることを実感したと話してくれた。取材の主力はビデオグラファーとスチールカメラマンによる映像チームで、記者はその取材結果をもとに記事を書くというケースが増えているという。

このことは報道の視点にも反映される。記者が主体の場合だと、ひと所にとどまって証言を集めることが多いが、映像チームは常に新たな被写体を求めて移動を続けることになる。もちろん、こうした取材には危険がつきまとう。そのため取材前には専門機関で、戦場取材に関するトレーニングを受けることが義務付けられている。それでも犠牲者は多く、知人と組んでいたビデオグラファーも帰らぬ人となった。

こうした状況を含め、ウクライナ戦争はフォトジャーナリズムの大切さについて、再び考える機会を与えている。もちろん問題は、ウクライナだけに起きているわけではない。世界各地で、多くの写真家が危険と隣り合わせで取材を続けている。だが、ウクライナ戦争がそれらより注目されるのは、これが第二次世界大戦以来のヨーロッパ大陸における主権国家同士の総力戦であり、核戦争にエスカレーションしていく可能性を含んでいるためでもある。それに加えて、ジャーナリズムの世界が、いまだ欧米を中心としていることを示しているとも言えよう。

このことは、日本メディアの国際的な発信力の弱さを感じさせる。見ることの弱さは、見られることの弱さにもつながる。私たちが暮らす地域で起きた出来事や状況に関心がもたれず、しだいに海外に届かなくなるだろう。

さらに心配なのは、フォトジャーナリズムに対する関心の低さだが、とくにフリーランスの優れた作品を目にする機会の減少が影響している。2021年を最後に、毎年開かれていた「世界報道写真展」も開催されておらず、報道写真の先端に触れる機会は少なくなった。

今年度の同展の図録は、そんな状況を象徴してい

る。昨日、たまたまある人から見せてもらったのだが、掲載されている世界地図から日本列島とその周辺が消えていた。報道写真の世界における、日本の位置づけを象徴するもののように思えた。

●真実性の厳格化と表現の多様化

ウクライナ戦争に話を戻すと、戦争をめぐる写真や映像の種類とが、ここで一気に広がったことも重要だ。私たちは、前述したフォトジャーナリストが現場で撮影した写真や映像よりも、市民が撮影しTikTok、X（旧 Twitter）、YouTube などに投稿したものの方を多く目にするが、当然その中にはフェイクも高い確率で含まれる。

もともと戦争にはプロパガンダとフェイクニュースによる情報操作はつきものであり、映像技術の発達とともにそれは高度化する。ことに近年ではハイブリッド戦争と呼ばれるように、人の信念や価値観という認知領域をめぐる戦いがもうひとつの主戦場となった観さえある。

同時に、注目すべきはこうした映像を逆に利用して、何が起きているのかを精細に解析する、ファクトチェックの動きを加速させていること。つまり SNS のほかに一般に公開されている衛星画像を相互に突き合わせて精査し、実際は何が起きたのかを検証する「OSINT（Open Source Intelligence）」と呼ばれる調査手法が急速に発達してきた。

その例として、昨年ウクライナの首都キーウ近郊の町ブチャで起こった、虐殺の検証を挙げておきたい。この町を占領していたロシア軍が撤退した後に住民の虐殺が判明すると、ロシアメディアはウクライナ政府の捏造と主張したが、海外の大手メディアは衛星写真の時系列な解析などによってそれを反証した。

こうしたファクトチェックは、オランダに本拠を置くベリングキャットなど民間の機関が先駆けたものだが、報道機関もその技術を取り入れている。さらにグーグルなどのプラットフォーム企業と協同で、ファクトチェック専門の調査報道部門を開設するなど、活発な活動を行っている。この活動に注力するのは、それが業績に貢献するからだ。国際通信社の AFP が発表した 2020 年の業績報告書を見ると、ファクトチェックと映像コンテンツの充実が業績を伸ばした原動力だと書かれている。

ファクトチェックが厳しさをますと同時に、写真の信ぴょう性も厳格に規定されるようになった。歴史的に見ても写真家の表現意識が画像の過剰な改変に結びついたケースは少なくないが、デジタルが主流となった 2010 年代半ばには顕著な傾向となった。それに対応するために、報道機関のチェックも厳しくなってきた。

今年、ピュリッツアー賞の写真部門の応募規定も変更されたのも、そういった事例のひとつである。応募者は未加工の RAW データを添付し、提出作品が妥当かどうかを判断されることになった。つまりトリミングの妥当性や、写真の特徴が大きく変わるほど、画像の一部に改変がなされたかどうかが判定される。現在の報道写真には、先述したような感情に訴求できる優れた報道写真と、その真実性を担保できるデータの透明性が必要なのである。

興味深いのは、このようなフォトジャーナリズムの変化の中で、多彩な表現が生まれていることだ。今年ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエヴォで開かれた「WARM フェスティバル 2023」で注目を集め、『ニューヨークタイムズ』でも大きく取り上げられたイスラエル人のエドゥアルド・カプロフの作品「個人的戦争」もそのひとつだ。

エドゥアルド・カプロフ（Edward Kaprov）氏は、ソビエト連邦で生まれ育った。祖国がユートピアとともに世界地図から消滅した後、イスラエルに移住。以来、現在の祖国（＝イスラエル）と「祖先の土地（ロシアやウクライナなどの旧ソ連邦構成諸国）」を行来しながら、現実の状況を否定しソ連時代の高邁な理想を懐かしむ「ノスタルジア」に焦点をあてた撮影活動をしている。
（INPS Japan のホームページより）

同作はウクライナの前線で戦う兵士らを捉えたモノクロ作品だが、見どころはそれが「湿板写真」という点にある。彼はロシアの侵攻前に大量の薬品と 100 枚のガラス板をもって、ウクライナに渡っている。ロシアとウクライナの両方にルーツがあるという彼は、なぜこんな古い手法を使うのかという問いに「過去の戦争と比較することで、観客を混乱させたい。武器や携帯電話は変わったかもしれないが、戦争の本質は変わらないからだ」と答えている。

ウクライナ戦争ではクリミア半島の帰属も争われているが、170 年前にはここでロシアとイギリス・トルコ・フランスなどの連合軍が衝突する、クリミア戦争があった。このときイギリスのロジャー・フェントンが湿板によって撮影した写真が、世界初の戦争写真とされている。

このときから写真の機材も発表メディアも変わってきたが、事実を記録し人に知らせるという写真の役割とその価値は、カプロフのいう「戦争の本質」とともに変わってはいない。課題は多いものの、その原点をいかに守るかが私たちに問われている。

写真家のレンズに入った最初の戦争 – クリミア戦争（1853 ～ 1856 年）。おそらく史上初の公式軍事写真家であるロジャー・フェントン氏は、1855 年に馬で牽引した移動式写真室（上の写真）を現場に運び、戦争と破壊に苦しむ人々を撮影した。
（INPS Japan のホームページより）

＜座談会＞

変革の時を迎えて ～新任理事大いに語る

出席者：熊切大輔会長、大津茂巳理事（国際交流担当）、土屋勝義理事（総務担当）、寺師太郎理事（写真保存センター担当）、 松倉広治理事（ホームページ担当）、吉川信之理事（著作権担当）（氏名50音順）
司　会：小池良幸専務理事、伏見行介常務理事

2023年7月3日（月） 於：JCII会議室

―― 今年の役員改選に伴い、熊切新会長をはじめ5名の新理事が就任いたしました。本日は「新たなJPS理事会のスタート」にあたり担当部署も決まりましたので、新役員の紹介を兼ねて今後のJPS運営に関して抱負と意気込みなどを伺いたいと思います。

まずは自己紹介をお願いします。

大津　2008年入会の大津茂巳です。入会当初から国際交流委員会に参加し、JPS展の実行委員や企画委員を務めました。その経験から国際交流委員会の担当理事となりました。

土屋　2014年入会の土屋勝義です。皆さんのように委員の経験はないのですが、推薦枠で理事を仰せつかりました。総務委員会担当です。一般の人たちにもJPSの存在を知ってもらえるように活動したいと思います。2023年のJPS展の審査員を務めて、その大変さと大切さを実感しました。京都展の展示作業にも立ち会い、関西の会員の方たちと知り合えたのはよかったと思いますが、もっとコミュニケーションをとる必要性も感じています。頑張ります。

寺師　2015年に入会しました寺師太郎です。写真保存センター委員会を担当します。私がJPSに入会する動機となったのも実は写真保存センターと関わったからです。保存センターのデータベースをどう構築してゆくか相談を受け、これは写真を撮る側としてもきちんとやらないといけないと思い、JPSに入会しました。それで保存センターの委員をやっていたのですが、もっと責任をもってやりたいと思い理事に立候補しました。3回立候補して今回やっと当選しました。

松倉　2005年入会、ホームページ委員会を担当します松倉広治です。総務委員やJPS展実行委員を務め、ホームページ委員会が設立された時から委員長として活動してきました。

吉川　1999年に入会しました吉川信之です。入会直後に出版広報委員会に入り数年間会報誌の編集に携わり、2015年からは著作権委員会に入り「JPS写真著作権相談室（著作権よろず相談室）」に関わりました。2018年に「授業目的公衆送信補償金制度」が創設され、学校の授業などで写真を使用する自由度が増え、それに伴いその補償金を著作者がもらえるようになりました。しかし写真の著作者が不明確な場合が多く、その解決のためにデジタル写真での著作者の明確化の方法などの対策を考えてきました。

◆新たな活動に向けて

―― 今回の選挙で会長と5人の理事の顔ぶれが変わりました。仕事とのバランスなど、難しい点もあると思いますが、どのような覚悟で理事に立候補をされましたか。また変化を感じていますか。

熊切大輔会長

熊切会長　元JPS会長の父は写真の仲間やチームを大切にする人でした。その姿を一会員として見てきた影響は大きいと思います。JPS及び写真文化全体が活性化すれば、最

終的には写真家一人ひとりの活動にもよい影響が生まれるはずと考えました。だとすれば誰かが思い切って改革に着手しないと始まらない。今の自分に何ができるか、自問自答しましたが今回覚悟を決めて手を上げました。

大津茂巳理事

吉川　理事になると責任も発生しますし立候補するか、かなり悩みました。ただ委員長をやっていたときに、JPCA（日本写真著作権協会）との交渉の難しさや、各委員会の委員数が経費節減のために5人に制限されるなど、多くの問題に直面しました。自分が理事になり説明責任を果たしながら、問題の解決にあたりたいと思い立候補しました。50代の現役写真家が増えたので、現在写真の現場で起こっている事と、理事会や委員会での討論内容に「タイムラグ」を感じなくなったと思います。

寺師　写真保存センターの委員をやっていましたが、もっと動きを早くしたいと思い立候補しました。写真保存センターの将来を見据えてしっかり活動したいと考えています。

大津　以前のJPS展実行委員会は理事が交代すると、ガラッと変わって今までやってきたことが「更地」になってしまう。これではよくないと思い立候補しました。

――　そのような問題が出てきたのは、①委員会の縦割りの運営、②同一理事が同一事業を長く担当するなど、「不文律」で運営されてきたのが原因と思います。不文律ではなく誰が担当理事になっても継続した運営ができるルールを確立することが重要と思いますが。

松倉　それは大変重要だと思います。ホームページ委員会も限られた人数の中で運営するにあたり、次の代の委員たちにどのように引継ぎをするかを考えています。

◆つながるJPS ーアジェンダ

――　熊切会長よりJPSの今後の活動指針として「アジェンダ」が提案されました。この初の試みのねらいについて一言お願いします。

熊切会長　委員や理事として長年JPSの運営に関わってきましたが、新しい提案をしても簡単には通りませんでした。何かを決めよう、変えようとして議論するときに、目標・目的の共有化が大切と思います。今やるべき事、考えるべき事の問題点を整理してこのアジェンダを作成しました。これを理事や委員の皆さんが共有し、そして各自アレンジして活発な議論をしてもらえればよいと思います。

――　理事の顔ぶれが大きく変わり、会長のアジェンダも出て、会員の注目度が上がっていると思います。今まで地方の会員とのコミュニケーション不足が言われてきましたが、そこをどのように考えていますか。

吉川信之理事

熊切会長　アジェンダの最初に「つながるJPS」としたのもまさにそこを意識してのことです。コロナ禍の中で、会員同士や賛助会員はじめ写真関連メーカーの方がた、写真愛好家の皆さんとのつながりが希薄になってしまったのが現状です。まずはそこを変えて行きたい。

吉川　窓口の問題もあると思います。地方の会員の方が何か疑問や問題を感じたとき、JPS事務局に直接連絡するのはハードルが高いと感じられている方が多いようです。会員のために事務局があるのだから遠慮しないで問い合わせてください。事務局は丁寧に対応します。名簿をご覧になって、担当理事にご連絡いただいても結構です。

大津　僕は東京から京都の方に引っ越したので、関西地区委員会に入りました。そこで感じたのは東京の委員会とのギャップです。各委員会の仕組みが上手く伝わっていないので、「東京は勝手なことをやっている」と思われやすい。

土屋　今回JPS京都展の立ち上げに関わりましたが、京都の現場と東京の実行委員会との意思疎通にギクシャクした所があると感じました。もっと情報の共有が必要と考えます。

熊切会長　ある元理事が「理事の頃は見えていた状況が、理事を辞めたら情報が入りにくく活動が見えづらくなった」と話していました。今後は会員全体への活動情報の共有も重要な課題です。

松倉　ホームページは情報の発信には有効なツールですが、なかなか会員に見て貰えないのが悩みです。今後は、JPSニュース電子版などを活用し、会員に向けた情報を積極的に発信できるようなシステム作りが必要だと考えます。

◆コラボレーションの時代

寺師　写真保存センターの活動はホームページに助けられています。JPSのホームページを見た方から、写真家や写真原板の問い合わせが来ます。文化財のプロモーションをするときに、単に売り込むのではなく何かとコラボレーション（以下コラボ）することで、興味を持ってもらえる。そういう方法がJPSにも役に立つのではないでしょうか。

熊切会長　時代がどんどん変化していますから、JPSの体質やスタンスも変わらざるを得ない。今までお付き合いのなかった会社や団体、個人と業界を越えて手

をつなぎ、コラボして行くことがJPSには大切です。

土屋　写真保存センターと国際交流、著作権などが情報を共有しながらコラボして何か活動を始めるとか、アイディアはあると思います。

松倉広治理事

熊切会長　委員会同士も縦割りをなくして活動ができたはずですが、「餅は餅屋」的な発想を変えられなかった。今後は環境も整ったので各委員会同士の横のつながりを活発化させてほしいと考えています。

土屋　今までは会員同士も他人の関係でしたが、コロナ禍でズームやチームスのオンラインコミュニケーションが浸透してきました。それらを利用して会員同士がもっと連絡を取り合うことが出来るようにしたいと思います。

吉川　私が入会した頃、各委員会には担当理事の助手や弟子を経験した委員が多くいたように思います。地方会員の間にもそのような構造が残っているのではないでしょうか。その関係を変えて、地方の会員と会長や理事、委員会が直接つながる、地域を超えて移動するノマド（遊牧民）のような意識を持つ必要があります。関西にもオンラインが出来る人は沢山いますから、今後はズームやSNSの得意な人たちがもっと積極的に活動して、新たな分野を構築できる環境にしたい。

――　オンラインなどが得意な若手会員たちがもっと前面に出て活動いてほしいということですね。

寺師　昔から地方で写真をやってきた人たちは確実に「地方の名士」なんです。その人たちがつないで来たものを声のメッセージとして、オンラインを使って若手の会員が発信するのもよいのではないでしょうか。

吉川　私は少し考え方が違います。JPSはプロの集団ですから、その時代の写真家たちに合わせて、常に変化してゆく必要があると考えます。フィルム写真時代のJPSがあり、デジタル写真時代のJPSがあり、今後は生成AIにどう対処するか問われるJPSがそこまで来ています。やはり歳は関係ないのですがJPSは現役の写真家たちを中心にしないと・・・。

熊切会長　それぞれ意見のベクトルは違うかもしれませんが、お二人の意見は良く分かります。JPSは75年の歴史のある団体ですので、先輩方のレガシーを受け継ぎながら、新しいことも思い切って挑戦する。ハイブリッドな考え方で化学反応を起こすことが大事かなと思っています。

土屋勝義理事

吉川　そうですね。

土屋　先輩たちから教わってきた事を精査して次の世代に伝えて行くのも、私たち理事の役目だと思います。

寺師太郎理事

大津　まさに今の50代の写真家たちは、写真がフィルムからデジタルに、カメラがミラーレスになった世代です。そういう意味で熊切会長が出した「アジェンダ」が一つの指針になると思います。

吉川　セミナーやシンポジウムをやっても参加者は年配の方が多い。それが悪いのではないけれど、次の世代につなげて行くために若い人たちに参加してほしい。

土屋　それは少し前までの写真教室なども同じでしたが、いろいろ工夫したので最近は若い人たちの参加も増えました。写真の裾野が広がり、写真を始める敷居も少し下がった気がします。

大津　私はプロの組織のJPSに憧れがあって、入るための高い敷居をクリアーするために努力しました。今は写真学校に行かずに、一般の大学を出てファッション写真や学校写真、家族写真や婚礼写真を撮る人たちが増えています。カメラの性能や現像ソフトの性能が良くなって、写真の基礎をあまり知らなくても写真が撮れる時代になりましたが、ただ適正露出の大切さなどの基礎知識が不足しているので、仕事の関係で彼らから撮影データを受け取り、私が調整するわけですがとても大変です。そのような若い写真家たちと仕事をする機会が多いので「JPSに入らない？」と誘うのですが、彼らにJPSの名前が浸透していないのです。

寺師　今後の10年間はさまざまな局面で「揺り戻し」が来ると私は思っています。デジタル世代の若い写真家たちに、アナログの魅力をつないであげて、出来たらJPSに入ってくれないと誘うのもありかな。（笑）

松倉　私もJPSに憧れを抱いて入会した一人です。学生の頃は、講師の写真家たちがJPSの話をたくさんしてくれました。やはり宣伝は必要だと感じます。学生や若い写真家に、JPSの魅力を伝えていくことが大切だと思います。

土屋　紙媒体が減って、インスタグラムで写真を発表する人たちが増えました。すごく稼いでいる人たちもいますが、何処までが「写真家」といえるのか、インスタグラムやユーチューブを否定するつもりはありませんが線引きが難しい。

吉川　JPSの魅力はやはり会員になれば一人前のプロとして認められるところにあります。最初に出版広報委員会に入りましたが、委員会の後は飲み会になる。そこでさまざまな分野で活躍している先輩写真家の話が聞けることも魅力でした。

土屋　撮影現場では他の写真家とあまり一緒にならな

いし、そんなに会話もしないですからね。

◆対面とオンラインの使い分け

吉川　現在は垣根を外してオンラインで各地の写真家と話をすることに期待しています。例えば東京の写真家が抱えている著作権の問題と、九州の写真家が抱えている著作権の問題は少し違うんですよ。離れていてもオンラインで集まってそういう問題を話し合いたいというのが、私が理事に立候補した理由の一つです。プロ同士が鎧を脱いで話し合える場を作るというのもJPSの存在理由の一つだと考えています。

大津　関西有志展の実行委員をやっていて思うのですが、参加者は北関東圏の人が意外と多いです。野町前会長などの著名な写真家と写真で言葉が交わせることや、同じ写真展の図録に自分の名前があるといって感謝されました。

土屋　コロナ禍で中止になっていた撮影会が再開されて、今年の春地方に行ってきました。参加人数はコロナ前の80％ぐらいでしたが、熱気が伝わってきました。改めて対面で話をすることの大切さを感じました。

吉川　私がJPSに入会した1999年の会員数は約1,800名、それが今ではその3分の2です。使える事業予算も3分の2になっているわけですから、何に使うかしっかり考える必要があります。今話しているのはJPSの写真家たちと写真愛好家の関係で、対面で写真の話をすることも重要ですが、私は離れた会員同士はやはり経費の点からもオンラインが便利だと思っています。目的に合わせて対面とオンラインの二つの方法を組み合わせて進めて行くことが大切だと考えます。

大津　この問題はJPSの会員展にもいえると思います。会員からは経費の問題はあっても写真はモニターではなくやはりプリントで展示してほしいという声がありました。新しいコンテンツとして会員だけの写真展という事業を考えることも必要かなと思います。

◆今後の展望

――　先日、この号に掲載されている「現代写真の動向」をキーワードにした座談会を開催しました。その時複数の参加者からJPSに対する期待の声が上がりました。また業界が低迷するときこそ新しい事にチャレンジする好機、との発言もありました。JPSの事業計画や委員会の構成などは急には変えられないのですが、3～4年先を見据えて、どのようなJPSにしたいですか。

伏見行介常務理事

松倉　やはり憧れを抱いてもらえるような会にしたいですね。ホームページに会員の作品を発表できる場を作るなど、JPSを若い世代にもアピールできるようにしたいです。ホームページはJPSや会員の情報発信のツールとして重要だと考えています。情報発信をいかに効果的にできるかをこれからも考えて行きたいです。そして、ホームページ委員会だけでやるのではなく、各会員がJPSや日本写真家協会のハッシュタグをつけて個人のSNSなどで情報をどんどん発信してほしい。まずは、JPSの存在を知ってもらうためにも「ハッシュタグ運動」を広めたい。

小池良幸専務理事

吉川　私はJPSのホームページに期待しています。松倉さんがいろいろ工夫してくれましたので、ホームページの利便性が向上しました。また会報の「著作権研究」の記事に関してはWeb検索でかなりの確率でトップページに出てくる。これはJPSからの貴重な発信の場になっています。

熊切会長　アジェンダにも書きましたが、JPSがどういう存在で何をしているのか世間にあまり知られていない。それを解決するためにJPSの活動内容やメッセージの積極的な発信が必要だと思っています。

寺師　今後、教育分野の「授業目的公衆送信補償金制度」が実施され、その社会への影響を上手く利用できれば、著作権の切れた写真でも間接的に多様な価値を生み出すことは可能だと考えています。

吉川　最近はマスメディアなどで生成AIの問題が急速に浮上し、AIの専門家などの議論が盛んですが、まだ写真家の立場からの発言がほとんどありません。JPSとして生成AIの問題にもっと積極的に発言できるようにしたいと考えています。

大津　もっと尊敬されるJPSに私もしたいですね。JPS展は完成されたシステムなので、変える必要はないと思うのですが、新しい形の会員の写真展を考えてもよいと思います。今の写真展事業委員会のメンバーはそれが出来る実力があると思っています。個人的には写真家の本分に戻って写真展などで作品を発表し、JPSというのはこういう写真を撮る写真家の集まりだとアピールしたい。

熊切会長　以前から言っている事ですが、JPSの一番の資産は「写真家」です。これをいかに有効活用できるかが今後のJPSの発展のカギになってきます。そのために会員の写真発表の場を増やしたり、会員の皆さんに役立つ新たな価値を構築することが、私を含め理事会や各委員会のやるべきことと考えています。

――　本日はどうもありがとうございました。

（構成／出版広報委員・飯塚明夫、
撮影／出版広報委員・桃井一至）

著作権研究（連載 55）

生成 AI 画像と写真著作権

吉川信之（理事・著作権担当）

2023 年に入って、メディアは生成 AI の話題でもちきりとなっています。生成 AI とは、既存の著作物などを元に高品質なテキストや画像などを生成することができる人工知能のこと。以前から、開発・使用されてきた技術ですが、今年に入って急激に進歩し、社会問題となっています。新聞やテレビ、インターネットなどのニュースでも連日のように取り上げられ、先日広島で行われた G7 サミットの議題にもあがるなど、社会問題となっています。

（著作権委員会）

生成 AI とはコンピュータに読み込んだデータをもとに高品質な画像やテキストなどを生成する人工知能のこと。以前から開発・使用されてきた技術ですが、今年に入って急激に進歩し、社会問題となっています。画像の生成でも、一見しただけでは写真との区別がつかないようなものが出現しています。

生成 AI には、どんな問題があるのでしょうか？

まず、画像などを作成するために高度なスキルが不要になったことが大きな特徴です。クリエイティブをおこなうためには専門の技術が必要でしたが、この壁が低くなってしまいました。人間が使う言語でプロンプト（指示）を入力すると、生成 AI は既存の著作物を読み込み、再構成して出力します。その過程で、私たちの著作権は守られるのか。著作権法はしっかり機能してくれるのだろうか…などの検証が必要でしょう。

変化のスピードの問題もあります。ある専門家は、対話型チャットサービス・チャット GPT について「今まで賢い小学生程度だった能力が、今回のアップデートによって一気に大学生レベルになった」と説明しています。これは生成 AI 画像についても同様です。人間の認識の変化に比べて生成 AI の進化のスピードが極端に速いことを意識することも必要でしょう。

●簡単にフェイク画像が作られる

インターネット上では生成 AI によるフェイク画像の騒ぎが度たびおこっています。2023 年 3 月に「白いダウンジャケットを着たフランシスコ・ローマ教皇」の画像が生成 AI で作成され、拡散・炎上しました。写真だと信じてしまうような画質の生成 AI 画像の出現に社会は大きな衝撃を受けました。

BuzzFeed News は次のように報道しています。

「この画像は、テキストから画像が生成できる AI、Midjourney を用いて作成され、画像掲示板などに掲載されたのちに一気に広がった。取材に応じた作成者は、中西部シカゴ周辺に住む 31 歳の建設労働者で、面白いものをつくろうとした」。従来なら必要だった専門的なスキルや素材の準備、膨大な時間が不要になってしまったのです。ほかにも「トランプ前大統領の逮捕場面」や「著名人のデート現場」「米国防総省で爆発」などといった、フェイク画像がインターネット上で拡散しています。

国際的な写真コンテストで最優秀賞を獲得した作者が「受賞作品は人工知能（AI）で作成したもの」だと明かし、受賞を辞退したニュースも話題になりました。「ドイツのアーティスト、ボリス・エルダグセン氏は、今年のソニー・ワールド・フォトグラフィー・アワードに作品を応募。一般応募のクリエイティブ部門で最優秀作品に選ばれた。エルダグセン氏は、写真の未来について議論を起こすために応募したと述べた。（BBC ニュースジャパン 2023 年 4 月 18 日）」

国際的な写真コンテストの審査員が生成 AI 画像であることを見抜けず、入賞が確定されてしまったのです。一般の人びとが目にした画像を、現実を撮影した写真なのか、生成 AI で作成したフィクションなのかを判断することは難しいといえましょう。

写真とは被写体を撮影することで成立するもの。写真があれば、被写体が存在したことは事実です。しかし、写真と見間違うような画像が生成 AI で簡単に作成でき、拡散されるようになってしまいました。

写真家の対策として、写真を公表するときに撮影者名の明記を徹底することが考えられます。著作権の表示としてⓒマークがよく使われますが、これは著作権の持ち主（著作権者）を表し、写真以外の著作物にも使用されます。公開する写真に「撮影○○」と記載すれば、現実の被写体を撮影した写真であることが説明ができ、氏名表示権（著作者人格権）も行使できます。将来的には撮影者名を表すⓒマークのような表記方法の検討も必要になるだろうと考えます。

●生成 AI で作成した画像は誰のものか？

ところで、生成 AI で作成された画像に著作権は発生するのでしょうか？答えは「NO」です。

日本の著作権法は、著作物について、次のように定義しています。

「思想又は感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するものをいう（著作権法第２条1)」

わかりにくい文章なので説明します。

まず「思想又は感情」は人間だけがもつものであると考えられるので、人間が作り出した作品だけが著作物になり、著作権が認められます。「創作的に表現したもの」であることも重要です。「ありふれた表現ではなく創作的に表現したもの」であること。そして、実際に表現されたものであることが必要です。作者の頭の中にあって、まだ表現されていないアイディアやイメージに著作権は認められません。

生成 AI で画像を作成する場合にはどうなるでしょうか？　画像を生成するために人間が生成 AI にプロンプト（指示）を入力しますが、それはキーワードであり、単なるアイデアです。それをもとに画像の作成を生成 AI がおこなえば、作成した画像には著作権は発生しないと考えられます。

しかし「プロンプト入力による制作を何度も繰り返し、生成 AI を道具として使って作品を作り上げた場合には『思想または感情の表現物』になる可能性もある」と指摘する専門家もいます。今後の裁判の判決などをチェックしていくことが大切です。

●生成 AI 画像は既存の著作物の翻案

既存の著作物をもとに、新しい著作物を作ることを「翻案」と呼びます。翻案を行うためには元の著作物（原著作物）の著作（権）者の許諾が必要（著作権法 27 条）となり、元著作物の著作者は、新しく作り出された著作物（二次的著作物）の著作者と同一の権利を占有する（同 28 条）とされています。

生成 AI で既存の著作物を翻案した場合の著作権侵害について、文化庁著作権課では「生成 AI が作成した生成物の著作権侵害の判断は人が行った場合と同じ（令和５年度著作権セミナー「AI と著作権」2023 年 6 月 19 日)」と説明しています。つまり、既存の著作物をもとに生成 AI によって作成（翻案）された画像には、もとになった著作物の著作者に著作権が発生することになります。

しかし、問題は簡単ではありません。翻案権侵害の認定が難しいのです。侵害を証明するためには２つの要素を同時に満たしていることが必要となります。

それぞれの著作物の表現上の創作的な部分が類似している「類似性」と、新しく作成された著作物が既存の著作物に依拠して作成された「依拠性」です。裁判での権利侵害の認定基準はかなり厳しいものとなっています。これを広範に認めてしまうと、後発の新たな創作の可能性を妨げてしまう、という説明がされています。

しかし、これは人間が著作物を作成することを前提に作られたルールです。生成 AI は人間と比べ物にならない、大量で継続的な作業が可能です。現状のままではプロフェッショナルの写真家によるクリエイティブの再生産ができなくなってしまう危険があり、新しいルール作りが必要だと考えます。この問題に対して、世界中のアーティストやクリエイターが警鐘を鳴らしています。

●著作権法の対応

今年になってから新聞やテレビ、インターネットなどで頻繁に生成 AI についての問題が取り上げられるようになりました。そこでは「日本の著作権法では、権利者の許諾なしに AI に著作物を読み込ませて使用させることができる」という説明がひとり歩きしてしまっていると感じます。その条文とは、

「著作物は、次に掲げる場合その他の当該著作物に表現された思想又は感情を自ら享受し又は他人に享受させることを目的としない場合には、その必要と認められる限度において、いずれの方法によるかを問わず、利用することができる。ただし、当該著作物の種類及び用途並びに当該利用の態様に照らし著作権者の利益を不当に害することとなる場合は、この限りでない。（著作権法 30 条の 4)」

これは、「著作物の経済的な価値とは人間がその内容を鑑賞するための対価である。機械の開発に使用した場合、機械は著作物を鑑賞することができないので、著作者の利益を損なうことにならない」という考えかたです。著作者の権利を損なわない使用だから、使用許諾なしに無料で使うことが出来るという論理です。

このことについて文化庁著作権課は「入力（AI 開発・学習）段階と出力（画像生成）段階での著作物の使用を分けて考えることが必要」だと説明しています。

人工知能の開発のためだが、あくまでも機械やソフトの開発用途（入力・開発）に限られるということ。人間が鑑賞するための画像を生成 AI で作成する場合には、この規定は適用されません。著作者の許諾が必要です。加えて「著作権者の利益を不当に害することになる場合にはこの限りではない」との記載もあり、著作物の売り上げなどに影響が出る場合も同様となります。この部分が説明されないまま報道されていることが多いように感じます。

生成 AI 画像の問題はまだ始まったばかりで、これからどのように変化してゆくかは不透明です。写真家がこの問題を理解し、著作者の立場からリアルタイムで意見を発信してゆくことが大切だと考えます。

※日本写真家協会は 2023 年 8 月 23 日、「生成 AI 画像についてその考え方の提言」を発表しました。
詳しくは協会のホームページをご覧ください。https://www.jps.gr.jp/about-generated-ai-images/

＜座談会＞

写真の現在、そして未来とは？

出席者：尾崎たまき（写真家・JPS 会員）、笠原美智子（アーティゾン美術館副館長）、タカザワケンジ（写真評論家）、塚崎秀雄（東京カメラ部（株）代表取締役）、馬場道浩（写真家・JPS 会員）（氏名 50 音順）
司　会：伏見行介常務理事　　2023 年 6 月 24 日（土）　於：JCII 会議室

写真というメディアが果たす役割とは何か？撮影機材、SNS を始めとする媒体が多様化する中で、この問いに対する答えはいよいよ複雑なものとなっているように見受けられる。そこでここでは、現代の写真メディアの先端にいる方がたにお集まりいただき、現代の写真の特質、求められる役割について語っていただいた。

◆希薄になった写真界という概念

―― 今回の座談会を企画しましたのは、まず私たちJPS が、時代に合わせて変わらなければならない、今はその時期に来ていると感じたことによります。けれども、写真の世界はいよいよ複雑になっているようにも感じる。それでは､今の写真界はどうなっているか、そして、これからどうなっていくのだろうかということを、皆さんからお話を伺いたいと考えた次第です。尾崎さんは、まず写真事務所で写真を撮り始め、その後、水中写真家に師事してスペシャリストになり、そこからまたフリーになられました。つまり、JPS の会員の典型でもあります。笠原さんは写真のキュレーターとして、東京都写真美術館など、長く第一線で御活躍を続けていらっしゃる。タカザワさんは写真評論家であり、ご自身でも写真を撮られていて多くの側面を持っていらっしゃる。塚崎さんは「東京カメラ部」という SNS も視野にいれた写真コミュニティーを主宰されている｡馬場さんは広告写真で活躍を続ける一方、今は大学でも教鞭を執られている。

つまり、写真という繋がりはあるけれども、それぞれの仕事のスタイルというのはバラバラです。その上で、皆さんに自由に写真のことを語っていただきたいと考えました。座談会として纏まる必要はないと思っています。

まず、笠原さんにお伺いしたのですが、今の写真界をどのようにお感じになっているでしょうか。

笠原美智子 氏

アーティゾン美術館副館長
1989 年に東京都写真美術館学芸員に就任し、以後、写真展の企画、開催を積極的に手掛ける。2008 年から公益財団法人・石橋財団アーティゾン美術館副館長、著書に『ジェンダー写真論増補版』（星山社、2022 年）他。

笠原　私は東京都写真美術館に 1989 年に入り、定年退職まで学芸員をして、その後にアーティゾン美術館という、ブリヂストン美術館を前身とする新しい美術館に入りました。 私の専門は美術館における写真です。全ての写真を対象と考えるわけではなく、表現としての写真を考えるということです。私は、修士号はアメリカで取ったのですけども、研究の対象はアメリカの近代の作品、ジェンダーの視点の作品、それから現代作品という 3 本の柱です。 そういう視点では 30 年間ずっと写真を見てきていますが、それ以外の分野の写真が分かっているかとい

うと、分かっていないと、まず告白です。今、写真界はどう思いますか？と伺われたのですけど、そもそも写真界というものがあるのかどうか。写真表現をしている方、写真を生活の糧にしている方など、色いろな方がいる非常に広い世界ですから。

1980年代くらいからだと思いますけれども、写真とコンテンポラリーアート、現代美術が非常に近い存在となり、現代美術と写真、映像には、全然ボーダーがないのですね。現代の写真の特徴を一言でいうと多様化です。一つの潮流を追うというのがなかなか難しくなってきているというのが、80年代以降から50年間くらい続いているという印象があります。

―― 今、笠原さんは80年代とおっしゃったのですけれども、その前の時代には、そのような潮流はなかったのですか？

笠原 日本の美術館が写真を扱うことが諸外国よりも遅れました。アメリカよりも50年遅れ、ヨーロッパからも30年遅れている。日本の教育機関は技術教育にかなり偏っていて、アメリカや、ヨーロッパのアーティストが大学で先生をやりながら作品を発表して生活をするというような、そういうスタイルが日本ではとれないので、日本の写真家はコマーシャルとアートの二足の草鞋でやってきた。かつては雑誌、グラフ誌、写真集などがある程度しっかりしていたのですが、最近はそれも苦しくなってきているというようで、そのような環境の違いが、写真家の在り方にも大きく影響しているように感じます。

タカザワ 同感です。1970年代に出た、渡辺勉さんの『現代の写真と写真家』という本があります。この本では写真家35人にインタビューをして、本が書かれているのですけど、いちばん歳上が73歳の木村伊兵衛さん。最年少が26歳の十文字美信さん。渡辺さんがこの本のあとがきで書いているのですけど、35人の写真家の中で、日本写真家協会に入っているのが半分しかいない。これにちょっと驚いたと。上の世代の人に話を聞いているとみんな写真界という言葉を使っていて、自分たちでまとまってやっていこうといっている。戦後のグラフジャーナリズムを通ってきた人たちには写真界という意識があったけれど、それ以下の年齢の人たちに、森山大道さんあたりの世代からは、もうそういう意識じゃなく、それぞれ自分たちの表現をやっていきたいと。 メディアと関わるというよりは、自分たちが何かを作っていくというふうに切り替わってきた。そこに先ほど笠原さんがおっしゃったような現代美術の接近というのがあった。デジタルの登場で、グラフジャーナリズムが崩壊した今、私が写真界という言葉を聞いて思い出すのは、月刊『アサヒカメラ』なのです。カメラ雑誌、とくに『アサヒカメラ』がなくなった時点で、写真界というのはほぼ幻になったのではないか。ただ、今は写真をテーマにした小さいコミュニティがたくさんあって、そこに希望があるのかなと思っています。

―― 今はもう、広い写真界の中でJPSの会員になるというフォトグラファーは、ほんの少ししかいない。ところがこれまでのJPSの代だいの会長が、昔ながらの写真界という意識を持っていて、実際の写真状況との認識の差がすごく大きくなっているというのが、現実なのだと思います。塚崎さんは今までと全く違った切り口で「東京カメラ部」を始められましたが、何に目をつけられたのか、マーケティング的なものなのか、いかがでしょうか。

タカザワケンジ 氏

写真評論家、文芸書評、インタビューほか。東京新聞夕刊に美術展評を寄稿。Photo & Culture, Tokyo で「写真を編む人へ」連載中。『Study of PHOTO』日本語版監修。金村修との共著『挑発する写真史』。IG Photo Gallery ディレクター。

塚崎 東京カメラ部は、何かに商機を見出して始めたものではありません。ただし、写真の世界はもっと広がると思っています。 全ての表現活動は、自分が発表したいもの、技術を含む制作環境、発表の場が必要です。写真においては、カメラがデジタルになったことによって、制作環境が劇的に変化して誰もが相当レベルの写真を撮れるようになった。更にSNSのように誰もが世界に向けて簡単に発表できる場が発達した。私たちは、毎年「東京カメラ部10選」として10人の写真家を選んでいます。この中には、フィルム時代であれば活躍することが難しかったと思われるようなハンディキャップを抱えている方もいらっしゃいます。つまり、今は大きくハードルが下がり、参加者が増え、発表の場が増えています。社会全体としてみれば、より幸福な状態になってきているといえます。今の課題は、従来の事業モデルが崩れて写真家が収入を得にくくなったことです。それは写真家よりも、私たち、産業側、新しい事業モデルを考えて作り上げる側に責任があるかなと思っています。

馬場 私は、今64歳なのですけど、自分が10代、20代の時には、JPSとかAPAに憧れていました。けれども、今の若い子はJPSとかAPAに興味がないのです。私たちがこれから会を盛り上げていかないと、会員数がどんどん減っていくことになります。私も広告写真のプロとして色いろな仕事をしてきたけれど、今は誰もが簡単に写真を撮れるようになった。だから、逆に仕事として成立しづらくなったという難しさを感じますね。

―― 尾崎さんはどうですか？

尾崎　私はもともとスキューバダイビングをやっていて、水中写真を撮りたいと思っていたのだけども写真のことが分からなかった。そこで、それまでの仕事を辞めて、広告写真を撮るスタジオに入って写真を勉強しました。それから中村征夫さんの所に、押しかけて弟子入りをして、今度は独学ではなく、水中写真を1から先生に教えてもらったという経緯があります。水中写真は、フィルムの時代にはレンズ交換もフィルム交換もできなかった。カメラを2台持っていって、72枚しか撮れなかったのです。それがデジタルに変わって、本当に何枚でも撮れるし、粘れるし、よいシーンが撮れるまで、本当に何枚でも撮ってしまうのですよね。 今はアマチュアの方も、誰もがカメラを持って海に入れるようになっています。ただ、自分としてはカメラがデジタルに変わった時にはちょっと葛藤があって、写真を1枚1枚撮るということについて、色いろ考えました。

◆デジタルカメラは写真の枠組みを変えるのか？

――　先ほど笠原さんは、ファインアートとしての写真で、表現というものをずっと見てこられたという話をされていましたが、写真がデジタルになって、表現としての写真が変わったということはお感じになりますか？

笠原　中にはデジタルでしかできない作品はあるけれど、その技術をどのように使うかはアーティスト次第ということになりますから、技術で作品のコンセプトまで変わる作品は少ないと思います。

タカザワ　写真という枠組みを考えると変わったのかもしれないのですけど、鑑賞する側からすれば、定義は何でもよいわけですよね。今ほど写真が多様に表現できる時代はなくて、AIで画像生成をしている人がいる一方で、ダゲレオタイプで作品を作っている人もいる。今の時代は誰でも写真を楽しめる時代なのですけど、それによって、これまでは特権的にカメラを使うことでお金を得ていた人が、お金を得られなくなった。ですから、今の状況がすごくいいなと思っている人と、困ったなという人が同居しているという状況で、歴史的に考えてみると、写真が誕生、発明された時に、画家の人たちが困ったであろうことと同じだと思うのです。けれども、その時は肖像画家が写真家に転向する、というようなことをやっていたわけですから、今、写真家をやっている人たちは、技術と、今までさまざまな作品を見てきた蓄積があるので、画像生成系AIに適切なプロンプト（命令）を書けるだろうし、ディレクションもできると思うのです。今までの写真家の仕事内容というのが、次の時代に写真家と呼ばれるかどうかわからないけれど、写真の文化の蓄積が仕事になるように考えてゆけるのかなと思います。

塚崎秀雄 氏

東京カメラ部（株）代表取締役　東京証券取引所に在職中にMBA取得のため渡米。その後、起業を目指して転職。ソニーでウォークマンの開発に携わる。2007年に独立。2012年に立ち上げた「東京カメラ部」が日本最大級の審査制投稿サイトへと成長。

――　私の世代とか、馬場さんの世代は、最初から写真を一生の仕事だと思って関わるんですよね。だからそういう目から見ると、塚崎さんのところで出てらっしゃる方は、将来のことをどう思っているのかなと考えてしまうことがあります。

塚崎　東京カメラ部には、プロ写真家として年収数千万クラスの方も趣味で写真を発表する方もいます。全体としてみると、自分が生きていくための収入源と写真を捉える方という割合はそんなに高くはなく、生きがいの要素として写真家になっていらっしゃる方が多いのかなとは感じます。ただ、これが変化なのかは数字がないのでわかりません。写真専業の方の割合が、日本は海外よりも高い、高かったのではないか？とも感じています。海外は芸術に対する助成金が日本よりあるのでしょうが、日本には海外では少ないカメラメーカーの仕事があるので。私の勘違いでしたら申し訳ないのですが、日本は、もしかしたら恵まれていたゆえに、今の課題感を強くお持ちになられているのかもしれません。

――　馬場さんは大学で写真を教えているわけだけれども、現代という時代は、テクニックを学ぶ前に食べられるようになることもあるわけで、テクニックを覚える必要などないと考える学生もいるのでしょうか？

馬場　いるでしょうね。例えばボトルをきれいに撮ろうと考えたとして、それをお金をもらえるようなクオリティーで撮れるようになるには1年では無理なのです。絶対に。学校の授業は1年、30回の授業でやっているのですけれども、私は1回の授業で、今日はこれを撮りましょうということを1回経験ができればそれでよいと考えています。学生には、1年の授業では広く浅く教えているのです。 それで広告写真をやりたいと思ったら、そちらの方に進めばよいし、今はネットでも写真を撮る方法をいくらでも見ることができますよね。　YouTuberがやってらっしゃるし、自分で勉強しようと思ったら、いくらでも勉強できるのです。

――　私たち撮る側からすると、写真がデジタルになってどんどん簡単になった。それはよいのですけど、今度は発注者側のレベルがすごく下がってきている。馬場さんが「ボトル1本撮れるようになるのに1年以

上かかる」っておっしゃったけれど、似たような写真であればデジタルでいくらでも撮れてしまう。だけど、発注者側がそこで止まっちゃって、何でもすぐそこでOKだ。 あるレベルで止まっちゃうっていうのは、総体的には写真の表現とか、仕事をどんどん減らしているのかなと思う。不況になると、写真を発注したことのないデザイナーっていうのが出てくるわけですよ。写真はストックフォトでもよいわけだし、現場に立ち会ったことのないデザイナーや、編集者が出てくる。

馬場道浩 氏

写真家　凸版印刷株式会社に勤務後、1990年にフリーランスの写真家として独立。以降、現在まで広いジャンルの広告写真や、『週刊朝日』の表紙写真、ホテルのアートワークなどで活躍。2018年APAアワード2018広告作品部門にて優秀賞など多数。

尾﨑　ライター、フォトグラファーが、編集者と最後まで会わないで、仕事が終わってしまうってこともありますよね。

タカザワ　カメラのデジタル化とインターネットの隆盛、出版業界の凋落はつながっていますよね。95年をピークに出版物が売れなくなっていった。今は印刷物自体を作らなくなっているから、印刷をしたことがない編集者もいる。ウェブでは、ウェブの記事は液晶で見るので、端末のモニターによって色は全然違うじゃないですか。だから、写真をあんまり厳密に考えないですよね。 こだわっていた職人的なものは、出版文化と共に滅びつつある。

――　撮る方も、広告写真家協会のようなところでも、新人写真展をやりたいといっても、ほとんどプリントしたことがなく自信がないという人がいる。

タカザワ　あり得ますよね。

――　では、何で仕事をしているのって聞いてみると、ウェブで終わってしまっている。

タカザワ　馬場さん、学生から聞かれません？画像生成AIが普及したら写真はどうなるのですかって。私は学校でやっぱりよく聞かれますよ。

馬場　私が学生にいっているのは、世の中の写真はデジタルでよいし、私も100%デジタルで仕事しているのですけど、デジタルデータは信用してないといっているのです 仕事の写真は、印刷物やウェブが出来上がれば、そのデータはなくなってもよいと思っているのだけど、例えば家族がいて、家族の写真があるとしたら、それは取っておきたいじゃない。でも、そのデータって10年も経ったら開けなくなることがあるかもしれない。それなら、今日撮った家族写真を、コピー用紙でもよいから、プリントアウトしておけっているのです。1年に1枚でよいからプリントしておく。そんな話は学生にしています。

――　私は制作プロダクションをやっているのですけども、結局ね、ニッチな産業で残っていくしかないなと思っているのです。生成AIになるのも当然だし、そういう、なんていうのかな、宮大工のような世界は残るのかなと思っています。

馬場　宮大工という表現はよいですよね。

◆もっと海の外に目を向けたい

――　あともうひとつ感じることは、日本の若い人は全然外に目が向いてないのですよ。例えば、アジア・ヨーロッパ財団というのがシンガポールにあるのですけども、世界中の写真の学生に声をかけて、作品を送ってもらい、OKの人は今年はシンガポール、来年はヨーロッパという具合に、夏に3週間くらい合宿をして、課題を与え、最後に写真展までやるという。そういう場所に、日本からは誰もいないのですよ。写真学校に声をかけても、学校も学生も英語が分からないから、誰もこないのだという。けれども、韓国の学生だとか、フィリピンの学生さんだとか、あとモンゴルの学生もいる。海外にはチャンスがあるのに、全く外に行ってない。日本にはある程度の写真人口がいるので、国内マーケットで食べられちゃうのですよね。 韓国のフォトグラファーなどは、国内マーケットが小さいのでどんどん外に出て行っているのに、日本の若いフォトグラファーや学生って、どうしているのかなって思います。

タカザワ　今、写真の専門学校の学生の半分は留学生ですよね。

――　そうです。

タカザワ　日本の学生よりもお金を持っているから、写真集をバンバン買いますよね。日本人の学生は全然買わない。お金がないのです。

――　私たちの仲間にも写真の学校の先生がいるのですけど、大学であれば入るのが大変だけれど、専門学校であればすぐ入れるからと日本に来る。

タカザワ　専門学校を出て、大学に行く人もいますよね。

――　やりたいことがあれば、媒体がデジタルだろうとフィルムだろうと、表現はできると思うのですけれど、それでは今の若い人が、何をやりたいのだろうか？職業としての写真に、全然希望がないのだろうか。日本で写真を撮っている人の、外への向き方に、何か感じられることはありますか？

タカザワ　日本にマーケットがないから、海外を視野に入れている人は多いと思います。私は京都芸大の通信教育部写真コースで、非常勤で教えているのですけど、高年齢の人も多いのです。社会人経験があるから、40歳、50歳になって、もう1回写真を始めた時に、それをちゃんと売り込むこともやる。年齢が行ってから

写真を始めた人は、かなり真剣に、どうやって作品を広めるかということを考えていますね。
若い人には人生経験がないから、その辺はピンと来ていないのかもしれない。

尾崎たまき 氏

写真家。水中写真家中村征夫氏に師事後、独立。水俣、三陸、身近な動物など『生きものと人とのかかわり』をテーマに発表を続ける。新刊に三陸の漁師と愛犬のドキュメンタリー写真絵本「漁師犬タロウ」新日本出版社など。

塚崎　東京カメラ部に集う写真家の中には海外を見ている方がたがいます。事実、海外のオークションに写真を出して売れている方もいます。また、海外志向の方は、日本のファンの好きな写真とは少し乖離するので分かります。なお、海外で「好まれる」写真と、日本で「好まれる」写真は異なります。東京カメラ部には560万人のファンがいますが、そのうちの3割ぐらいが海外なので国ごとにある程度写真の嗜好性が異なることを私たちは把握しています。

荒木経惟先生や立木義浩先生がフロンティアとして生み出してきたロールモデルが時代の変化で通じなくなった。だから、次のロールモデルとなる人、フロンティアとなる人が必要なのでしょう。そして、それが海外を目指す彼らなのかもしれません。

タカザワ　今の若い人は、写真だけやっていてよいのかなって焦りは感じると思いますね。 学校に来ている人たちでさえそうですからね。 アシスタントになったりしたら、このまま写真修行だけをしていて、大丈夫かなと感じるのが自然じゃないでしょうか。むしろ他の知識とか、他の勉強に変更した方が活きるんじゃないかという。

塚崎　お金が落ちるところが変わってきています。私は昔ソニーのウォークマン商品企画でした。あれはだいたい1モデル作るのに、バージョン違いだと1億円くらい開発費がかかる。一方、その宣伝費は10億円です。宣伝費のほうが開発費よりはるかかかる時代です。知ってもらうことの方が、作ることよりも難しいからです。難しくなったところにお金は落ちます。技術の発達で制作のハードルが下がった。だから、参加者が増えて競争が激しくなった。その結果、溢れた作品の中から、見つけてもらう、更にそれをどうお金に変えるかというところが難しくなった。必然的にここにお金が落ちる。つまり、ほとんどのアーティストはよい作品を作っていればよいという時代ではありません。成功するには見つけてもらうために何をするかというところの重要性が高まったので、その技術も必要になったのです。多分、学校でそういうことを教えていらっしゃるのですよね？

タカザワ　教えてないから問題なのですよね。私が教えているのは、写真史とか作家論的なことなので、外側から見ているので学生の質問には答えますけれど、でも学校のカリキュラムはそうなってないんですよ。教えているのは写真の撮り方や画像処理、作品を作るというところまでなので、そこまで対応するのはすごく難しいんだろうなと思いますね。 実際それを教えられる人がいるのかという問題もあるし。

――　売り込むのが上手い方と下手な方とで、ずいぶん差が出てくるわけでしょう？

塚崎　そうです。でもそれは昔からですよね(笑)。違いは、更にそこが大事になってきたことと、やり方も変わってきたことです。これは決して悪い話だけではありません。昔は東京に住んで先生の弟子になって修行しないと、仕事をくれる編集さんと繋がれなかった。今はそういうのが減った一方で、地方に住んでいても活かせる他のルートができた。

タカザワ　学生から好きな写真家というアンケートを取るのですけれど、3分の1くらいはインスタグラマーですね。だから苗字もないような人がいっぱい並びますよ。

馬場　でも、それはよいことじゃないの。

塚崎　よいことだとは思います。

タカザワ　状況が大きく変わってきているので、それにどう対応するかということでしょうね。

◆ AIが台頭を続ける時代に

タカザワ　私は、今日の話は著作権の話が一番メインになるのかと思ってきました。いま、話題になっている画像生成系AIはすでにある写真を学習したもの。皆さんが撮った写真がアップされていたら学習されている可能性があるわけですけど、そのことに関して日本写真家協会は 声明とか出しているんですか？

――　いや、出してないです。

タカザワ　それがちょっと意外というか不思議というか、JASRACは出しているし、画家の方なども、声明を出していらっしゃる方がいます。

――　生成AIがどういうものかを知らない人の方が多かった。塚崎さんがおっしゃったロールモデルの前の、すごく良かった人たちがずっと会長とかやってきたというのもあります。

タカザワ　東京カメラ部はAI禁止ですか？

塚崎　禁止です。東京カメラ部は、カメラで撮った作品であることが投稿条件です。

タカザワ　やはりそこは対応を考えていかなければならなくて、いろいろなところで揉めているようですね。

塚崎　東京カメラ部は最初から規約に入れています。

タカザワ　それでは、東京カメラ部さんに載ったものが

AIに学習されることに関しては、どうお考えですか？

塚崎　私たちはオンラインに投稿いただいたものをお見せしているので、著作者が許諾しているということですね。

タカザワ　だけどこれからAIに学習されて似たものが出てきた時に、東京カメラ部さんに対する責任じゃないかもしれないけど 作家としてそこに出していいのかどうかという葛藤はあるのでしょうね。

塚崎　オンライン上に出すか出さないか、ということかもしれないですね。

タカザワ　例えば画像の場合だったら透かしを入れるという手があることはあるので、そういう対応ができるのかもしれませんね。

塚崎　はい。そういう対応もあるかもしれません。なお、私は写真表現という中では、AIに対する危機感はそこまでもっていません。鑑賞する側からすると、そこに行ったらそれが見えるかもしれないというものと、作者の頭の中にだけあるものやAIが自動生成したものでは、やはり価値が違うと思うからです。ゴッホの絵にしても、あそこまで抽象化されていても、描いた場所というのが気になって、そこに行ってみたくなりますよね。人間が実世界に生きる以上は、被写体が実世界に存在することの価値は残るでしょう。ただ、著作権上の問題に対する危惧は持っています。

タカザワ　逆にAIに学習させるための専門のフォトグラファーというのもあり得ますよね、仕事として。それはつまり、著作権を主張されたら、ネットに上がっているものを勝手に学習できなくなるから、AI会社が学習させるために、あちこちに頼んでひたすら画像をアップしてゆくという…。

――　それと似た現象なのですけど、某大手ストックフォトエージェンシーが事業を売っちゃったんですよ。 で、なんと値段21億円で売れたと聞きました。で、ストックフォトの業界からいくと、なんでこんなに高い値段で買うのということになる。ところが、生成AI系の会社が買って、ストックフォトの写真というのは、著作権も肖像権もクリアされているから、たぶん写真が何十万点もあるのだから、21億円でも安い。買った写真をどんどん学習させる。買った会社というのは2人ぐらいでやっている無名の会社です。すごいですね。

馬場　21億円は安いと思ってらっしゃるのでしょうね。

タカザワ　尾﨑さんは水中に潜って、大変な思いをして写真を撮っているのに、簡単に写真が作られてしまうようなことになると大変ですよね。

尾﨑　10年前に撮った写真は、今はもう撮れない。10年前に撮った写真を今見ると、それが自分にとっての宝物になる。写真にはそういう社会性が備わっていると考えますから、AIのことはあまり心配していなくて、それよりも自分が撮りたいものを記録してゆく。そしてそれを定期的に発表していくという、フォトグラファーとしては素朴な価値観で、これからもやっていくのかなと考えています。

伏見行介常務理事

タカザワ　私もそう思うのです。学生に「凄く不安だ」と聞かれるんですけど、写真家って責任を持つ仕事なんじゃないかなと思っていて、誰がどこでいつ撮ったかわからない画像がいっぱい氾濫していて、フェイクニュースだらけの時代に、少なくともこれは私が水俣でこの日に撮りましたということを、ちゃんと責任を持っていえる、それが嘘でないことを、その人自身が人生をもって証明するが、写真家の仕事として最重要なのかなとも感じています。記録としての写真というものに責任を持つということが、すごく大事な仕事なのではないかなと思っています。

◆現代という時代の写真家の仕事とは

――　日本という国では、なぜか芸術の中での写真の地位が低くて、他のジャンルの芸術に助成金が交付される場合でも、写真がその対象から外されてしまう。著作権の保護の問題もそうですし、それに今度は「撮影罪」などと。撮影することに誤解を招くようなネーミングの罰を国会に出してきてしまいました。

塚崎　これがペンクラブ相手だったら、大騒ぎになっていたと思います。このままだと、写真を撮ることができなくなるかもしれません。肖像権の問題が出た時もそうでした。あの時は唯一『アサヒカメラ』が、「そんなことはないんだ。写真を撮っていいんだ」と異を唱える文章を掲載しましたが、追従する声は多くありませんでした。企業はユーザーからの反発を受けるわけにはいきませんから、そこに期待はできません。当事者である表現者の誰かが意見しなければならないのではないでしょうか。

馬場　例えばこのJPSとかが声をあげろと？

塚崎　いや。私ごときがやれなんていえませんよ（汗）。

馬場　いっているじゃない（笑）。

タカザワ　存在感を示すことにもなりますよね。

塚崎　JPSの中から、国政を目指す方がでてきてくだされば と願っています。そのことで、さまざまな状況を変えてゆくことができると思います。

笠原　日本には写真を扱う美術館は少ないですし、あってもさまざまな芸術の中の一部門という扱いで、キュレーターも少ない。その結果として、写真部門を持っている美術館に負担が多くかかっているというの

東京カメラ部出版物

座談会参加者全員で記念写真

も、改善すべきと思います。

タカザワ　今はまだ、写真を扱う所が少ないということも、問題なのでしょうね。

笠原　どの美術館にも、必ず写真部門があるようになれば、写真家の方の発表の場が増え、写真に対する理解が深まる。どの地方にも必ず地元の記録を残している方がいらっしゃるのです。その作品を発表し、保存する。それはとても大切な仕事など思います。

――　すごく答えにくい質問だと思うのですけども、JPS って職業写真家の集まりなんです。これから職業写真家って何をしていけばいいと思いますか。

塚崎　仕事の範囲を捉え直すことではないでしょうか。昔は雑誌社などがカバーしてくれていた領域も自分でやらなければならなくなった。ただ、それは写真家だけではなくて、全ての業界のアーティストも同じです。また、その領域を取り組むために必要な道具は簡単に手に入ります。今は、例えば SNS を通じて色いろな人と繋がることができます。昔はそのようなことはできなかった。だから、道具はありますよと。やりますか、やりませんか、という話なのだと思います。

タカザワ　職業的写真家という人が、職業としての写真家という定義を変えていくということを恐れないということでしょうか。今までであれば、先生について勉強して、写真を撮るという枠組みで考えたものを、それ以外のことも考えてみる。写真を使って何ができるのか、写真とビジネスというテーマで、自分の技術や知識が何に使えるかを考える。写真プラス映像とか、写真プラス AI とか、写真とその周辺のものに意識を広げるということではないでしょうか。写真にはまだまだ開発されていない可能性があると思っています。

笠原　今、ジャーナリストの方などは、日本では食べられないけど、海外のエージェントに入ってやっていらっしゃる方はかなりいると思います。もちろん言葉の問題はあるのですけど、例えばひどい英語でも、なんとかなるものです。今、日本だけが精神的な鎖国みたいな状態になっている。どんどん外に出ていくべきだと思います

タカザワ　今、DeepL などの翻訳アプリが飛躍的に良くなっていますからね。

尾崎　今までみたいに１枚写真を撮れば仕事として成立したということではなくなってきているので、やっぱり写真を撮ってどう表現していくか。自分で発表の場を作って、言葉でも伝えていける人が、残っていくのかなと感じています。

――　本日はどうもありがとうございました。

（構成／出版広報委員・池口英司、
撮影／出版広報委員・川上卓也）

写真解説（表紙、表４）

Nature Calls（表紙写真）– ブルース・オズボーン

海辺の町に住むようになってから20年が経過しました。砂浜はまるで社会の縮図のようで、貝殻やシーグラスを見つけたり、個性的なかたちの流木やカラフルなプラゴミを収集する浜辺の散歩は飽きることがありません。しかし又、人間による廃棄物が海洋生物に重大な被害を与え、生命が深刻な問題に直面しているのも事実です。Nature Callsというシリーズで、地球・命・社会が直面している課題に向き合っていきたいと思います。

写真展「Nature Calls」

冬の菜の花公園（表４写真）――― 岡　克己

「菜の花畠に　入り日薄れ」の歌い出しではじまる唱歌「朧月夜」発祥の地、北信濃、飯山菜の花公園の夕暮れ時。春は多くの観光客ごった返す丘陵だけど、雪のシーズンは暫く佇んでいても人に出会うことは稀。午後に降っていた雪も止み、赤い太陽も今しがた山の稜線に消えたばかり。刻々と空の色温度が変化する様をファインダー越しに観察、自分の中でのベストタイミングでシャッターを押した一枚です。

写真集『北信濃からお便りです』

JPS2023年新入会員展
「私の仕事」

東京：アイデムフォトギャラリー「シリウス」
2023 年 7 月 13 日 (木) ～ 7 月 19 日 (水)
大阪：富士フイルムフォトサロン 大阪
2022 年 8 月 25 日 (金) ～ 8 月 31 日 (木)

勝者の時間

熱田　護（東京都）

Tuba player
Shimpei Tsugita

池田マサカズ（東京都）

高嶺にかかる虹

伊藤 哲哉（千葉県）

まなざし

大岩 友理（愛知県）

山崎美央

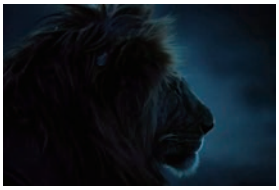
小林 弘輔（東京都）

白夜のジャコウウシ

佐藤 大史（長野県）

New Morning

佐藤 秀信（長野県）



薄明のライオン

篠田 岬輝（神奈川県）

Cyborg

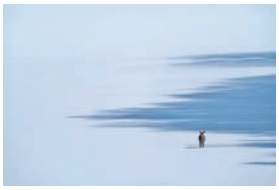
仙波　理（東京都）

大滝

曽布川善一（神奈川県）

お母さん 2019

高木あつ子（東京都）



佇む

髙橋 忠照（北海道）

高野山 - 祈りとともに
1200 年 -

田中 和義（東京都）

童心

鳥越　修（広島県）

天空の街 ダージリン

内藤 聡介（東京都）

混突　フィールドホッケー

中村 英二（千葉県）

たまご売りの少女
（プノンペンで）

西澤　広（愛知県）

或る信仰者の悲劇 審判

HASEO（愛知県）

東京 2020/2020.5.19
北青山 3 丁目

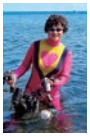
初沢 亜利（東京都）

アップサイドダウン。

平賀 正明（東京都）

『 We can. 』
Ghana / 2018

福田 秀世（東京都）



ホヤという世界

細谷 克子（東京都）

“アンデスのラクダ”
アルパカ（ペルー）

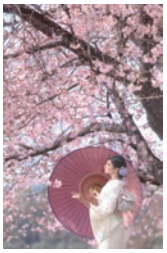
松井　章（東京都）

kids in Vietnam

宮崎 裕介（東京都）

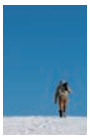
浙江省湖州・
シルクファクトリー

山口雄太郎（東京都）



朽つるまでその全ての
花のなり

吉川 みな（愛知県）



エゾナキウサギ

渡辺 浩徳（北海道）

JPS 2023 年 新入会員展 実行委員会：篠田 岬輝、松井 章、池田マサカズ、細谷 克子、山口雄太郎
※ 展示作品各自２点から編集部でセレクトした１点を 50 音順に掲載しました。（構成：小池良幸）

東京展 会場風景（撮影：山口雄太郎）

東京展懇親会 記念写真（撮影：池田マサカズ）

東京展 会場風景（撮影：小池良幸）

大阪展 会場風景（撮影：柴田明蘭）

笹本恒子写真賞 Tsuneko Sasamoto Photography Award 2023年第6回受賞者決定!! 高橋宣之さん

水にまつわる森羅万象に眼差しを注ぎ、自然界が一瞬に見せる希有の表象を写真に定着する

わが国初の女性報道写真家として活躍された笹本恒子（1914年生）名誉会員の多年にわたる業績を記念して、実績ある写真家の活動を支援する「笹本恒子写真賞」を平成28（2016）年に創設。今回の選考委員は佐伯 剛(『風の旅人 』編集者)、熊切大輔(JPS会長)、野町和嘉(JPS前会長)。授賞式は2023年12月13日（水）、アルカディア市ヶ谷で行い、受賞記念写真展を12月21日（木）～27日（水）、アイデムフォトギャラリー「シリウス」で催します。

【受賞理由】

高知の仁淀川水系という限定的なテーマを、数十年にわたって深く掘り下げることで、ネイチャーフォトの枠を超えて、地域文化や生きものの生態までをも表現している。このハイクオリティーな写真の世界が凝縮された作品群に対して。

【受賞の言葉】

昔撮影したフィルム作品をデジタル化するために、私は最近、複写撮影ばかりしている。長く撮り続けたフィルムの量はスリーブで120キログラムを超え、いったいどれほどのカット数があるのか見当もつかない。それを一枚ずつビュワーの上に並べてセレクト作業をしているのである。時にはすっかり忘れていた上質の作品に出会えて喜ぶこともあるが、たいていは自らの力のなさに頭をたれ、深いため息をついている。部屋を占拠している大量のフィルムの山は茫々とした塵の山なのか。などと考えると憂うつになる。

そんな時、作業場の電話が鳴り、「笹本恒子写真賞おめでとうございます」という知らせが入って驚いた。いったい誰が推薦してくれたのだろう。どの作品が選ばれたのだろう。とにもかくにも感謝、感謝の気持ちでいっぱいである。

とびっきりのうれしい連絡は暗雲から射す一条の光のように目の前のフィルムの山をほんのり明るく照らしていた。

高橋宣之（たかはし・のぶゆき）

1947年高知市に生まれる。1969年スペイン政府名誉留学でサラゴサに3年間学ぶ。帰国後、フリーランスとなり以後、コマーシャル撮影のかたわら「海」「シーランド」などをテーマに写真作品を制作、カメラ雑誌などに発表する。1978年ドイツのフォトキナ展に招待出品。翌年その作品がハンブルク美術工芸博物館に永久保存となる。1987年チリ・マゼラン海峡の町プンタ・アレナスに移り住む。
1988年チリ海軍の協力で大陸最南端の冬のホーン岬、チリ空軍の協力で冬の南極大陸に立つ。
1989年「花鳥風月」「仁淀川」などをテーマに作品を制作。2010年NHK高知放送局の制作チームに加わり、NHK「『仁淀川』－知られざる青の神秘―」などで動画および写真を発表する。

第６回「笹本恒子写真賞」選評　　佐伯 剛

笹本恒子写真賞は、一人の写真家の過去から現在に至る連続的な活動に対して贈られるもので、写真家が存在していることの意義を、強く感じられる活動を継続している写真家こそ、この賞にふさわしいと思います。

今回、受賞者に選ばれた高橋宣之さんは、高知の仁淀川という限定的な地域を数十年にわたって撮影してきましたが、宇宙の構造においてミクロがマクロの相似形であるように、彼が撮り続けた仁淀川の水系世界は、森羅万象の普遍性に到達しており、私たちが生きている世界のかけがえのなさを伝えます。そして、自然風土と、生命や人間の精神世界のつながりの深さを再認識させるそれらの写真は、高性能カメラのシャッターを押しさえすれば誰でも撮れるありきたりのものではないし、加工ソフトで簡単に捏造できる世界でもありません。

高橋さんの写真は、テーマの深さ、試行錯誤の厚み、邂逅の瞬間を待つまでの気の遠くなるような時間など、世の中のどの分野においても革新性と卓越性を達成するためには必須の取り組み方によって成し遂げられた表現世界であり、写真家の存在意義が危うくなっている現代において、一つのメルクマールになってくるでしょう。もはや、テクニックや目の付け所のセンスで写真の優劣を競い合うのは素人とプロの境界のないSNSの中だけで十分です。絵や音楽と違って、誰もがすぐに表現活動に参加できる写真分野において、写真家を志す人の哲学や眼差しに奥行きや深さがなくなっていくことが、即、写真表現の衰退につながっていくでしょう。

また、日本という国を知るうえでも、地方に関する知識は、観光情報など人口密集の都市世界の目で都合よく編集されたものばかりが流布し、日本の真の姿が見えにくくなっています。対象に真摯に向き合わない通りすがりの目では見えないものの中に、いのちの本質に関わる大事なものが隠れています。それを見い出し顕現化することが写真家のミッションだと信じる高橋さんのような取り組み方が増えると、日本人の日本に対する認識、そして自分が生きている環境世界に対する認識も、少しずつ深まってゆくかもしれません。

田沼武能氏追悼「一写入魂の会」開かれる

日　時：2023年5月31日（水）14時～15時
会　場：ザ・ガーデンホール（東京・恵比寿）
実行委員会：日本写真著作権協会、日本写真家協会、全日本写真連盟、東京工芸大学、東京写真記者協会、朝日新聞社

日本写真家協会会長を20年間務められ、名誉会長で昨年6月1日に93歳で永眠された田沼武能氏の追悼「一写入魂の会」が、5月31日に東京・恵比寿のザ・ガーデンホールで開かれた。

当日は、写真界や出版関係はじめ故人と親交のあった方がた約500名の出席があり、ご家族の意向で和やかな雰囲気の追悼会となった。会場入口では田沼さんの等身大パネルに迎えられ、壇上には文化勲章や祭粢料（天皇陛下からの香典）が並んだ。

雅楽師の東儀雅美さんによる龍笛演奏のあと開会となり、司会の三宅民夫さんからこの会の発起人21名が紹介された。

田沼さんの足跡を振り返るNHK番組「あの人に会いたい」（2022年10月22日放送）の10分間の映像が上映された。続いて発起人を代表して、親交のあった女優でユニセフ親善大使の黒柳徹子さんから、若いころ初めて会ったときの印象やユニセフ親善大使での海外訪問時のエピソードを交えた微笑ましい挨拶があった。

雅楽師の東儀雅美さんによる龍笛演奏

最後に田沼さんのジャケットを羽織った妻の田沼敦子さんから「みなさまそれぞれの思い出の中にあります主人とのことを思い出していただけましたら幸いです」とお礼の言葉で締めくくられ閉会となった。

その後も会場周辺では遺族への挨拶や等身大の田沼さんと次つぎに記念写真を撮るなど、いつまでも別れを惜しむ光景が続いていた。

本日の参加者は、隣の東京都写真美術館で田沼武能写真展「人間讃歌」を特別に観ることができ、田沼さんの偉大な功績を改めて振り返っていた。

（記／小野吉彦、撮影／桃井一至）

来場者を迎えるガーデンホールの受付

司会の三宅民夫さんによる会の進行

壇上に文化勲章や祭粢料（天皇陛下からの香典）が並ぶ

ありし日のNHK番組の映像を上映

黒柳徹子さんの微笑ましいご挨拶

田沼さんのジャケットを着て挨拶する妻の田沼敦子さん

多くの方が田沼さんの等身大パネルと記念撮影

来場の方々から次々に挨拶を受ける田沼敦子さん

多くの来場者で賑わう写真展「人間讃歌」会場

第48回 2023JPS展
入賞作品紹介

2023JPS展開催によせて

公益社団法人　日本写真家協会
会長　野町和嘉

公益社団法人日本写真家協会（JPS）は、1950年（昭和25年）に設立され、現在全国に約1,300名の会員を有するわが国を代表する職業写真家の団体です。

JPSは、写真家の地位の確立、著作権の啓発などを掲げ、写真文化の発展を目的として幅広い活動を展開しながら現在に至っており、2020年には創立70周年を迎えました。

JPS展は、1976年に初めて開催された第1回から数えて今年が48回目となります。第1回目は東京都美術館でJPS会員の作家活動を紹介するための会員作品のみの展示でしたが、第2回目より一般公募部門を設け、わが国有数の公募展として発展し、近年は東京都写真美術館ほかを展示会場として広く定着していることはご承知の通りです。3年以上にわたって蔓延し、世界を大混乱に陥れたコロナ禍がようやく収束に向かい、日常が回復しつつある昨今ですが、昨年2月に突如として始まったロシアによるウクライナ侵攻によって世界は一変しました。開戦1年を過ぎても戦禍が収束する兆しはまったく見えず、私たちはいま凄まじいばかりの殺戮と破壊の現実に直面させられています。映像技術が格段に進化したことで、ほぼライブで送られてくる、終末そのものと言える凄惨な映像を、私たちは毎日のように見せつけられています。このような現実を突きつけられていることで、映像、写真に関わる人間の一人として、日び向き合う何気ない日常の一コマや祭りなどの撮影であっても、生命の尊厳や、平和な日常の意味をあらためて感じながら被写体と向き合っています。コロナ禍を契機として、アナログからデジタルへの切り替わりが一層加速したことで、写真を取り巻く環境は大きく変わりました。しかし写真の本質に変化はないことをあらためて意識しながら、刺激に充ちた今後の作品展開を大いに期待しています。

審査員：左から、野町和嘉（審査員長）、白山眞理（一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長）、白鳥真太郎、土屋勝義、菊池哲男の各氏　　撮影：桃井一至

総　評

2023JPS展への応募者数は、一般部門が1,322名、18歳以下の部門が159名でした。昨年に比べ一般部門で60名の減少でしたが、18歳以下部門では6名が増えています。一方応募枚数では、一般部門が4,201枚で昨年比で228枚の減少、18歳以下部門では応募枚数323枚で12枚の減少という結果でした。

JPS展が始まって以来半世紀近い年数が経過し、当然のことながら、写真を取り巻く環境が大きく変化したことで、本展の性格、作品傾向にも流れがありました。当初はJPS展がプロ写真家への登竜門という位置づけもあって若手写真家からの応募も多い傾向がありましたが、近年は、写真に関わる若い層がSNS等のデジタル情報分野での交流、観賞に止まる傾向著しく、コンテスト等への応募が、比較的年齢の高いベテラン層が中心となる傾向が全国的にも見られます。

従って応募作品の傾向にも、確かな視点と完成度の高い安定感が見られる一方で、実験的、体当たり的な作品にやや欠ける傾向が見られることは否めません。

一方18歳以下の部門では、未完成ではあるが斬新な視点を感じさせる作品も多く、カメラを視覚の延長として自在に向き合っている新鮮さが感じられました。

審査員長　野町和嘉

第48回2023JPS展
東 京 展

東京都写真美術館（B1F展示室）／2023年5月20日（土）～5月28日（日）
10：00～18：00
（木・金は20:00まで、月曜休館）

共　催／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後　援／文化庁、東京都

第48回2023JPS展
関 西 展

京都市美術館 別館2F／2023年6月20日（火）～25日（日）
10:00～18:00

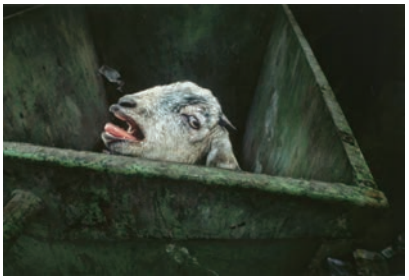
後　援／文化庁、京都府、京都府教育委員会、
京都市、京都市教育委員会

文部科学大臣賞

賞状・盾・副賞
賞金 60 万円

森 建一郎
（京都府）

「郷愁」
カラー単写真



東京都知事賞

賞状・盾・副賞
賞金 30 万円

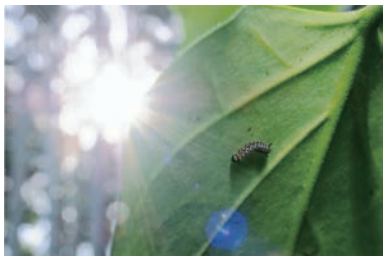
西川 武則（三重県）
「路地裏の生き物たち」　カラー３枚組

18歳以下部門 最優秀賞

賞状・盾・副賞

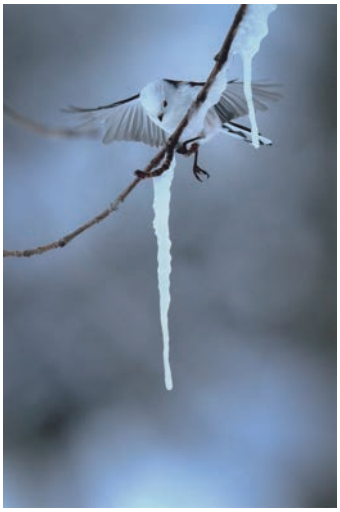
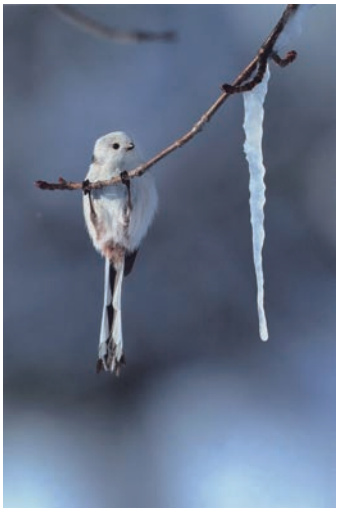
田中 碧
（滋賀県）

「見果てぬ夢」
カラー４枚組



金賞
賞状・盾・副賞
賞金 10 万円

吉澤 秀行（北海道）
「雪の妖精」　カラー３枚組

銀賞
賞状・盾・副賞

藤野 治雄（千葉県）
「祈り」　カラー５枚組

銀賞
賞状・盾・副賞

三浦 征志浪
（京都府）
「我が家の宝」
カラー単写真

銅賞
賞状・盾・副賞

吉岡 奈津美（奈良県）
「水滴の詩」　カラー３枚組

銅賞
賞状・盾・副賞

岩崎 幸男
（東京都）
「涸沢の夜」
カラー単写真

銅賞
賞状・盾・副賞

森口 菊枝（埼玉県）
「凍える朝」　カラー単写真

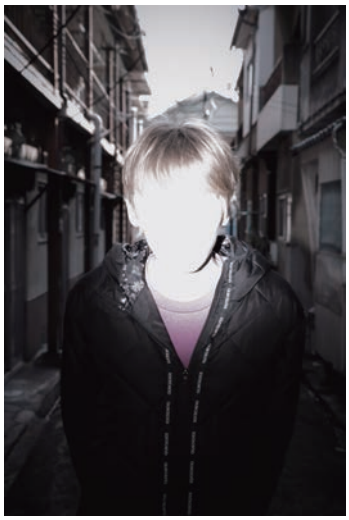
【ヤングアイ部門】

日本写真家協会 会長賞
賞状・盾・副賞

現代写真研究所 飯塚明夫ゼミ
「聖」（ひじり）
平川 正枝・高橋 侑也

ヤングアイ 奨励賞
賞状・盾・副賞

学校法人
日本写真映像
専門学校
「いやなことが
あったとき」
米田 充希・河田 瑞季・
おまつ（松下）



2022年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告

写真の楽しさ、面白さを伝える

2005（平成17）年より始まった「写真学習プログラム」は、当初、レンズ付きフィルムカメラで実施していたが、昨今ではコンパクトデジタルカメラを使用し、小学4～6年生を対象に、毎年全国の小学校20クラスで実施している。

写真を撮ることで、児童の育成に必要な「物事を注意深く観察することの大切さ」を体験し、その体験から写真という記録媒体を使って「表現し、伝えること」を学んでもらっている。写真の大切さに加え、撮影マナーも学習することで、写真を社会で幅広く活用してもらいたいという願いがある。

「写真学習プログラム」は、協会の公益事業として会員が学校に出向いて行う授業で、18年間に25,146人の児童に実施してきた。児童が、「写真への興味を抱く」きっかけとなる事業である。

また、多くの方がたにこの児童たちの作品を見ていただくため、参加児童の作品を特別企画「“PHOTO IS”小学生の眼」として、富士フイルム（株）・富士フイルムイメージングシステムズ（株）が主催する「“PHOTO IS”想いをつなぐ。あなたが主役の写真展2023」（会場・オンライン）で展示される予定となっている。

特別協力：富士フイルムイメージングシステムズ（株）
一般財団法人日本写真アート協会
協力：ウエスタンデジタル合同会社
（株）ケンコー・トキナー
パナソニック エンターテインメント&コミュニケーション（株）
リコーイメージング（株）

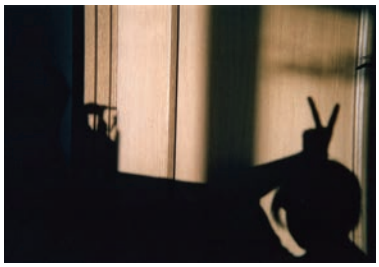
【2022年4月～2023年3月実施校】

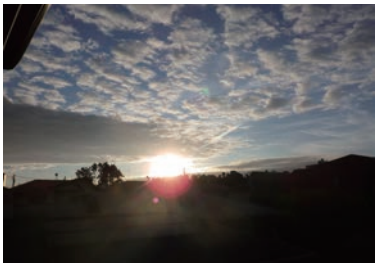
No.	実施校	県名	参加人数
1	秋田市立太平小学校5～6年生	秋田県	16
2	奥尻町立青苗小学校4～6年生	北海道	16
3	長後公民館4～6年A組	神奈川県	7
4	長後公民館4～6年B組	神奈川県	3
5	横浜市立小雀小学校6年生	神奈川県	39
6	松江市立美保関小学校5年生	島根県	34
7	松江市立美保関小学校6年生	島根県	25
8	須賀川市立第一小学校5年生	福島県	10
9	須賀川市立第一小学校6年生	福島県	13
10	さいたま市立与野西北小学校4～6年生	埼玉県	10
11	八頭町立八東小学校6年生	鳥取県	20
12	勝浦市立興津小学校6年生	千葉県	6
13	成蹊小学校6年東組	東京都	32
14	成蹊小学校6年南組	東京都	31
15	成蹊小学校6年西組	東京都	31
16	成蹊小学校6年北組	東京都	32
	参加人数合計		325

【2022 年度実施小学校児童の作品から】

秋田市立太平小学校５年生の作品

秋田市立太平小学校５年生の作品


奥尻町立青苗小学校６年生の作品


横浜市立小雀小学校６年生の作品

横浜市立小雀小学校６年生の作品

松江市立美保関小学校５年生の作品

松江市立美保関小学校５年生の作品

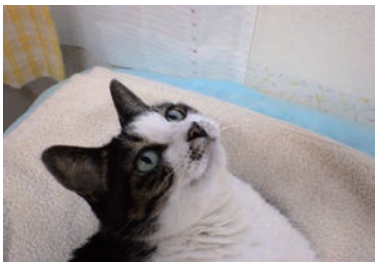
松江市立美保関小学校６年生の作品

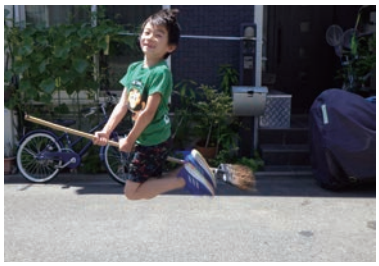
須賀川市立第一小学校５年生の作品

須賀川市立第一小学校６年生の作品

八頭町立八東小学校６年生の作品

勝浦市立興津小学校６年生の作品


長後公民館参加生の作品


長後公民館参加生の作品

長後公民館参加生の作品

おめでとうございます

当協会では、写真技術に関する発見、発明および写真文化の発展等について、著しい貢献もしくは寄与、功績のあった個人または団体に対して「日本写真家協会賞」を贈り顕彰しています。今回の第 49 回「日本写真家協会賞」は、株式会社ワン・パブリッシング『CAPA』に贈ります。表彰理由は、「1981 年 9 月の創刊より数えて通算 500 号を超える、わが国有数のカメラ＆写真情報誌である。昨今のデジタル化への急速な変化により、老舗カメラ雑誌が相次ぎ休刊となるなか、作品発表と、カメラ機材の情報提供の舞台として健闘している数少ないグラフメディアのひとつである。今後のさらなる奮闘を願い、激励の意味をもこめて、日本写真家協会賞を贈る。」

同誌の編集に対する考え方、これからの展望について、台東区の本社にて同誌編集長の菅原隆治さんにお話を伺いました。

――このたびは受賞おめでとうございます。創刊から四十年超、通巻でも 500 号を超える長きに渡っての月刊誌の発行は、大変なことだと思います。

菅原：ありがとうございます。私どもの雑誌が栄えある賞を受賞できたことには、これからもっと奮闘、努力せよ、という激励の意味も込められていると伺っています。その意味でも、今まで以上に頑張っていかなければならないと考えています。

――月刊『CAPA』は、どのような経緯から創刊されたのでしょうか？

菅原：1980 年代初頭は、中高生がカメラを持つことを格好よいと感じるようになっていた時代。そんな若者たちに、写真の面白さと、カメラや機材のハードとしての魅力、その両方の楽しさを提案する雑誌を作ろうと創刊されました。当時、若者が楽しく読めるカメラ雑誌には『月刊カメラマン』がありましたが、『CAPA』と月刊『カメラマン』それぞれが、若いカメラファンの心を掴む企画を、お互いに頑張って作っていました。

――創刊後の周囲の反応は？

菅原：既存の写真雑誌とは、編集方針がずいぶん違うということで注目されたようです。記事も作り手からの一方通行ではなく、読者参加の企画を数多く実施し、読者に撮影現場のルポを依頼して、プロと一緒に撮影をするワクワク感を体験してもらいました。編集スタッフも若かったから、読者と近い感覚でプランニングしていました。そんな視点で作った記事に読者が共感してくれたことで、『CAPA』は成長できたのだと思います。

――近年はカメラがデジタルになったことで、個々の特徴が希薄になったということはないでしょうか？

菅原：ひとつの傾向として、どのカメラも弱点が少なくなったということは感じますね。全体的な機能の向上で、どのカメラにもあるはずの弱みが、うまくフォローされ、高性能であることが標準化して個性が目立たなくなったという印象です。

――ただ、それを褒めてばかりいると、読者としては面白くない。

菅原：月刊誌というメディアが、メーカーと同じことだけ書くのでは存在意義がありません。そこで本誌では、フォトグラファーの方にお願いして、それぞれの立場からインプレッションを語っていただくようにしています。例えば超望遠レンズなら、テレコンバーターを装着して、どこまでの実用性があるのか？そういったことを、検証を通して読者に正確に伝えるということです。

――これから先に、どのような展望をお持ちでしょう？

菅原：雑誌なのですから、まず面白いものでありたい。『CAPA』は、読者目線で作り続けてきた雑誌で、それを守ります。その上で、読者参加の企画を復活させていきたい。カメラのレビューもアマチュアにも参加して欲しい。レベルを下げるのではなく、視野を広げるという意味です。そしてプロ・アマ問わず、本誌に作品が掲載されたことで、カメラマン同士の交流が生まれる存在でありたい。考えていることはたくさんあるのです。毎号、ページ数が足りなくて困っています（笑）。

――本日はどうもありがとうございました。

第49 回「日本写真家協会賞」
受賞者：(株)ワン・パブリッシング『CAPA』(キャパ)

菅原 隆治さん
（株）ワン・パブリッシング『CAPA』編集長

（2023 年 7 月 12 日　（株）ワン・パブリッシング本社にて、
聞き手／出版広報委員会・池口英司　撮影／伏見行介）

2023（令和５）年度第 24 回
公益社団法人日本写真家協会定時会員総会報告

日　時：2023 年５月 26 日(金)午後１時 30 分～３時 15 分
場　所：東京都写真美術館 1F ホール
議決権のある正会員総数：1,247 名（定足数 624 名）
出席正会員数：870 名（内訳：本人出席 86 名、代理委任２名、議決権行使書 782 名）。外部理事４名、外部監事１名、関係者３名、名誉会員２名、賛助会員 12 社 17 名。

総会開会に先立ち進行の島田聡専務理事が 2022 年度の物故会員、名誉会員の氏名を読み上げ黙とうとご冥福を祈った。続いて 2023 年度の新入会員、総会に出席の会員理事、外部理事、監事、名誉会員の方がたを紹介した。野町和嘉会長より挨拶があり、総会の議長は代表理事の野町会長があたり、議長補佐に島田専務理事を選任した。議事録署名人を出席者の正会員の中から池上直哉、宮沢あきら両会員に依頼し、議案の審議に入った。

東京都写真美術館ホールでの総会会場風景

【議決事項】
第１号議案：「2022（令和４）年度事業報告書及び決算報告書承認の件」　髙村達副会長から公益事業１、公益事業２の説明があり、島田専務理事から「当期の収益計は 126,080,257 円、費用計は 114,879,349 円で、当期は 11,200,908 円の黒字である」と説明があった。続いて公認会計士の長吉眞一監事が監査報告をした。質疑応答の後、賛成絶対多数で可決承認された。
第２号議案：「『公益社団法人日本写真家協会定款』一部変更及び一部追加の件」　島田専務理事より「特定預金は目的以外に利用不可が基本だが、会員数減少などの財政事情悪化を勘案し、目的以外でも可能へと整備が必要。現在は総会決議が必要で緊急事態の際、理事会承認にて対応できるようにする」と説明があり質疑応答の後、総正会員の議決権の３分の２以上にあたる賛成多数で可決承認された。
第３号議案：「理事の任期満了に伴う改選及び監事の死亡欠員に伴う補選の件」　島田専務理事より「キヤノンマーケティングジャパン株式会社執行役員の橋本圭弘氏が理事候補を辞退し替わりに吉田雅彦氏を紹介いただいた。監事の異議はなく書面で理事全員から承諾済みである」と説明があった。全候補者とも一人ずつ賛成多数で可決承認された。(右、理事一覧参照)
第４号議案：「名誉会員推挙承認の件」　島田専務理事より「名誉会員に野町和嘉正会員と山口勝廣正会員を推挙する」と説明があった。賛成多数で可決承認された。

【報告事項】
野町会長より「2023 年度の事業計画書、予算書及び資金調達及び設備投資の見込みを記載した書類を、第 56 回理事会で承認し３月 28 日に内閣府へ提出した」と報告があった。
報告事項１及び２：「2023（令和５）年度事業計画書の件」「2023（令和５）年度予算書の件」　髙村副会長より「公１事業計画、公２事業計画」の報告があった。続いて島田専務理事より「2023 年度の予算書について収入合計（経常収益計）、支出合計（経常費用計）とも 113,520,000 円の予算を組んでいる」と報告があった。
報告事項３：「第 49 回『日本写真家協会賞』の件」　島田専務理事より「株式会社ワン・パブリッシング『CAPA』に贈る」と報告があった。**表彰理由：**1981 年９月の創刊より通算 500 号を超えるカメラ＆写真情報誌である。昨今の老舗カメラ雑誌が休刊となるなか健闘しているグラフメディアである。さらなる奮闘を願い贈る。
報告事項４：「会費滞納による正会員資格の喪失手続きの件」
島田専務理事より「会費未納者を理事会にて正会員資格の喪失承認を行っている」と報告があった。

以上で報告事項が終了し、野町議長が総会終了の辞を述べ、休憩に入った。

休憩後、別室にて新役員による第 58 回理事会を開き代表理事に熊切大輔理事を選定したとの報告があり、熊切大輔新会長が誕生した。熊切新会長より「理事が若返ったことを最大の武器にして、協会や写真界の英気を養ってまいります」と挨拶があった。今期退任する理事から挨拶があり、最後に新会員理事、外部理事を紹介した。

（記／書記・小野吉彦、撮影／桃井一至）

2023 年公益社団法人日本写真家協会役員

（※印＝新任、敬称略）

代表理事	会　長	熊切大輔
業務執行理事	副会長	山口規子（事業全般／(兼)教育推進）
業務執行理事	副会長	髙村　達（日本写真保存センター）
業務執行理事	専　務	小池良幸（管理全般／(兼)出版広報）
業務執行理事	常　務	島田　聡（公１事業／(兼)企画）
業務執行理事	常　務	伏見行介（公２事業／(兼)総務／財務）
理　事	理　事	大津茂巳（国際交流）※
理　事	理　事	川村容一（写真展事業）
理　事	理　事	柴田明蘭（関西地区）
理　事	理　事	土屋勝義（総務）※
理　事	理　事	寺師太郎（写真保存センター）※
理　事	理　事	松倉広治（ホームページ）※
理　事	理　事	吉川信之（著作権）※
理　事	外部理事	岩田　敏（日本フォトイメージング協会前会長）
理　事	外部理事	大沢秀紀（凸版印刷㈱企画開発部門統括本部長）※
理　事	外部理事	小松弥生（東京国立近代美術館館長）※
理　事	外部理事	角田　克（朝日新聞社常務取締役）
理　事	外部理事	森　真次（㈱ニコンイメージングジャパン執行役員）
理　事	外部理事	吉田雅彦（キヤノンマーケティングジャパン㈱カメラ統括本部長）※
理　事	補欠理事1	野田知明
理　事	補欠理事2	桑原史成
		（任期 2023 年５月 26 日～ 2025 年５月の総会終結時迄）
監　事	外部監事	北村行夫（弁護士）
監　事	外部監事	長吉眞一（公認会計士）
		（任期 2021 年５月 28 日～ 2025 年５月の総会終結時迄）
監　事	監　事	芳賀日向（正会員）※
監　事	補欠監事	櫻木康裕（税理士）
		（任期 2023 年５月 26 日～ 2025 年５月の総会終結時迄）

出席した新役員による記念写真

「日本写真保存センター」調査活動報告（39）

原板アーカイブとメタデータの重要性

理事・寺師太郎（日本写真保存センター担当）

1.「日本の断面 1938-1944 ―内閣情報部の宣伝写真」写真展共催

日本写真保存センター（以下、保存センター）では2023年6月6日（火）～7月2日（日）まで、JCIIフォトサロンにて一般財団法人日本カメラ財団との共催で「日本の断面 1938-1944 ―内閣情報部の宣伝写真―」を開催した。展示に際しては、保存センターが収蔵する写真原板から新たに73点のモノクロ写真がプリントされた。新規にプリントすることで当時の刊行誌とくらべて非常にクリアな画質、豊かなトーンでの展示が可能になり原板保存の意味とその活用の意義を示す好例になった。

また、展示では政府の広報グラフ誌『写真週報』の掲載画像と新規のプリントを比較して見られる工夫がされており、原板と掲載画像のトリミングや反転使用の実態などを知ることができた。出版の現場では表紙のタイトルや号数などのレイアウトなどを重視して「裏焼き」が行われるが、その実体をよく知ることができる機会でもあった。時代が新しくはあるが、石元泰博の写真を大胆にレイアウト、トリミングした亀倉雄策がこれらの系譜の延長であるのが面白い。撮影者の目線を集中させる手法はヨーロッパ的視覚伝達の流れを見出すことができるのではないか。写真家の意図を広く伝えるためにトリミングやレイアウトの持つ重要性を再認識できる展示になっていた。

これら原板が記録される背景には、政府が広報宣伝を行うため「内閣情報部」発足させた、それから時間をさほど時間を空けることなく1938年2月、政府刊行の広報グラフ誌『写真週報』の創刊がある。さらに原板の出典である「写真協会」は1938年7月に対内外写真宣伝の官庁代行機関として設立され、国内外への配信を目的に撮影嘱託、原板収集を行いストックフォトを構築した。日本グラフジャーナリズムの始まりにおける重要な流れがここにある。その後これら原板は1944年4月に組織が財団法人日本写真公社へ改称され、終戦後の1945年9月には財団法人日本交通公社へ吸収されることになる。その後1977年8月に国立公文書館に移管されたが、2014年9月に日本写真保存センターに収蔵されることとなった。これら写真協会の原板は現在においても当時の情勢を知る貴重な記録であるばかりでなく、その物としての流れをみることは各時代の政策を知る上でも貴重である。

出陣学徒壮行会、明治神宮外苑競技場、1943年10月21日
（白山眞理氏調べ）

2. ジャパンサーチギャラリー掲載と情報連携の意義と今後

『写真週報』掲載写真は、国立国会図書館のWeb検索サービス「ジャパンサーチ」でも見ることができる。今回はジャパンサーチのギャラリーで特集されている「関連資料で見る戦時下の子供たち２」を紹介する。

ジャパンサーチには連携組織が自由に公開できるギャラリー機能とジャパンサーチが毎月お勧めするコンテンツをギャラリーで紹介している。2023年8月は保存センターの複数の画像が掲載されていた。8月であれば広島、長崎の原爆投下、終戦記念日など社会の注目が集まりやすい写真でギャラリーを構成すると閲覧促進が期待される。また、「お盆」などの事象を扱ったものが運営者側でキュレーションされていることが確認できた。盆踊りの起源といわれる踊念仏の創始者一遍上人絵伝が取り上げられているのは、「お盆」をキーワードに画像と知識のセレンディピティが体験でき面白い。

ジャパンサーチ：ギャラリー紹介画面（https://jpsearch.go.jp/）

コドモとオモチヤ　『写真週報』第 138 号（1940 年 撮影：写真協会 加藤恭平）

これらの写真も戦時下にも関わらず、その表情や体格などには皮肉にも食料事情の困難さが表れていない（表現していない）。これら写真週報の写真が当時どのような目的で撮影され、どんな文章のもと掲載されていたのか、これらの情報なしに画像を利用することは現代においても閲覧者に誤解を与える可能性もある。そのため保存センターでは画像の掲載誌との付け合わせを行って公開をしている。しかし、それだけでは時代を理解するためには不十分な側面もある。ジャパンサーチの画面でお盆と一遍上人の画像が同時に表示されていたように周辺情報があってこそ事実に近づくことができる。そのためにもジャパンサーチのような多くの期間が連携ポータルサイトで画像の公開を行うことには、保存センターの認知促進以外にも大きな意味がある。

また他機関で調査研究をする側にとっても容易に周辺情報にアクセスできる機会は研究の推進に有用である。そのためにも保存センターのデータベースに記載されているメタデータ（付加情報）の充実は必須で、過去の貴重な原板を収集保存するだけでなく、より充実したメタデータの記載を促進しなければならない。一例をあげると下の写真はジャパンサーチのトップページに表示された保存センター収蔵の画像で『岩波写真文庫』が掲載誌であることが分かる。

著米御飯はいかが 茨城縣下妻高等女學校の節米運動『写真週報』第 120 号（1940 年 撮影：写真協会 笹本恒子）

しかし、下図の「写真原板データベース」の詳細項目にある解説欄に記載はないことから分かるように、現在の保存センター体制ではこの写真がどんな意味で撮影されたかまでは記載が困難な状況である。そのため掲載書籍の所蔵館へ直接リンクできるジャパンサーチとの連携は、現在の保存センターにとって非常に重要であるが、本来は自ら調査し記載をしていく必要がある。

今後は収集のペースを調整しつつ、大学や他機関とのリアルでの連携を図ることでメタデータの充実を図る必要があると考える。

https://photo-archive.jp/database/detail.php?id=00069-00232-0033

ニコンイメージング ジャパン

フルサイズミラーレスカメラ Z 8 静止画でも動画でも決定的な瞬間を逃さない ー 敏捷さがもたらす、確信

●様々な撮影に柔軟に対応する高い機動力

Z9 から体積比で約 30％小型化したコンパクトなボディーに、Z9 の優れた性能と機能を凝縮し、高い機動力を実現。カメラバッグに納めてもかさばりにくく、また、様々な撮影スタイルに柔軟に対応するため、どこにでも気軽に持ち出して、存分にクリエイティビティーを発揮できます。静止画、動画を問わず、様々なシーンで安定した撮影を可能にします。

●ミラーレスカメラの新基準となるメカシャッターレス機構を実現。

Z9 と同様の、ローリングシャッターひずみを最小限に抑えた積層型 CMOS センサーを搭載。メカニカルシャッターを搭載していないため、静音で、かつシャッターの摩耗を気にせず大量の撮影が可能です。

●豊かな階調表現で滑らかなグラデーションを再現できる HEIF 形式

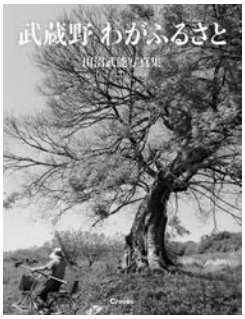
HEIF（High Efficiency Image File Format）で撮影することで、豊かな階調を最大限に生かした夕焼けの画像や、広いダイナミックレンジで白飛び・黒つぶれを抑えた都市夜景の画像が得られます。

【問い合わせ先】
株式会社ニコンイメージングジャパン
ニコンカスタマーサポートセンター
TEL：0570-02-8000
営業時間 9:30 ～ 18:00（土曜日、日曜日、祝日、年末年始、夏季休業などを除く毎日）
https://www.nikon-image.com/

クレヴィス

田沼武能ライフワークが完結！

生前田沼氏には四つの大きなテーマがありました。その第一は「子ども」です。世界には恵まれた環境で平和に暮らす子どもがいる一方、きびしい自然災害や戦争・紛争に巻きこまれる子どもも数多くおり、30 年余のユニセフ親善大使黒柳徹子女史の難民キャンプ訪問に同行して出会った子どもたちの輝く瞳と前向きな姿は『未来へ架ける　世界の子ども』になりました。第二は「東京」です。下町・浅草に生まれ、「東京大空襲」を命からがら生きのびた田沼氏にとって、戦争で荒廃した焼け跡から立ち上がり、さまざまな矛盾を内包しながらも経済的な繁栄を達成してオリンピック招来に至る「変貌」の道程は『東京わが残像』に記録されました。第三は氏の生をうけた「昭和」を創りあげた 240 名の文化人のすぐれたポートレートです。出会った人物の肖像と印象録を付した作品集は『時代を刻んだ貌』にまとめられました。第四のテーマが，このたび刊行されました追悼写真集『武蔵野わがふるさと』です。逝去直前までの半世紀余、繰り返し取材を重ねました。時代の流れと共に激しく変貌するかつての「武蔵の国」に残される原風景とそこに生きる人びとに心を寄せて「ふるさと」を感じとりました。コンピューター万能の風潮から離れた風物、厳しい農作業、収穫後の祭りや祝い事、そこには安らぎがありました。



【問い合わせ先】
株式会社クレヴィス
担当：別府 笑
〒 101-0052
東京都千代田区神田小川町 3-1-3　オプティクスビル 6F
TEL：03-6427-2806
FAX：03-6427-2807
https://www.crevis.jp

OM デジタル ソリューションズ

35mm 判換算 4 倍の超高倍率撮影可能、高性能望遠マクロ「M.ZUIKO DIGITAL ED 90mm F3.5 Macro IS PRO」発売

2023 年 2 月 24 日に発売された「M.ZUIKO DIGITAL ED 90mm F3.5 Macro IS PRO」は、レンズ単体で最大撮影倍率 4 倍（35mm 判換算）、別売の 2 倍テレコンバーター装着で最大撮影倍率 8 倍（同）の超高倍率撮影を可能にした高性能望遠マクロレンズです。レンズ内に手ぶれ補正機構を搭載、カメラのボディー内手ぶれ補正と協調する「5 軸シンクロ手ぶれ補正」により最大 7 段の手ぶれ補正能力を発揮します。高い描写性能を実現するため、スーパー ED レンズ 2 枚、ED レンズ 4 枚、さらにスーパー HR レンズ、HR レンズを各 1 枚使用した 13 群 18 枚の贅沢な光学系を採用、近接撮影時に目立つ色収差も徹底して抑えます。防塵・防滴性も保護等級 IP53 に対応、OM-1 など防塵・防滴対応のボディーと合わせることで、降雨時など厳しい環境下でもご使用いただける製品です。

サイズ、重量：最大径 φ 69.8 × 全長 136mm、重量 453g（レンズキャップ、レンズリアキャップ、レンズフードを除く。フィルター径 φ 62 mm。）

【問い合わせ先】
OM デジタルソリューションズ株式会社
OM SYSTEM PRO SERVICE
担当：鳥居
TEL: 03-3466-2951（10:00-18:00 火・水定休）
メール：pro_support@om-digitalsolutions.com
https://jp.omsystem.com/

ライカカメラジャパン

新製品「ライカ Q3」が登場

ライカの「ライカ Q」シリーズから「ライカ Q3」が新登場しました。同シリーズは 2015 年の誕生以来、高い性能・デザイン・操作性を特長とし、写真家やクリエイターをはじめ、世界中のプロフェッショナルから高く評価されています。「ライカ Q3」は、従来の性能を生かしつつ数多くの機能が追加され、これまで以上に高品質で美しい写真や動画を撮影できます。

特長

● 60/36/18MP から選べるトリプルレゾリューション技術採用の裏面照射型 CMOS センサー搭載
● ISO 50 ～ 100000

●最新世代の画像処理エンジン「LEICA MAESTRO Ⅳ」搭載
●マクロにも対応する大口径レンズ「ライカ ズミルックス f1.7/28mm ASPH.」＊焦点距離 28/35/50/75mm に加えて 90mm のクロップ撮影が可能
●ハイブリッドオートフォーカスシステムを新たに採用し大幅に進化した AF 機能
● 576 万ドットの有機 EL ファインダー搭載
●高精細 3.0 型のタッチパネル、チルト式液晶モニター
●防塵・防滴性能（IP52）
●高速通信（Bluetooth、Wi-Fi）速度が 10 倍
● Apple 社による「MFI」認証済ケーブルを同梱
● 8K 動画、Apple ProRes に対応
● HDMI, USB 端子を実装
●「Capture One」「Adobe Photoshop Lightroom」テザーによる撮影も可能
●ワイヤレスバッテリーチャージに対応
品名：ライカ Q3
税込価格：902,000 円

【問い合わせ先】
ライカカメラジャパン・カスタマーケア
TEL：0570-055-844（ナビダイヤル）
https://leica-camera.co.jp

富士フイルムイメージングシステムズ

小型軽量ボディに大容量バッテリー・高性能 AF・動画撮影機能を搭載したオールインワンモデル「FUJIFILM X-S20」発売。

「X-S20」は、従来機でご好評をいただいている小型軽量ボディに、AI による被写体検出 AF や 6.2K/30P の動画撮影機能などを搭載したミラーレスデジタルカメラです。新たに採用した大容量バッテリーにより、約 800 枚 (エコノミーモード時) の撮影枚数を実現。長時間撮影を可能とし、トラベルカメラとしても安心してご使用いただけます。
「X-S20」は、高画質・高機動性を実現し、本格的な撮影からカジュアルな自分撮りまで、あらゆる撮影スタイルに 1 台で対応します。

【問い合わせ先】
富士フイルムデジタルカメラサポートセンター
TEL：0570-04-1060 (ご利用いただけない場合 : 03-6625-2809)
受付時間 : 月～土 9:30 ～ 17:30 ※日・祝日・年末年始を除く
http://fujifilm-x.com/ja/

フレームマン

フレームマン千葉倉庫リニューアルオープンのご案内

2 年前に先の見えない新型コロナ禍の中で検討を重ねた結果、千葉倉庫の売却を予定致しましたが、一心してリニューアルを決断致しました。従来は空調と除湿機、設定の温度と湿度を上回ると自動的に換気扇が作動する換気システムまでの配置をして参りました。
この度、業務専用の湿度・温度管理が万全な状態に保たれる大型装置を導入して『常温常湿保管倉庫』をリニューアルオープンさせて頂きます。皆様の大切な作品を月単位できちんと保管をさせて頂きます。なお、新社屋（3 階）にも常温常湿保管スペースをご準備させて頂きます。弊社営業担当スタッフにお問い合わせをお待ち申し上げております。
移転先　〒 124-0014 東京都葛飾区東四つ木 1 丁目 16 番 19 号
TEL：03-6657-6751
FAX：03-6657-6781

【問い合わせ先】
株式会社フレームマン
担当：奈須田 一志
TEL：03-5638-2211（代）

ケンコー・トキナー

額縁を持ち 運ぶ専用バッグ登場！ JPS 会員に約 20% 引きの特価販売！

「LUCE 額縁キャリートートバッグ」は、額装した作品を持ち運ぶために開発された専用バッグです。JPS 会員向けに特価販売しますので、最後までご覧ください。
ケンコー・トキナーでは、作品額として高い評価を得ている額縁、ケンコー「画廊」「ギャラリー」といった製品を販売中です。写真展でも多く使われる機会がある、これらの額縁を安全に持ち運ぶことができれば…という声から、カメラバッグづくりのノウハウを応用し製品化しました。
LUCE 額縁キャリートートバッグは、カメラバッグにも使われるしっかりした杢目生地を使用、裏地付きで大切な作品を安心して持ち運べます。
持ち手は丈夫でしなやかなベルトを採用し、補助ハンドルを装備することにより、持ち運びの際に振れないよう工夫しました。表地は落ち着いた印象のチャコールグレー、裏地は深みのあるミッドナイトブルーの 2 色使いで、おしゃれでシックな印象に仕上げました。ネームホルダーには名刺などを入れられます。Kenko 画廊半切サイズを製品箱に収納したまま 2 枚入れることができます。サイズは、外寸（幅 × 高さ × 奥行）640 × 565 × 80mm、内寸（幅 × 高さ × 奥行き）638 × 563 × 78mm。
JPS 会員向けの特価販売は、QR コードから専用の販売ページへ（12 月 31 日まで）。

【問い合わせ先】
株式会社ケンコー・トキナー
担当者：田原 栄一
TEL：03-6840-2970
FAX：03-6840-2962
メール：etahara@kenko-tokina.co.jp
https://www.kenko-tokina.co.jp/

凸版印刷

「明治のメディア王　小川一眞と写真製版」展 2023 年 11 月 18 日（土）～ 2024 年 2 月 12 日（月）まで開催

明治期に活躍した写真師の一人、小川一眞（1860 ～ 1929 年）の印刷人としての側面に焦点を当てた展覧会を開催します。小川一眞には他の写真師たちと比べて大きく異なる点がありました。それは写真製版によってたくさんの印刷物を製作、出版したことです。写真製版とは、写真技術を応用して、ネガとポジの原理を基に印刷の版をつくる方法です。日本では明治時代から始まり、印刷会社の製版現場で用いられ続けました。テレビもラジオもなかった明治時代のメディアといえば、新聞、雑誌、

書籍などが中心であり、とりわけ写真が入った印刷物は大きな役割を果たしました。

本展覧会では東京都江戸東京博物館の特別協力のもと、小川一眞が導入した2つの写真製版技術、コロタイプ印刷と網目版印刷によって製作した印刷物を中心に約100点の資料を紹介します(会期中、展示替えがあります)。写真製版が印刷をどのように変えたのか、近代日本における視覚メディアの発展と視覚文化の形成に、いかに小川一眞が大きな影響を与えたのか、探っていきます。みなさまのご来館をお待ちしております。

【問い合わせ先】
印刷博物館
東京都文京区水道1丁目3番3号
TOPPAN小石川本社ビル
開館時間：10:00 ～ 18:00
休館日：毎週月曜日（1月8日（月）は開館）年末年始、1月9日（火）
TEL：03-5840-2300（代表）
https://www.printing-museum.org/

シグマ

超広角14mmと開放1.4の明るさを兼ね備えた世界初・唯一の高性能超広角レンズ、全ては最高の星景撮影のために

SIGMA 14mm F1.4 DG DN | Artは星景写真を、最も広く明るく、さらに高解像かつ快適に撮影したいというエンジニアの情熱から生まれた世界最広角のF1.4単焦点レンズ※です。

最新技術が可能にした超広角14mmと開放F1.4の両立。さらに、サジタルコマフレアも徹底的に補正された高い光学性能に、三脚座、MFLスイッチ、リアフィルターホルダー、レンズヒーターリテーナー、ロック機構・フィルタースロット付き専用カバーレンズキャップといった星空撮影をサポートする各種機能やリニアモーターによる高速AFなど、SIGMAのレンズテクノロジーを結集して実現しています。夜空に広がる天の川。瞬く星々に浮かび上がる稜線。実際の撮影体験を上回る作品として現実のものにできるのが、このSIGMA 14mm F1.4 DG DN | Artです。そして、星景撮影で保証されたその実力は、日中の風景、建築、スナップ、ポートレート、暗所狭所の室内撮影など、あらゆるシーンにおいて新しい視覚表現の可能性と楽しみを提供してくれるはずです。
SIGMA 14mm F1.4 DG DN | Art
価格：オープンプライス

※魚眼レンズを除く、ミラーレスカメラ用・一眼レフカメラ用交換レンズとして（2023年6月SIGMA調べ）

【問い合わせ先】
株式会社シグマ
カスタマーサポート部 プロサポート課
担当：桑山 輝明
TEL：044-989-7436
メール：spsinfo@sigma-photo.co.jp
https://www.sigma-global.com/jp/lenses/a023_14_14/

東京印書館

新賛助会員ご挨拶
みなさまの写真集制作をサポート致します

私たち東京印書館は1947年に出版社である平凡社の出版物印刷を中心に活動する目的で設立された印刷会社です。過去には主に百科事典やグラフィック系の雑誌の印刷を手がけてきましたが、近年では特に写真集や美術館の図録など、色の再現に重点を置いた印刷物の制作が増えています。2016年には統括プリンティングディレクター髙柳昇が第42回日本写真家協会賞を拝受いたしました。弊社のプリンティングディレクター陣は、写真家の皆様のご要望をお聞きしながら、用紙の選択やインキの種類、印刷方式など様々な要素を考慮します。その上で、紙の上における「理想色」の再現を目指し、日々写真集の制作に取り組んでおります。

また、弊社では自社のYouTubeチャンネルやWebサイトで、制作をお手伝いした写真集の見どころや制作時のエピソードなどを紹介しています。加えて一部の写真集については、ブックフェアやオンラインショップでの販売もお手伝いしております。モノづくりを担う印刷会社の視点で、写真集の魅力をより多面的に伝えたいという想いから、こうしたサポートの拡充にも取り組んで参りました。写真集の出版、制作をお考えの際は、ぜひお気軽にご相談、お問合せを頂けますと幸いです。何卒宜しくお願い申し上げます。

【問い合わせ先】
株式会社東京印書館
担当：下中
TEL：048-486-3808
メール：shimonaka-s@inshokan.co.jp
https://www.inshokan.co.jp

Nextorage

新賛助会員ご挨拶
世界最速CFexpress Type B

Nextorage株式会社(ネクストレージ株式会社)はメモリー・ストレージ・ソリューション事業に特化した会社として2019年10月1日に発足しました。ソニーにおけるメモリーストレージ20年の歴史を継ぐ技術者とスタッフ集団を中心に創られた会社です。
弊社は「イメージング」、「ゲーミング」、「産業機器」に最適なメモリーストレージ製品を提供しております。

イメージング領域に関しましては、近年ミラーレスカメラのハイエンドモデルに採用されているCFexpress Type Bメモリーカードを国内で販売しており、世界最高速、高信頼性を実現しております。また、SD UHS-ⅡもCFexpress Type Bと同様なコンセプトで市場導入しております。

Nextorageの強みとして、ハイエンドモデルに対して自社でファームウェアを開発しています。自社ファームを使用することで、NX-B1PROに見るような世界最速モデルの導入などを可能にしております。

さらに、国内開発しているため何か技術的なサポートが必要な場合には国内のエンジニアが技術サポートをさせていただくことが可能となっております。弊社はこれからも大切な記憶を永く安心して残すためのプラットフォームを提供し続けてまいります。

【問い合わせ先】
Nextorage株式会社
担当：木村 仁
TEL：050-3505-8182
メール：Hitoshi.Kimura@nextorage.jp
https://www.nextorage.net

（構成／出版広報委員：川上卓也）

セミナー研究会レポート

◆2022年度第3回技術研究会報告◆

「ファインアートペーパーの世界」

用紙側からの視点
INNOVA・PICTORICO・PICTRAN

2023年2月8日(水) 14：00～16：30
JCIIビル6階会議室、オンライン、参加数：70名

講師：INNOVA：羽賀勝彦（スイーコ・インタナショナル㈱）
PICTORICO：江口聡（元㈱ピクトリコ）、
山本真也（ダイヤミック㈱）
PICTRAN局紙：新山洋一（㈱コスモスインターナショナル）
司会進行：増田雄彦（会員）

2月8日、2022年度第3回技術研究会「『ファインアートペーパーの世界』用紙側からの視点」をJCIIビル6階会議室にて開催した。前回同様オンライン配信も会員限定で行った。コロナ禍を鑑み会場定員50名のところ、会場参加50名（スタッフ6名、会員17名、賛助会員1名、非会員26名）オンラインでの参加は20名であった。SNSでの発信効果もあり、非会員の参加が会員を上回った。

エプソンで長年用紙開発に携わってきた、「イノーバ」羽賀勝彦氏が先導役で、ファインアート用紙の歴史や保存性、作品性、また染料インクと顔料インクの仕組みの違い、プリンターの歴史など熱く語った後、司会進行役の増田雄彦会員の誘導で、それぞれの製品の違いなどの説明に入った。

また展示コーナーには、それぞれの製品で実際のプリントを並べ、黒の締まり具合やハーフトーン、彩度、風合いの違いなど確認している参加者でにぎわっていた。

（記／大屋徳亮、撮影／藤田修平）

◆2023年度第1回技術研究会報告◆

ミラーレス交換レンズの魅力2023、CP+で魅せた製品群

2023年4月15日(土) 14：00～16：30
㈱ケンコー・トキナー本社7階セミナールーム、オンライン
参加数：54名

講師：田原栄一（㈱ケンコー・トキナー）、
桑山輝明（㈱シグマ）、西角久美子（㈱タムロン）

昨年10月に開催した技術研究会「ミラーレスカメラ用交換レンズの魅力に出会う」が好評であり、その後、新たな製品の発表発売が相次いだために、改めて新製品の紹介と技術的な詳細を交換レンズメーカー3社が発表する場を設けることとなった。

まず（株）ケンコー・トキナー田原栄一氏からツァイスレンズのラインナップの説明があった。今回は新製品ではないが作品制作にこだわる写真家には気になる存在だろう。トキナーレンズとしてはレフレックス（反射式）望遠レンズSZ PRO Reflexシリーズを詳しく解説した。

次に（株）シグマ桑山輝明氏は、「シグマレンズの探し方」を説明し、併せてMTF曲線の解説もした。同じ焦点距離でも画質優先のArt、軽量コンパクトなContemporary、過酷な使用状況ならSportsのカテゴリーがあり、次にフルサイズのDGかAPS-CのDCを選ぶ。末尾のDNはミラーレス専用設計のレンズとなっている。

そして（株）タムロン西角久美子氏はCP+自社展示ブースのコンセプトを説明し、新製品としてAPS-C用の明るくコンパクトでAF作動音が静粛な11-20mm F2.8 Di III-A RXD（B060）を紹介した。超広角ズームでありながら最短撮影距離が0.15mで今後対応マウントも増えるという。

講演後のハンズオンでは3社ブースの周りは前回にもまして賑わっていたのが印象的だった。質疑応答や来場者アンケートからは、純正レンズにはない焦点距離や機能が魅力的なこと、より多くのマウントに対応してほしいとの意見が多かった。　（記／川村容一、撮影／今井孝弘）

◆2023年度第2回技術研究会報告◆

組写真、テーマの見つけ方と表現～ドキュメンタリーフォト、ルポルタージュフォトのために～

2023年5月27日(土) 14：00～16：00
東京都写真美術館1Fスタジオ　参加数：31名
講師：宇井眞紀子、清水哲朗（会員）

今回開催した技術研究会は組写真で作品を発表することを目的とする写真家に向けた内容とした。最近はドキュメンタリー、ルポルタージュ作品に取り組む写真家が少なく、名取洋之助写真賞への応募作品も減少している。その対策と組写真に取り組んでいる写真家への一助となるべく企画した。

講師は長年にわたるアイヌ民族の取材など多くの作品を発表し第1回「笹本恒子写真賞」受賞者でもある宇井眞紀子会員とモンゴル取材をライフワークとし、自然風景からスナップ、ドキュメントまで幅広く発表し第1回「名取洋之助写真賞」受賞者の清水哲朗会員のお二人にお願いした。

宇井会員は単写真と組写真の違いから解説が始まり、自身のアイヌへの取材経験を中心にテーマの見つけ方、取材対象との信頼関係を築く過程を細やかに解説し、「いいな」と思った瞬間は写すことが重要と語った。伝統と文化、そして今を生きていることの両方を伝えてゆきたいという。

撮りためた写真の構成や順番は2L程度のプリントを並べて入れ替えることを繰り返し「これかな？」を探してゆく行程になる。ぜひプリントしてほしいと締めくくった。

清水会員は「取材力・写真力・構成力で圧倒する」というはっきりした結論から解説を行った。内容は濃密であり書ききれないが、情報収集の重要さと取材対象との関係構築に8割以上の労力を割きたいと語る。

写真力としては「距離感」が大切であり、構成では「つなぎ」が重要であるという。26年くらい撮っているモンゴルの取材経験と、多くの写真集と写真展で得た経験と知識を微細にわたり語った。テーマとしては「何よりもそれが好き」を被写体にしたい。組写真では「わざわざ複数の写真で伝える意味」を考えてほしいということだ。　（記／川村容一、撮影／藤田修平）

◆著作権セミナー◆

第2回知っておきたい写真著作権＆肖像権セミナー

2023年5月21日（日）東京都写真美術館1Fホール
参加数：のべ169名（午前午後合計）
6月25日（日）京都市勧業館「みやこめっせ」大会議室
参加数：140名

JPSとJPCA（一般社団法人日本写真著作権協会）との共催事業として、昨年に引き続き東京、京都の2カ所で開催した。いずれもJPS展会期中の開催で、東京会場は午前の部10:30～12:00「写真愛好家のための著作権講座Q＆A」。講師は吉川信之会員（著作権委員会委員長）が務めた。

JPS写真著作権相談室に寄せられた事例を元に、様々なトラブルと対処などをわかりやすく解説した。参加者からの質問が相次ぎ、終演後も約1時間にわたって個別の相談にアドバイスを行った。

午後の部13:30～16:30は講演＆パネルディスカッション。講演は大西みつぐ会員「路上の時代、スナップショットの記憶2023-1970」、山岸伸会員「1年間に1000人のポートレートを撮っている」。それぞれの講師が作品を見せながら、人物写真をどのように撮っているか、またアプローチの仕方などを話した。その後のパネルディスカッションでは、棚井文雄氏（JPCA常務理事）の進行で、大西会員、山岸会員と街中で撮影するためのマナーや公表時の注意点などを話し合った。熱を帯びた討論に来場者も引き込まれた。

京都は13:00～16:00まで講演＆パネルディスカッションを行った。講演は溝縁ひろし会員「昭和の祇園」、ハービー・山口会員「街でスナップを撮りにくい時代だけど、やはり私は人物を撮りたい」。パネルディスカッションでは同じく棚井氏の進行で、溝縁会員、ハービー会員と討論した。溝縁会員の昭和時代の祇園スナップと、ハービー会員の現代のスナップ事情は異なるものの、撮る側のアプローチの仕方が影響を及ぼすことや、参加者からリクエストのあった生成AIの話題など盛り沢山の内容で、時間が足りない印象であった。当日の参加希望者も多く、急きょ座席を追加して対応した。

（記／榎並悦子、撮影／菊池一郎（東京）、大津茂巳（京都））

◆国際交流委員会ウェブサイト企画◆

「表現者たち」

JPSホームページの記事から抜粋して紹介する。

Vol.11
「光と影の物語」

太陽と月をとらえる魔術師 インド人写真家・クルティク・タクール氏の”Light Meets Shadows”
企画・取材・構成：ブルース・オズボーン　翻訳：井上佳子

インド西部にあるマハーラ－シュトラ州ダハヌに住むクルティク・タクール氏は、太陽と月を主な被写体として選び、独自の優れた発想力と創作力でユニークな写真を撮っている21歳の写真家です。

最初に写真を撮るために使った道具は携帯電話で、しかも、その作品を発表したのがSNSという新しい世代。SNSを駆使して自身の作品を世界に発信するタクール氏は、今まで「表現者たち」で取り上げてきた写真家とは一線を画し、異なる経過を経て今に至る青年写真家ですが、写真への取り組みを常に試行錯誤する写真界にあって、新たな可能性を広げてくれる写真家の一人として、今回フォーカスしたいと思います。写真を撮りはじめてからまだ日も浅く、まだまだ成長の過程のタクール氏ですが、メインのソーシャルメディアといわれているInstagramでは、世界中に50,000人のフォロワーがおり、フォトコンテストでは数々の賞を受賞。日本、ドイツ、イタリア、ロシア、イギリス、中国などのテレビ番組や雑誌でも紹介されています。

Football with Sunset

プロの写真家を目指したいと思っている若い世代へは希望と勇気を、SNSにはなじみがない世代には新たなヒントを発見する機会となることを願う。

【プロフィール】

インド西部の海岸沿いの町出身。独学で写真を撮り始めてから3年目。「Light Meets Shadow」シリーズを撮り続けている21歳の写真家。英国、イタリア、インドの新聞や雑誌でも紹介された。50,000人を超えるInstagramのフォロワーがおり、彼の作品を紹介する重要なプラットフォームとなっている。

Vol.12
「祖国を守る」 宮嶋 茂樹

～日本の報道写真家が見たロシア侵攻後のウクライナ　2022年春

編集・構成：秋山哲也

まさか、こんなもんが必要になるとは…。JPS発行のプレスカードなるもんが。どうせコロナ禍の上、紛争地をホームにしてきた報道写真家にとっては開催中の北京オリパラにもお呼びがかかるわけもなく、海の外にまで出かける仕事なんぞ当分来ない。そう踏んでいた。

そんなフリーの写真家の浅はかな情報分析に反し、北京パラリンピック開催中の2022年2月24日、ロシアはウクライナへの侵攻を開始。日本の1.4倍の面積のウクライナ全土がロシア軍ミサイルの射程に入った。

大国のからんだ戦争は2003年のイラク戦争以来、20年ぶりである。そんなイラクでも、コソボでもやってきたのは米軍やNATO軍だった。一時的には混乱を招いたものの、結果解放軍となった。しかしウクライナでは、やってくるのは明らかな侵略軍。しかも民家にためらわず砲弾を降らせるロシア軍である。「怖い」。それでも行かんと。もうこれが最後。本当に最後の戦場取材にすべく、還暦過ぎの老体にむち打ち、準備を進めた。

キーウまで20㌔足らずのここイルピン市。首都攻防戦の最前線となった。　ⓒ宮嶋茂樹

しかしすでにウクライナ全土の空港は、閉鎖されたか破壊され、黒海にはすでにロシア艦隊がびっしりである。ウクライナまでは陸路しかない。そうなると鉄道か？ 足（クルマ）はどうする？ 食料は？ 行けたとしても写真送れんとどうしようもない。通信事情はどうなのか？ 不安が不安を呼び恐怖が増すばかりである。第一、戦場にたどりつけたとして、いやその道中の通行許可に取材許可（プレスカード）はどこでどうやって取得する？

ロシア、ウクライナの戦力差を考えると、ウクライナは1か月どころか、1週間も持たないだろう。不肖・宮嶋がキエフ（現キーウ）に入る頃は、首都はロシア軍に占拠されているかもしれない。「やっぱり怖い」。

幸か不幸か出発前のPCR検査では陰性反応。報道の神は不肖・宮嶋に「行け」と啓示を与えたのであった。

【プロフィール】

1961年5月、兵庫県生まれ。通称「不肖・宮嶋」、自称「写真界のG・クルーニー」。日本大学芸術学部写真学科卒業。写真週刊誌の専属カメラマンを経てフリーの報道写真家に。主に国内外の事件・事故、災害、紛争などを取材。

Vol.13
人生は不思議だ～

まるで見えない糸に引かれるように展開する

内藤 忠行

編集・構成：佐藤仁重、中村惠美　協力：英 愛子

俺は1941年、東京浅草の田原町に生まれた。父は洋食店「シャーリー」を営んでいた。戦争によって父は戦地へ、母は3歳の俺と弟を連れて福井に疎開。浅草は焼け野原となり、戦後一家が落ち着いたのは東京の外れ、小岩というところだった。勉強は嫌いで学校から帰ると、裸足で茜色の空に蝙蝠が舞うまで自然と戯れたり、庭に放した生き物たちと暮らすのが好きだった。女郎蜘蛛の張った糸が朝の光に照らし出され、幾何学模様が微風のそよぎで消えたかと思うと、光と風が糸を虹色に照らし出す。その光景はリアルで詩的で美しく、その上音楽的な世界だった。音楽的といえば、母の三味線と長唄、祖母の義太夫、78回転のSP盤のジルバで従兄弟たちが踊っている、というような環境だった。17～18歳になると、タバコのヤニが染み込んだジャズ喫茶の片隅が俺の最高の居場所になった。ジャズは俺の未開な鼓膜を震わせ、魂を揺さぶった。それは自然、野生の素晴らしさに相通じる感覚だった。俺は食い入るように彼らの独白を聴き続けた。「俺はこう感じるけど、お前はどうなんだ？」と、ミュージシャンたちがいつも問いかけて来るのを感じた。その時、思ったんだ。写真なら出来る、って。

ⓒ Tadayuki Naitoh

【プロフィール】

1941年、東京浅草生まれ。ジャズと出会い、そのフィーリングとバイブレーションを映像化すべく写真家を志す。1970年代からは、マイルス・ディビスなどオリジナルなスタイルを創造した天才ミュージシャンから学んだ表現方法を写真に応用し、精力的にコンサートライブを撮り続け、多数のレコードジャケットを手がける。

Message Board

◆杉山正己（1994 年入会）

賛助出演した日米合作映画「霧が晴れるとき」（会報 176 号既報）が、2022・東京ドキュメンタリー映画祭『準グランプリ』、今年３月大阪上映館では投票による『観客賞』を受賞。一方コロナ禍で職を失いかけた私は海外ロケ時に撮った組写真とアラスカで知り得た史実を記し、「Forget me not（戦争を）忘れないで」にまとめ、某誌コンクールに応募するも梨のつぶて。「今年度グランプリ該当作なし」とつれなかったが、捨てる神あれば拾う神あり。米国内務省は、『Attu Boy』（共編・表紙：1942 年アッツ島で JPS 創立会員杉山吉良撮影）を刊行。

2022 年５月、バイデン米大統領訪日に併せ、国会図書館に収蔵された。今年アッツ島玉砕 80 年。いま世界では「戦争」が始まってしまった。

（東京都千代田区在住）

◆小橋健一（1979 年入会）
元気の源

５月初旬長男からメールが届いた。両親の結婚 54 周年の記念にプロ野球セ・パ交流試合に招待します。嬉しい、行くよ！直に OK した。5月 31 日その日がやってきた。ZOZO マリンスタジアム入場と同時にプレイボール。座席に座る暇もなく鳴り物入りで手拍子歓声がうねりとなりスタンドを覆う。熱い応援に負けまいと９歳の孫と声を振り絞り手を叩いた喜びこそ掛け替えのない元気を貰ったと感じています。３年以上のコロナ禍を撃退気分にも触れてサイコー？

（東京都品川区在住）

◆虫上 智（2011 年入会）

この水族館ガイドブックは 2021 年より、カメラのキタムラウェブサイト・SYASYA で現在も連載中の「全国絵になる水族館めぐり撮影旅」で撮影した３万点以上の撮影カットの中から選りすぐった全国の水族館、39 館を４つのテーマに分けてピックアップし、改めてガイドブック用に編集しなおして再構成した水族館の今を紹介するダイジェスト本となっています。各ページの私が撮影した写真には当時お伺いした数々の展示についてのリアルなコメントも入れております。

（岡山県倉敷市在住）

◆前川貴行（2007 年入会）

今年３月にフォトエッセイ『動物写真家の記憶』新日本出版社刊を上梓しました。この本は、『日本カメラ』誌において 2018 年１月号から２年間に亘って連載した「EARTH FINDER」を元に写真を追加再構成し、まとめたものです。野生動物の撮影取材を通し、そのときどきに感じたり思ったり、気づいたことを可能な限り飾らずに記そうと意識して書きました。野生の生き物たちや大自然から、これまで本当に多くのことを学んだと思うのですが、それが自分の人生に大きく影響していることの証でもあります。写真と共に文章も合わせて楽しんでいただけたらと思います。ぜひ手にとってご覧いただけましたら幸いです。

（東京都八王子市在住）

◆諸河 久（1982 年入会）

出版社勤務からフリーに転向した 1980 年代初頭は、鉄道写真撮影に没頭する日々を送っていた。当時の作品整理は誠に杜撰で、出版社貸出分だけカラーポジフィルムをカットし、残りはラッシュのまま保存していた。

昨年来、クライアントから当該のラッシュフィルム群から未発表作品を選抜して写真集を出版する企画をいただいた。編集作業に半年を費やし、208 ページの紙面に 190 点に及ぶ作品を反映した第１巻の『1970 年代～ 80 年代の鉄道　国鉄列車の記録【東日本編】』を本年４月に上梓した。

この時代の主力感光材料がプロから絶対的な信頼を得ていた高解像度で退色に強い「コダック・コダクローム 64（KR）」だったことも功を奏し、40 余年の時空を超えて鮮明なカラー作品として再現することができた。

（東京都中央区在住）

◆福田俊司（1998 年入会）

BEARS はワイルドライフの王者。恐ろしくも愛らしい、ツキノワグマ、ヒグマ、ホッキョクグマの案内で、東アジアの大自然を旅していただく。今年で 75 歳……写真家にとって歳をとるのも悪くない。気負いが消え、肩の力をぬき、野生の生命の輝きと向きあう。逃げる被写体を追わず、隠れて撮らない。単身で大自然にあそぶ……ときには１か月以上もおなじ場所で撮影チャンスを待ちつづける。この心境にいたったのは、アムールトラ目視撮影だった。野生トラの足跡を発見し、岸壁に穴を掘って寝泊まり……74 日間でワンチャンス。

この作品「Tiger untrapped」は「Wildlife Photographer of the Year 2013 年」の部門最優秀賞日本人初受賞。この作品もクマの天敵として『BEARS』に収録。

（栃木県宇都宮市在住）

◆岡 克己（2004 年入会）

『実篤公園　春夏秋冬　季節色の写真点描』をいっぱい詰め込んだ写真集です。水のある所に住みたいという願いが叶い、文学、美術などの幅広い分野で業績を残された武者小路実篤氏が、晩年 20 年間を過ごされた邸宅が、武者小路実篤記念館・実篤公園（東京・調布仙川）として一般公開されています。

国分寺崖線にあって約５千平方メートルしかない小さな公園なんですが、草木花、旧邸宅、湧水、上の池、下の池、ヒカリモ等々、静かに佇んで観察していると、四季折々、季節の移ろいが七変化、被写体には事欠きませんでした。季節の節目には、必ずや開きたくなる写真集になったのではと

自負しています。（東京都調布市在住）

◆野田雅也（2016 年入会）

東日本大震災で壊滅した岩手県大槌町。造船所を舞台に、復興の軌跡を 11 年間に渡り記録した写真集『造船記』（集広舎）を、今年3月 11 日に出版しました。震災直後、ひょうたん島のある湾の岸辺で、がれきから工具を拾い集める船大工と出会いました。

当時、造船所から津波で流された漁船は陸に打ち上げられ、民宿の屋根に乗った観光船もありました。漁師町の復興に、船は欠かせません。船大工たちは「やんねばなんね」と声をそろえ、再生のために被災船の解体や修復を始めました。あの惨状から、誰が、どのようにして町を再建するのか。暮らしの明かりが灯る日を夢見て、槌を打ち続けた船大工たちの不屈の歩みを伝え残すフォトストーリーです。（埼玉県富士見市在住）

◆岡本 央（1987 年入会）

長崎市立銭座小学校の6年生が平和学習の集大成として取り組む共同制作の絵画「火のトンネル」。存在を知ったのは 15 年ほど前のこと。絵の迫力に圧倒され、以来雑誌等で紹介してきたが、北朝鮮のミサイル発射やロシアのウクライナ軍事侵攻の報道を耳にするたび、子どもたちの声－たくさんの人に絵を見てほしい－がよみがえってきた。そんな彼らの願いから生まれた2冊の写真絵本。戦争・原爆とは何かを子どもたちの言葉をもとに考える『火のトンネル』。被爆遺構の保存活動を続ける入市被爆者の姿から原爆を語り継ぐ大切さを考える『赤いボタン』。

戦争の犠牲になる子どもを少しでも減らしたい。子どもを撮り続けてきた私の願いも、この絵本に込めた。

（東京都練馬区在住）

◆吉村和敏（2014 年入会）

20 代の頃から続けている海外の旅は、「美しさ」を追い求める旅でもあった。最初、カナダ各地を巡っていたときは、森や湖、空や台地、朝焼けや夕焼けなどの自然の「美しさ」に心ときめかせていた。やがて、家屋や納屋、教会や灯台などの人工物が、周りの自然と調和している様に「美しさ」を見出すようになり、ヨーロッパをテーマにするようになってからは、歴史的建造物や聖堂の祭壇やステンドグラス、彫刻や壁画など、建築家や芸術家が生み出した作品の「美しさ」に深く心が奪われていった。異文化の中に潜む究極の美を知れば知るほど、私はその国の歴史や文化に興味を覚え、宗教を中心とした人びとの思想を理解するようになっていく。この写真集には、世界の「美しさ」をテーマにした作品を閉じ込めてみた。

（東京都江東区在住）

◆櫻井 寛（1992 年入会）

『列車で行こう！ＪＲ特急大図鑑』を上梓しました。内容は現在ＪＲで運行中の全 121 特急の写真図鑑ですが、本書を制作中に疑問が生じました。特急とは「特別な急行列車」という意味ですが、普通の急行は1本もないのです。私が写真学生だったおよそ 60 年前の国鉄は、急行と準急が大半で、特急はそれこそ幹線に1日1～2往復程度と、まさに特別な存在だったのです。なぜ、急行は消えてしまったのでしょうか？　理由は急行券よりも特急券の方が高かったからだそうです。さて、来年の3月ですが、キヤノンギャラリー 50 周年企画展の第7弾として「櫻井寛鉄道写真展 列車で行こう！ The Railway World」が、品川、銀座、大阪の3会場にて同時開催されます。どうぞ、ご期待ください。

（東京都稲城市在住）

◆荒谷良一（2000 年入会）

4月に「木造校舎の子供たち」という写真展をし、写真集を出版いたしました。私自身は、木造校舎で学んではいないので、私の記憶の中の風景ではありません。ただ私は、宮沢賢治や坪田譲治の童話が好きで、その中に出てくる子供たちは自然の中で学び、遊び、そして木造校舎が目に浮かんできます。そんな風景に漠然とした憧れを持っていました。そこで 1991 年当時でもなくなりかけていた、木造校舎の写真を撮りたいと思いました。スマホもない時代、今より少し不便だけどその中で工夫して生き生きと学び、遊ぶ子供たちの姿がありました。私たちは便利さと引き換えに何か大切なものを失ったようにも感じます。私たちは今一度立ち止まり考えるべきだと思います。

（東京都品川区在住）

◆都築雅人（1996 年入会）

都築雅人写真展
煙情日記6・国内蒸気機関車の魅力

昨年天夢人社から写真集『国内蒸気機関車の魅力』を出版。これを基に今年品川キヤノン本社・キヤノンオープンギャラリー1で写真展を開催することになりました。すでに発表済みのものや撮り下しのものを含め 38 点を展示します。国内で動態保存されている蒸気機関車をメインに懐かしい風景や沿線で出会った人々などをご覧いただければと思います。

9月 20 日（水）～ 10 月 19 日（木）10：00 ～ 17：30 日曜・祝日休館　キヤノンオープンギャラリー1：キヤノンＳタワー 2F

（東京都新宿区在住）

◆池口英司（2016 年入会）

昨冬に、河出書房新社から『JR 旅客 6 社徹底比較』を上梓しました。JR6 社の現況を、経営規模、列車運転本数などさまざまな面から数字で比較し、考察を加えた一冊です。JR が発足してから 30 年以上が経過し、変貌著しいといったところなのですが、調査をしていて興味深かったのは、経営規模の小さなところほど、面白い仕事を手掛けているということでした。必要は発明の母というのはビジネスの世界にも通用しそうな言葉で、それは取りも直さず、私たちにもいえることである気がしました。せっかく自由な立場で仕事をしている身です。もっとトライ＆エラーを楽しまなければいけません。

（神奈川県横浜市在住）

2023JPS 展
報　告

写真展事業委員会委員長　加藤恵美子

2023JPS 展が全日程を終え、無事に閉幕した。

東京展は東京都写真美術館にて 2023 年 5 月 20 日（土）から 5 月 28 日（日）の 8 日間、関西展は京都市美術館別館にて 6 月 20 日（火）から 6 月 25 日（日）までの 6 日間で開催した。

今回作品応募総数は 1,481 名 4,524 枚、うち一般部門が 1,322 名 4,201 枚、18 歳以下部門が 159 名 323 枚と全体の応募枚数では昨対比－ 6 %の微減であった。新型コロナウイルス感染症による行動制限が緩和されたのが後押ししたのか、社会が活気を取り戻しつつある状況が、応募数にも表れた印象だ。完全に元通りの生活とはいい切れない中、応募作品には過去に撮影した作品や、身近なところで工夫を凝らした作品も多数あったように思われる。

審査は野町和嘉審査員長、菊池哲男氏、白鳥真太郎氏、土屋勝義氏、白山眞理氏（一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長）によって行われた。厳正な審査の結果、文部科学大臣賞には森建一郎さんの「郷愁」。東京都知事賞には西川武則さんの「路地裏の生き物たち」。18 歳以下部門最優秀賞には田中碧さんの「見果てぬ夢」が選出された。

東京展では新型コロナウイルス感染症前と同じように入選者までを対象にし、表彰式を開催した。多くの受賞者で会場がほぼ埋め尽くされ、笑顔と喜び溢れる盛大な式となった。その後、審査員による受賞作品講評会、最後に祝賀パーティーも多くの参加者とともに行われ、華やかな JPS 展の初日を迎えることができた。

展示は、受賞作品 378 枚に加えてヤングアイ 10 枚、JPS 会員作品 101 枚、合わせて 489 枚の作品を展示し、受賞者と会員写真家の力作が楽しめる展示となった。会期中は連日盛況により、三千人超と昨年を上回る来場者数となった。今年は特に若年層と訪日外国人の来場者が目立ち、次世代へ繋げるべく JPS 展の未来が見えた気がした。

表彰式　（5.20 東京都写真美術館ホール、撮影：小城崇史）

会期中には、企画委員会による「組写真、テーマの見つけ方と表現～ドキュメンタリーフォト、ルポルタージュフォトのために～」、著作権委員会による「知っておきたい写真著作権＆肖像権セミナー」、写真展事業委員会による「会員写真家によるポートフォリオレビュー」「フィルム愛を分かち合おう」など写真の幅広いジャンルを捉えたイベントを開催し、どのイベントも多くの参加者で賑わいを見せた。

関西展では、会期前イベント「スタジオポートレート撮影会」を皮切りに、作品講評会、三田崇博氏による講演会「世界遺産に魅せられ 100 以上の国を撮影した三田崇博が語る撮影物語」、懇親会が盛況に行われ、最終日に「京都市動物園撮影会」と著作権委員会による「知っておきたい写真著作権＆肖像権セミナー」も行った。

今年は図録の販売数も伸び、この勢いを絶やすことなく更に盛り上げていきたいと思っている。そのためには 2024JPS 展でも、引き続き会員の皆さまのご協力をいただきたいと願っている。

2023JPS 展図録の表紙

東京都知事賞受賞者の西川武則さんと野町審査員長　（撮影：小城崇史）

審査員による受賞作品講評会　（撮影：小城崇史）

第 48 回 2023JPS 展の報告

公募受付：2022 年 11 月 10 日（木）～ 2023 年 1 月 15 日（日）
作品審査： 2 月 2 日（木）
審 査 員：野町和嘉（審査員長）、菊池哲男、白鳥真太郎、土屋勝義、白山眞理（一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長）
後　　援：文化庁ほか
総展示数：489 枚（公募 213 名 378 枚、会員作品 73 名 101 枚、ヤングアイ 10 校 10 枚）
応募総数：1,481 名、4,524 枚
（一般：1,322 名、4,201 枚　18 歳以下：159 名、323 枚）
入賞・入選者総数：213 名、378 枚
一般部門：172 名、300 枚（文部科学大臣賞 1 名、東京都知事賞 1 名、金賞 1 名、銀賞 2 名、銅賞 3 名、奨励賞 5 名、優秀賞 20 名、入選 139 名）
18 歳以下部門：41 名、78 枚（最優秀賞 1 名、優秀賞 10 名、入選 30 名）
総入場者数：4,414 名

入賞者氏名

文部科学大臣賞	森建一郎	郷愁	単カラー
東京都知事賞	西川武則	路地裏の生き物たち	3 枚組カラー
金賞	吉澤秀行	雪の妖精	3 枚組カラー
銀賞	藤野治雄	祈り	5 枚組カラー
銀賞	三浦征志浪	我が家の宝	単カラー
銅賞	吉岡奈津美	水滴の詩	3 枚組カラー
銅賞	岩崎幸男	涸沢の夜	単カラー
銅賞	森口菊枝	凍える朝	単カラー

（奨励賞以下略）

18 歳以下部門最優秀賞	田中 碧	見果てぬ夢	4 枚組 カラー

（18 歳以下部門 優秀賞以下略）

会員作品：73 名 101 枚

企画展示「ヤングアイ」
公益社団法人日本写真家協会 会長賞：現代写真研究所 飯塚明夫ゼミ「聖」（ひじり）平川 正枝・高橋 侑也
ヤングアイ奨励賞：学校法人 日本写真映像専門学校「いやなことがあったとき」米田 充希・河田 瑞季・おまつ（松下）
ヤングアイ参加校：10 校
現代写真研究所 飯塚明夫ゼミ、東京綜合写真専門学校、日本写真芸術専門学校、日本大学 芸術学部 写真学科、九州産業大学 芸術学部 写真・映像メディア学科／生活環境デザイン学科、 名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科、学校法人 日本写真映像専門学校、ビジュアルアーツ専門学校 大阪 写真学科、大阪芸術大学 写真学科、東京工芸大学 芸術学部 写真学科

【東京展】
後　援：文化庁、東京都
共　催：東京都写真美術館
会　場：東京都写真美術館 B1F 展示室
会　期: 5 月 20 日（土）～ 5 月 28 日（日）10:00 ～ 18:00（木・金は 20:00 まで）、月曜休館
表彰式・講演会： 5 月 20 日（土）東京都写真美術館 1F ホール 13:00 ～ 14:30 表彰式　参加者数／ 140 名、15:00 ～ 16:30 審査員による受賞作品講評会　講師／野町和嘉、菊池哲男、土屋勝義、白山眞理（一般財団法人日本カメラ財団調査研究部長）　参加者数／ 149 名
祝賀パーティー： 5 月 20 日（土）17:00 ～ 19:00　恵比寿ガーデンカフェ　参加者数／ 140 名
イベント： 5 月 26 日（金）「会員写真家によるポートフォリオレビュー」 参加者数／ 19 名、 5 月 28 日（日）「フィルム愛を分かち合おう」 参加者数／ 16 名
入場者数：3,125 名

【関西展】
後　援：文化庁、京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市教育委員会
会　場：京都市美術館別館 2F
会　期： 6 月 20 日（火）～ 6 月 25 日（日）10:00 ～ 18:00
作品講評会・講演会： 6 月 24 日（土）京都市勧業館「みやこめっせ」大会議室　14:00 ～ 15:30 作品講評会　講師／野町和嘉、熊切大輔、柴田明蘭　参加者数／ 82 名、15:45 ～ 16:45 講演会　講師／三田崇博（JPS 会員）　参加者数／ 42 名
イベント： 6 月 18 日（日）「スタジオポートレート撮影会」参加者数／ 28 名（第 1 部、第 2 部延べ人数）、6 月 25 日（日）「京都市動物園撮影会」 参加者数／ 16 名
入場者数：1,289 名

協力：キヤノンマーケティングジャパン株式会社、ソニー株式会社
副賞提供社数：51 社

第 48 回 2023JPS 展
写真展事業委員会
担当理事：熊切大輔　委員長：加藤恵美子　副委員長：吉永陽一　委員：小林みのる、曽根原昇、奈良岡忠、本間伸彦、渡部晋也

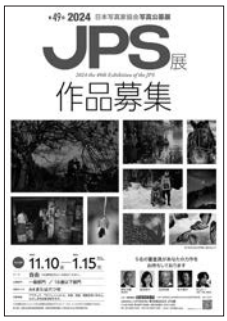
関西展実行委員会
委員長：葛原よしひろ　副委員長：金城泰哲　委員：大西としや、上吉川祐一、中島雅彰

東京展会場　（撮影：小城崇史）

関西展会場　（撮影：八木ジン）

第 49 回 2024 JPS 展案内

写真展事業委員会



1976 年にスタートした JPS 展は来年第 49 回目を迎えます。今回も一般公募を例年どおり募集します。

下記のホームページからすべての応募規定・注意事項をご覧いただけますので、熟読のうえ、ご応募ください。応募に必要な記入用紙のダウンロードもできます。皆さまの力作をお待ちしております。

https://www.jps.gr.jp/2024jpsten_oubo/

＜第 49 回 2024 JPS 展　応募規定＞

●テーマ

自由　＊注意事項をよくお読みください。

●応募資格

アマチュア、プロフェッショナル、年齢、性別、国籍を問いません。ただし JPS 会員は除きます。

●応募部門

一般部門：年齢を問いません。

18 歳以下部門：2005 年 4 月 1 日以降生まれの方。

●応募プリント

用紙サイズは A4 または六つ切 8 × 10 インチ（203 × 254mm）に限る

カラー、モノクロ共プリントのみ（デジタル・銀塩を問いません）。デジタル加工も可。ただしデジタル加工・合成等の欄に印を入れること。作品は、必ず応募者本人が撮影したものであること。画像生成 AI などで加工・合成した作品も同様に素材すべてが応募者本人の撮影であること。入賞・入選者には素材データの提出を求めることがあります。

●出品点数

単写真＝制限はありません。組写真＝5 枚までを 1 組の限度として何組でもかまいません。組写真は、左より順に並ぶように構成して番号をつけてください。ただし、写真同士を貼り付けないこと。また台紙にも貼らないで応募してください。

●受付手数料

一般部門：1 枚につき 2,500 円（組写真の場合も 1 枚 2,500 円）

18 歳以下部門：1 枚につき 800 円（組写真の場合も 1 枚 800 円）

郵便局より下記、郵便振替口座へ 2024 年 1 月 15 日までにお振込みください。お振込みがない場合は審査しません。

作品の中に受付手数料を同封することは、厳禁とします。

応募作品返却希望者は、返却料 2,500 円を加算してお振込みください。（応募作品の返却は 6 月下旬から 7 月上旬を予定しています。海外からの応募の場合は返却できません）

郵便振替 口座番号：00110-5-651936

口座名称（漢字）：日本写真家協会 JPS 展

＊通信欄に応募部門、応募合計枚数、応募者の郵便番号、住所、氏名、氏名フリガナ、電話番号を必ずご記入ください。

＊氏名には必ずフリガナをふってください。

●受付及び締切

2023 年 11 月 10 日（金）～ 2024 年 1 月 15 日（月）まで。

郵送または宅配便に限ります。直接持参されても受付いたしません。最終日消印有効。

●審査員

熊切大輔（審査員長）、喜多規子、広田尚敬、前川貴行、村上仁一（雑誌『写真』編集長）（予定）

●審査結果

3 月中旬頃、応募者全員に文書にて通知。また、ホームページ（https://www.jps.gr.jp）とメールマガジンでも発表します（電話でのお答えはいたしません）。

●展示用作品

入賞・入選作品は、後日指定する期日までに各自で指定サイズに引伸し、再提出していただきます。その際には作品の原板・データが必要になりますので、必ず保存しておいてください。文部科学大臣賞、知事賞（仮称）、金・銀・銅賞作品については大型サイズになる場合があります。

●展示及びパネル製作費

入賞・入選作品は当協会特注パネルにて展示しますので、一般部門は 1 枚につき 10,000 円、18 歳以下部門は 1 枚につき 5,000 円を指定の期日までに納入していただきます。応募者の申し出による入賞・入選の辞退はできません。応募規定違反など何らかの事由により入賞・入選取り消しとなった場合には、違約金として 5,000 円を申し受けます。やむを得ない事情により展覧会が催行できない場合には、ホームページ上での展示及び公開とし、パネルは後日着払いの宅配便で返送します。製作費の返金はいたしません。ご了承のうえご応募ください。

●図録

第 49 回 2024JPS 展図録の刊行を予定しています。図録の原稿には応募作品を使用します。

●賞

一般部門

文部科学大臣賞　1 名（賞状・盾・賞金 60 万円・副賞）

知事賞（仮称）　1 名（賞状・盾・賞金 30 万円・副賞）

金賞　1 名（賞状・盾・賞金 10 万円・副賞）

銀賞　2 名（賞状・盾・記念品・副賞）

銅賞　3 名（賞状・盾・記念品・副賞）

奨励賞　5 名（賞状・盾・記念品・副賞）

優秀賞　20 名程度（賞状・記念品・副賞）

入選　170 名程度（賞状・記念品）

18 歳以下部門

最優秀賞　1 名（賞状・盾・副賞）

優秀賞　10 名程度（賞状・記念品・副賞）

入選　30 名程度（賞状・記念品）

審査員特別賞　1 校（賞状・盾・記念品・副賞）

※団体でまとめてご応募いただいた学校の中から選出します。

●展示会場・会期

東京都写真美術館　2024 年 5 月 18 日～ 5 月 26 日（予定）

京都市美術館別館　2024 年 6 月 18 日～ 6 月 23 日（予定）

※やむを得ない事情により展覧会が催行できない場合には、ホームページ上での展示及び公開に変更いたします。

●注意事項

1. 原則として未発表作品に限ります。商用利用（販売・ストックフォト）された作品は応募できません。過去にコンテスト等で入賞・入選した作品及びそれらに類似した作品（同じ対象を同じような条件で同じ時期に撮影した作品）は応募できません。また、現在コンテスト等に応募し結果が判明していない作品も応募できません。
2. 被写体の肖像権、著作権には十分にご注意ください。スナップ等で人物を撮影された場合には、コンテスト応募の承諾を得てください。
3. すべての応募作品の著作権は撮影者に帰属します。ただし、入賞・入選作品は巡回展終了までの間に当該作品を他に使用する場合、当協会の許諾を得てください。
4. 入賞・入選作品は、審査結果発表後、優先的に当展の広報宣伝等の目的範囲内で雑誌その他に使用することがあります。
5. 応募作品の返却を希望される方は、受付手数料納入の際、返却料 2,500 円（枚数に関係なく）を加算してお振込みください。※海外からの応募の場合は返却不可となります。返却は 6 月下旬から 7 月上旬を予定しています。
6. 入賞・入選の展示作品は展覧会終了後、着払いの宅配便で返送します。
7. 作品受理以前の事故、破損につきましては、その責任を負いかねます。作品は慎重に取り扱いますが、輸送途中の不可抗力による事故等に対する責任は負いかねますのでご了承ください。
8. 受付手数料、パネル製作費はいかなる場合でも返金いたしません。
9. 応募者は応募規定、注意事項を全て了承したものとみなし、違反した場合には入賞・入選は取り消しとなり違約金として 5,000 円を申し受けます。応募作品到着後における応募、入賞・入選及び展示の辞退はできません。また、過去に規定違反のあった方の受付はお断りすることがあります。
10. 応募者の個人情報の利用は今回の JPS 展と今後の応募のご案内などの範囲とし、管理を慎重にいたします。
11. 18 歳以下部門に応募された方が入賞・入選された場合は、年齢確認の資料を提出していただきます。

●氏名、住所、題名、フリガナ等は、わかりやすく楷書でお書きください。

●組写真の場合、作品目録の題名は、1 組につき 1 行で書いてください。写真の枚数分題名を書く必要はありません。

●作品目録は、必ず本人控用のコピーを保存しておいてください。

●応募票が不足する場合は、コピーし、また作品番号を修正してご使用ください。

● JPS 展の最新情報をお届けするメールマガジンを配信しております。（https://www.jps.gr.jp/jps-ten-magazine/）

●応募後、住所変更等がある場合はお知らせください。

●応募に関するよくある質問　https://www.jps.gr.jp/jpsten_faq/

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載いたします。
(2023年2月～7月)
①発行所
②発行年月
③サイズ
(タテ×ヨコ)、頁数
④定価
⑤寄贈者
⑥電子書籍ストア
本紹介／出版広報委員・池口英司

里山の宇宙 キタキツネ

泊　和幸

①彩流社 ②2023年2月
③21 × 29.7㎝、228頁
④6,000円 ⑤泊氏

北海道に生きるキタキツネの記録。愛らしいイメージのあるこの小動物も、自然の中で獲物を追う姿は精悍で、野生の生き物であることを理解できる。野生の生き物は殊更に用心深いという。撮影の苦労はいかばかりだったろう。

造船記

野田雅也

①集広舎 ②2023年3月
③25.8 × 18.2㎝、240頁
④3,500円 ⑤野田氏

東日本大震災で壊滅的な被害を受け、しかし復興に向けて立ち上がった人びとの姿をおさめる。船大工たちは声を合わせて立ち上がり、船を造り始める。人間はいかに生きるべきかという永遠のテーマが凝縮されている。

1970年代～80年代の鉄道 国鉄列車の記録［東日本編］

写真・諸河　久、解説・寺本光照

①フォト・パブリッシング
②2023年4月 ③25.7 × 18.3㎝、208頁
④3,600円 ⑤発行所

東日本を走った国鉄列車の姿を収録。EF65形、103系など、今は見ることも稀になった形式が続ぞくと登場する。この時代には当たり前だった風景が、今はとても懐かしい。愚直に記録を続けることも、写真家の大切な仕事なのだ。

BEARS

福田俊司

①文一総合出版 ②2023年3月
③21.8 × 30.3㎝、136頁
④4,500円 ⑤福田氏

大自然の中で生きる孤高の生き物の姿を追う。ツキノワグマとヒグマ、ホッキョクグマの姿を収録。極東ロシアに30年間通ったという著者の労作とも呼びたくなる1冊。ところどころに登場する小熊たちの可愛いこと！

北信濃から お便りです

岡　克己

①盛モ堂 ②2023年3月
③18.3 × 25.7㎝、76頁
④2,500円 ⑤岡氏

広い長野県の中でも俗に北信と呼ばれる地方の、四季それぞれの姿を収録。山並み、リンゴの樹、通学の子どもたち、山あいを走るディーゼルカー……。各ページに登場する情景の何もかもが愛おしくなる現代の風土記。

JR旅客6社 徹底比較

池口英司

①河出書房新社 ②2023年1月
③18.8 × 12.8㎝、208頁
④1,420円 ⑤池口氏

北海道から九州まで路線網を広げるJR 6社について、経営規模、路線長、列車本数、駅の数などを数値に基づいて比較する。各社間の格差の中に、6社それぞれの経営姿勢の差異を読み取ることができる。

鉄道から見放された列車たち

池口英司

①イカロス出版 ②2023年4月
③18.2 × 12.8㎝、216頁
④1,800円 ⑤池口氏

寝台特急「北斗星」など、かつては「名列車」ともてはやされながら、今は姿を消してしまった列車は数多い。本書ではその背景を追いながら、現代の鉄道が抱えている数かずの問題点について考察する。

動物写真家の記憶

前川貴行

①新日本出版社 ②2023年3月
③21×14.8cm、192頁
④3,100円 ⑤前川氏

サル、クマ、ウサギ、キリン、イルカ、そしてもちろんヒトなど、本書には地球に住まうあらゆる動物が登場する。そしてそれらの動物に寄せた著者の思い、あるいは写真家の日常が綴られる。愛らしく、そして骨太の写真集だ。

列車で行こう！ JR特急大図鑑

櫻井　寛

①世界文化社 ②2023年5月
③25.7×18cm、304頁
④3,300円 ⑤発行所

JRで運転されている列車の図鑑。現役の121列車が登場。北から南まで、趣向を凝らしてデザインされた列車の姿はバラエティーに富み、壮観だ。各列車の解説文にはルビがふられ、子どもでも楽しく読むことができる。

ダンサー

宇井眞紀子

①JCIIフォトサロン
②2023年5月 ③24×25cm、31頁 ④1,000円 ⑤発行所

アイヌ民族を撮り続けている著者の写真展の図録。写真学校の卒業制作から撮影を始め、1987年に発表したものを再編成した。オールモノクロの写真で、ダンサーの動き、シルエットの美しさを追う。写真というメディアの魅力も再確認できる作品群だ。

郷時間

鈴木是清

①日本写真企画 ②2023年2月
③29.7×21cm、96頁
④3,000円 ⑤鈴木氏

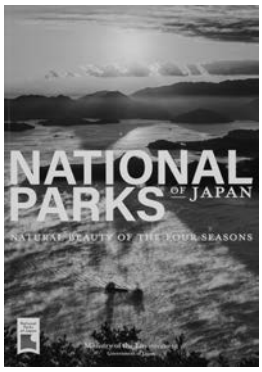
北関東、および南東北の里山を取材。純日本的な風景と、そこに住まう純朴と形容したくなる人びとの暮らしを記録する。平凡に見える風景の中にも、これだけの魅力的な被写体があるということを、著者に諭された思いがする。

木造校舎の子供たち

荒谷良一

①荒谷写真事務所
②2023年4月 ③21×23cm、64頁 ④－円 ⑤荒谷氏

今はめっきり数が少なくなってしまった木造校舎と、そこで学び続ける子どもたちの元気な姿を収録。オールモノクロで、マット調の仕上げをした各写真が、木造校舎という被写体とマッチして、心地よい世界を創り出している。



NATIONAL PARKS OF JAPAN

森田敏隆

①環境省 ②2023年
③29.7×21cm、208頁
④－円 ⑤森田氏

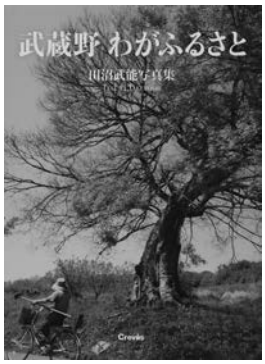
環境省発行の英文による写真集。諸外国へのガイドブック的なまとまりとなっているが、掲載されている写真は、どれも恐ろしいほどの迫力があり、単なるガイドでは済まそうとしない、著者の気迫が垣間見える。

人間讃歌

田沼武能

①東京都写真美術館
②2023年6月 ③25×25cm、240頁 ④－円 ⑤発行所

昨年6月に逝去した田沼武能の東京都写真美術館で開催された写真展の図録。タイトルの通り、テーマは人間。著者がライフワークとしてシャッターを切り続けた、世界中の人びとの姿が登場する。人間とはどれだけ美しく、愛おしいのだろう。

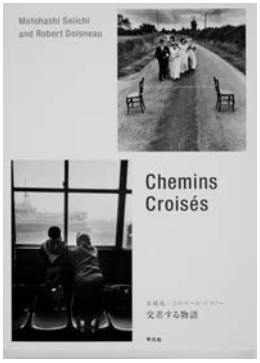


武蔵野 わがふるさと

田沼武能

①クレヴィス ②2023年5月
③26.4×19.3cm、208頁
④3,000円 ⑤発行所

田沼武能の遺作集。著者が最晩年まで通い続けていたという武蔵野の風景をおさめる。開発が進み、魅力的な被写体が激減していっただろうなかで、それでも著者が武蔵野に足を向けた理由は何だったのか。各写真からその理由を探ってみたい。



本橋成一とロベール・ドアノー 交差する物語

本橋成一、ロベール・ドアノー

①平凡社 ② 2023 年 6 月
③ 25.7 × 19㎝、248 頁
④ 2,600 円 ⑤発行所

本橋成一とロベール・ドアノー。日仏２人の写真家によるドキュメンタリー作品を通じて、20 世紀という時代を生き続けてきた人びとの情念を描き出す。スナップと呼びたくなるカットでも、完成度の高い写真ばかりが並ぶ。

辺境異境の世界遺産 野町和嘉 50 年の旅

野町和嘉

①クレヴィス ② 2023 年 7 月
③ 25 × 17.5㎝、176 頁
④ 2,700 円 ⑤野町氏

中央アジア、アフリカ、中米など、多くの人が目を向けることはないであろう土地を旅し、知られざる風景を紹介する、著者 50 年の報告。不毛の土地にあっても人はなお営みを続け、文化を築く。辺境に生きる人びとの心に思いを馳せたい。

京都西陣と都の風情 1972-1988

田口郁明

①大垣書店 ② 2023 年 6 月
③ 24.2 × 16.9㎝、176 頁
④ 2,273 円 ⑤田口氏

モノクロ写真による、京都西陣の記録。日本経済の高度成長が終わった時代の人びとの姿は、今日の目にはずいぶんと質素だ。本書におさめられた情景の多くが、今日には失われているのかもしれない。写真というメディアの社会性が痛感される。

火のトンネル

岡本　央

①大月書店 ② 2023 年 6 月
③ 20.7 × 23㎝、36 頁
④ 1,600 円 ⑤岡本氏

原爆によって死んだ人びとへの思いを、小学校 6 年生が描いた絵画作品と、作品を囲む人びとの姿で綴る。核兵器の使用によって無差別に死んでいった子どもたちに、何の罪があったのだろう。平和の灯を消してはならない。

赤いボタン

岡本　央

①大月書店 ② 2023 年 6 月
③ 20.7 × 23㎝、36 頁
④ 1,600 円 ⑤岡本氏

長崎原爆の遺品となった小さな赤いボタン、あるいは出土した遺品を手掛かりに、被爆地の凄惨な状況を検証し、平和の大切さを訴えるドキュメンタリー作品。『火のトンネル』の姉妹編とでも呼びたくなるまとまりを見せる。

美しい世界をめぐる旅

吉村和敏

①フォトセレクトブックス
②2023 年 6 月 ③21 × 27.7㎝、112 頁 ④ 3,600 円 ⑤吉村氏

カナダを皮切りに、ヨーロッパ各国も訪ね、都市よりも村の風景に心惹かれたという著者の風景写真集。単に自然美だけでなく、繁栄だけを求めず自然との共生を図る人びとの、穏やかな暮らしぶりが描かれている。

実篤公園 季節色

岡　克己

①盛モ堂 ② 2023 年 7 月
③ 15 × 21㎝、74 頁
④ 1,800 円 ⑤岡氏

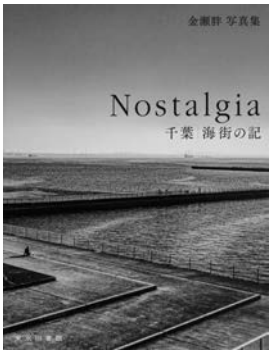
調布市にある実篤公園に被写体を求めた写真集。咲き競う花、水辺に憩う鳥、玉砂利が落とす影など、あらゆるものが一体となり抒情詩を紡ぐ。撮影には苦労が伴うものだが、通える場所があるというのは、良いものであるに違いない。

我が昭和の写跡

森井禎紹

①森井禎紹写真事務所
② 2023 年 5 月 ③ 30.7 × 20.7㎝、184 頁 ④ 5,000 円 ⑤森井氏

路地裏、学校、浜辺、ローカル線の車内など、あらゆる場所に庶民の姿を追ったモノクロを中心にしたドキュメンタリー写真集。昭和という時代の暮らしは質素で、けれども明日への希望に満ちていたことが垣間見える。



Nostalgia 千葉｜海街の記

金瀬　胖

①東京印書館 ②2023年7月
③25×19.2㎝、152頁
④3,500円 ⑤金瀬氏

1980年代から現在まで、千葉県船橋市の海岸線近くで撮影された写真を集める。開発によって全国の海岸線の街が大きく変貌したが、ここもその一つ。1枚1枚の写真に、都市景観の急速な変貌がうかがえる。

鳥の歌
El Cant dels Ocells

高橋宣之

①TEMPORARY CONTEMPORARY
②2023年7月 ③17.2×12.8㎝、384頁 ④3,500円 ⑤発行所

1970年代のスペインの記録。バルセロナの第一印象は陰うつなものであったと語る著者は、現地に住まい、堅実に撮影を続ける。人びとの姿は時に陽気で、時に物憂げだ。表向きの姿に惑わされない写真家の視線がそこにある。

感動と感激を呼ぶ推しスポット！
ザ・水族館

虫上　智

①八重洲出版 ②2023年6月
③29.7×21㎝、98頁
④1,800円 ⑤虫上氏

全国の水族館のガイドブック。現代の水族館は展示に工夫が凝らされ、来館者を大いに楽しませる趣向に満ちている。制約が多いだろう館内、水槽の撮影は苦労が伴ったことだろう。それだけに楽しい仕上がりとなっている。

モノクロームで綴る
昭和の鉄道風景

諸河　久

①イカロス出版 ②2023年5月
③25.7×18.2㎝、144頁
④2,400円 ⑤諸河氏

主に昭和30年代から40年代にかけて撮影された、全国のローカル線の姿を集めた写真集。今日には姿を消してしまった路線も少なくはなく、それだけに鉄道ファンにとっては貴重な記録となるであろうカットが満載されている。

寄　贈　図　書

瀬戸内逍遥様 …… 荻窪風土記
松尾忠男様 …… 改訂版 都市の貌・2021
吉田勝昭様 …… 「私の履歴書」100人が教えてくれた人生を生き抜くヒント
ぶどうぱん社様 …… ハッサン水谷・サハラ蒼氓
JCIIフォトサロン様 …… チャールズ・ユンカーマン・HAYAMA 1952-1953
…… 藤森順二・諏訪の街角－密と虚実－
…… 伊奈英次・国の鎮め－ヤスクニ－
…… 編集・白山眞理、櫻井由理・日本の断面 1938-1944－内閣情報部の宣伝写真－
PCT様 …… 北井一夫・ドイツ表現派紀行
キヤノン様 …… 写真新世紀30周年記念本
国際交流基金様 …… 国際交流基金 展覧会史 1972～2022
二科会写真部様 …… 一般社団法人二科会写真部70年史
日本写真文化協会様 …… 第69回全国写真展覧会 全国展フォトコンテスト作品集
風景写真出版様 …… 飯島 勝・何処へ
ふげん社様 …… 川口 翼・心臓、制作・PCT・写真 Sha Shin Magazine 4
りぼん舎様 …… 金光律子・脈と間 －巡る熊野
東京都写真美術館様 …… 恵比寿映像祭2023 Technology? －テクノロジー？
…… 深瀬昌久・深瀬昌久 1961-1991 レトロスペクティブ
…… TOPコレクション セレンディピティ 日常のなかの予期せぬ素敵な発見
日本リアリズム写真集団様 …… 2023年「視点」第48回展作品集
日本写真協会様 …… 「東京写真月間2023」図録
武蔵野美術大学 美術館・図書館様 …… 監修・大日方欣一・大辻清司アーカイブフィルムコレクション7 太陽の知らなかった時

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。

■「第39回写真の町東川賞　飛騨野数右衛門賞」受賞　2023年7月29日

受賞者：広田尚敬（1967年入会）

長年にわたって地域の人・自然・文化と密接に関連している鉄道を撮り続けている活動に対して。

追悼　謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

菅田　隆雄　正会員

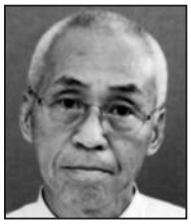
2022年12月24日、敗血症のため逝去。74歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(2009年入会)

前定　賢三　正会員

2023年1月8日、誤嚥性肺炎のため逝去。78歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1972年入会)

渡辺　幹夫　正会員

2023年1月11日、肺がんのため逝去。64歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(2016年入会)



小池　　汪　正会員

2023年7月5日、急性腎不全のため逝去。89歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1974年入会)

吉野　　信　正会員

2023年7月12日、逝去。
80歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1972年入会)

経過報告(2023年2月～2023年4月)

◎**2月8日　第3回技術研究会**　PM2:00～4:30　JCIIビル会議室・オンライン、参加数50名、オンライン参加数20名　○「ファインアートペーパーの世界」用紙側からの視点 INNOVA・PICTORICO・PICTRAN

◎**2月16日　2023年JPS会員関西新年親睦会**　PM6:00～8:30 カンパーニュ　参加数54名

◎**2月17日～23日　2022年第17回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展(大阪展)**　富士フイルムフォトサロン大阪　入場数2,559名

◎**2月21日　新入会員入会資格審査会**　PM2:00～4:30　JCIIビル会議室　12名

◎**3月6日　第56回公益社団法人日本写真家協会理事会**　PM2:00～3:30　JCIIビル会議室　17名、欠席理事2名、監事2名、(リモート参加含)　○第1号議案：2023(令和5)年度事業計画案の件　第2号議案：2023(令和5)年度収支予算案の件　第3号議案：特定積立金の積立及び取崩しの件　第4号議案：資金調達及び設備投資の見込みの件　第5号議案：2023(令和5)年度新入会員承認の件、他

◎**4月3日　2023(令和5)年度新入会員説明会**　PM1:30～4:50　JCIIビル会議室　新入会員27名、役員・委員26名、賛助会員20社32名

◎**4月15日　第1回技術研究会**　PM2:00～4:30　ケンコー・トキナー本社7階セミナールーム・オンライン　参加数48名、オンライン参加数6名　○ミラーレス交換レンズの魅力2023、CP+で魅せた製品群

◎**4月17日　第57回公益社団法人日本写真家協会理事会**　PM2:10～3:30　JCIIビル会議室　15名、欠席理事4名、監事2名(リモート参加含)　○第1号議案：2022(令和4)年度事業報告書案承認の件　第2号議案：2022(令和4)年度決算報告書案承認の件　第3号議案：「公益社団法人日本写真家協会定款」一部変更及び一部追加の件　第4号議案：理事の任期満了に伴う改選及び監事の死亡欠員に伴う補選の件　第5号議案：名誉会員推挙の件　第6号議案：第49回「日本写真家協会賞」承認の件　第7号議案：2022(令和4)年度会費滞納による正会員資格の喪失の件　第8号議案：2023(令和5)年度第24回定時会員総会内容決定の件、他

◎**4月21日　日本写真保存センター2023年度第1回諮問委員会議**　PM2:00～3:30　JCIIビル会議室　20名(リモート参加含)

◎**4月21日　日本写真保存センター2023年度第1回支援組織会議**　PM4:00～5:00　JCIIビル会議室　支援組織会員10社・1団体15名、JPS6名(リモート参加含)

編集後記

◎熊切新会長が誕生しました。会長および理事も5人代わり、若返りました。という事で、今号はJPSや写真の未来に関する座談会を2本掲載しました。気がつけば、理事のなかで私が最年長になってしまいました。JPS入会以来、出版広報委員、担当理事として会報編集に携わってきましたが、今後は公2事業担当として関わることになります。今後ともよろしくお願いします。(伏見)

◎5月の通常総会を経て、JPSの新体制がスタートしました。今期は、出版広報担当として戻ってきましたので引き続き、よろしくお願いします。加えて、業務執行専務理事という協会全体の管理部門を担当する立場となり、身の引き締まる思いであります。JPS会報の発行を通して協会活動を記録・広報する活動は、将来においても大事な事業であると感じています。会員の皆様のご理解・ご協力をお願いします。(小池)

◎日の入りが遅くなる夏の建築撮影は、夕景撮影の時間帯が遅くなるので、昼間の撮影が早く終わるとそれまで時間つぶしが必要です。昼間の日向での外観撮影では、傘で日陰をつくりカメラも人間も熱中症対策が必要です。毎年、快適な季節が待ち遠しい日びが続きます。出版広報委員会では委員長としてよろしくお願いします。(小野)

◎車を持たない生活がもう数年続いています。慣れてしまえば、どうということもありません。関西に行く時は「こだま」に乗っています。少し時間はかかりますが、途中駅で駅弁を買えます。つまり便利さというものは、その時の尺度で、いかようにも変わるということなのでしょう。でも、部屋のクーラーはつけています。(池口)

◎この春3年ぶりにタンザニアを取材した。現地の人にコロナ対策を尋ねると「マスクもワクチンも無いので、レモン汁がコロナを防ぐという噂を信じ、それを飲みながら仕事を続けた」という。ゼロ・コロナの国、ウイズ・コロナの国、噂に頼る国。コロナ禍は世界のさまざまなお国事情を炙り出した。(飯塚)

◎フィルムカメラが大ブームの一方で、画像生成AIが登場。スマホ内蔵カメラで8K動画も撮れるようになるなど、私たちを取り巻く環境は大きく変わっています。価格も50万円オーバーは当たり前。スマホですらカメラ機能の充実したモデルは20万円ほど。進化には柔軟に対応したいと思いつつ、追いかけるだけでも大変です。出版広報委員に出戻って参りました。(桃井)

◎飽きることはない。使っているうちに愛着が増していく方である。カメラ機材はもちろん靴や鞄など、多少使い勝手が悪いところがあっても徐々に慣れ親しんで、いつしか愛情が強くなって手放せなくなる。結婚して15年。濁りのない絆を表す水晶婚式というらしい。はたしてお互いに愛着は増しているか？(山縣)

◎5月末の定時会員総会で理事の皆さんの顔ぶれが変わっておよそ2か月が過ぎました。初めて理事になられた方も、新しい職務に就いた方も、それぞれが手探り状態ではありますが、皆さん前に進もうという気持ちがはっきりと感じられます。事務局もうかうかできないぞと気持ちを引き締め直しているところです。(事務局 杉山)

日本写真家協会会報 第180号(年2回発行)　**2023年9月10日　印刷・発行　©編集・発行人　熊切大輔**
URL https://www.jps.gr.jp/　Email info@jps.gr.jp　本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます
出版広報委員　伏見行介(常務理事)、小池良幸(担当理事)、小野吉彦(委員長)、池口英司(副委員長)、飯塚明夫、桃井一至、山縣　勉
発行所　公益社団法人日本写真家協会(JPS)
〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIIビル303　電話03(3265)7451(代表)　FAX 03(3265)7460
印刷所　株式会社光邦
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号　飯田橋MKビル　電話03(3265)0611(代表)

TAMRON
Focus on the Future

35-150mm F/2-2.8 Di III VXD (Model A058)
ソニー Eマウント用／ニコン Z マウント用

世界初*
大口径F2スタート、
ポートレートズーム、
誕生。

35-150mm F2-2.8

for Sony full-frame mirrorless
for Nikon full-frame mirrorless NEW

(Model A058) ソニー Eマウント用／ニコン Z マウント用 Di III: ミラーレス一眼カメラ専用レンズ
＊フルサイズミラーレス用ニコン Z マウントズームレンズにおいて。（2023年7月現在。タムロン調べ）

www.tamron.com/jp/

製品の詳細情報はこちらから▶

PENTAX

一眼レフの未来を創る。

日本で初めて一眼レフをつくったペンタックス。

その哲学、技術、情熱のすべてを注ぎ込んで、この一台は誕生しました。

APS-Cフラッグシップモデル、PENTAX K-3 Mark Ⅲ。

写真を撮ろう。

K-3 III

株式会社リコー ／ リコーイメージング株式会社
お客様相談センター：0570-001313（ナビダイヤル） www.ricoh-imaging.co.jp

RICOH
imagine. change.

SIGMA

新しい視界。

拡がる可能性。

A Art

14mm F1.4 DG DN

ミラーレス専用｜フルサイズ対応

価格：オープンプライス
ケース、カバーレンズキャップ（LC1014-01）、リアキャップ（LCR II）、
三脚座（TS-141）、プロテクティブカバー（PT-41）、ガイドプレート（GP-11）付
対応マウント：Lマウント用、ソニー Eマウント用

※Lマウントはライカカメラ社の登録商標です。
※ソニー Eマウント用は、ソニー株式会社とのライセンス契約の下でライセンスを受けた
Eマウント仕様書に基づき開発・製造・販売されています。

シグマのプロダクト・ラインについては、こちらへ。

sigma-global.com

肉料理と牡蠣が美味しい奥銀座のカジュアルフレンチ

JPS会員のフォトグラファーの皆様限定で

10%OFF

※JPSの会員証をご提示ください

店内の壁を使って小さな個展を
開催することができます。

Ni-ke ニーケ Brasserie

フォトグラファーの皆様に集まって頂ける場所に
したいと思っております。ぜひご利用ください。

Brasserie ニーケ <ブラッスリー・ニーケ>

〒104-0061 東京都中央区銀座1-19-8 銀座サクラビル1F https://ni-ke.aflo.com
営業時間［火～土］ランチ 11:30～15:00（L.O14:30） ディナー 17:00～23:00

食べログからの予約はこちら→

03-6263-2719

Aflo Atelier プロ向けの高品質プリントラボ

作品用に、インクジェットプリンターで最高品質プリントを承ります。

プロのレタッチャーを含む
4名の経験豊富な
プリンティングディレクターが在籍

お問合せはアフロアトリエ

03-3546-9797

atelier@aflo.com

atelier.aflo.com

- 著名作家の写真展実績多数
- 作品用プリント
- 長期保存に最適

HCLファインアートプリントサービス

ILFORD
CERTIFIED PRINTER PARTNER
イルフォード 認定ラボ

作品を極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数のアーティスト用紙でご提供します。
ファインアートプリントの高い技術と知識を有する熟練のプリンティングディレクターが作品制作をサポートします。

ハーネミューレ
ファインアート バライタ

深い色合い、上質な光沢と質感、広い色再現域、高い最大濃度と滑らかなグレーの階調表現で、特にモノクロ写真に最適です。

ハーネミューレ
フォトラグ

精細で滑らかな面質により多目的に使え、モノクロとカラー写真のどちらにも適し、深みを感じる絵画的な作品に仕上がります。

伊勢和紙
芭蕉

滑面と粗面があり、制作意図に応じてどちらの面でもプリントが可能で違った風合いを表現できます。

〈写真は全てイメージです。〉

このほかにも条件により各種ファインアートペーパー出力の対応が可能ですのでご相談ください。

■ フォトイメージングセンター
営業課 フォトアート担当
東京都杉並区和田1-6-7
☎(03)3384-9670

■ 大阪営業部
営業課
大阪府大阪市北区万歳町3-17
☎(06)6313-2351

ホームページ　Facebook

株式会社 堀内カラー

photo: 川嶋久人 / KAWASHIMA Hisato/ HJPI320110003268/ 2021年 第16回「名取洋之助写真賞」受賞作品 / 失われたウイグル

YOU ARE A COPYRIGHT OWNER

デジタルの時代だからこそ改変してほしくない写真もあります

デジタルの時代だからこそ改変してほしくない写真もあります。勝手にトリミングされたり勝手に合成されたりしないように著作権が守ってくれます。これを「同一性保持権」と言います。著作者の創作意欲を守るための権利著作者人格権のひとつです。写真著作権を大切に。

一般社団法人
日本写真著作権協会
〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403
https://jpca.gr.jp

【会員団体】 公益社団法人日本写真家協会
公益社団法人日本広告写真家協会
一般社団法人日本写真文化協会
日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会
全日本写真連盟
一般社団法人日本スポーツプレス協会
一般社団法人日本自然科学写真協会
日本風景写真協会
公益社団法人日本写真協会
一般社団法人日本スポーツ写真協会

危険回避 ―――――――――――――――― 髙橋忠照

幼稚園の運動会での１コマ。カラー帽子のゴム伸ばしは、私も幼少期によくやった遊びだ。度々ゴムを伸ばしてしまい、母を困らせた懐かしい思い出が蘇る。目をつぶって気持ちを集中させる真剣な表情に、自然とカメラが向いた。直接ゴムが顔に当たらないように、間に手を入れている辺りに、今まで痛い思いをして培った、危険回避の技をファインダー越しに垣間見ることができ、我が子の小さな成長を感じ、笑顔でシャッターを切った。
FUJIFILM X-T4 XF100-400mmF4.5-5.6 R LM OIS WR + XF TC1.4x

FUJIFILM

Silent Tokyo ―――― 小宮広嗣

東京500メートル上空。夕景を狙って上がってみたが狙いは見事にはずれ雲が立ち込め陽を見ることはなく日没を迎えた。「やっちまったなー」という空虚感が自分を包み込む。それと同時に街の姿は暗がりに消え始めその様は静寂さえも感じる。しばらくして街のブロックに街明かりが現れはじめ街が再び静かに動き始めた。

FUJIFILM X-H2 XF8-16mmF2.8 R LM WR

Impressive（インプレッシブ）―――― 笹生公希

大波月（おおはづき）海岸は千葉県御宿町の岩和田海水浴場の東にある100mにも満たない短い海岸であるが、ここからの眺めは素晴らしく、多くの写真家や画家のモデルになっている。また近年ではデジタルカメラの普及から星景写真を撮る方も多く訪れる場所となっている。海に向かって右手に潮が大きく引いた時だけ渡る事が出来る洞窟がある。そこから見たこの海岸の象徴であるロウソク岩は圧倒的な存在感を放っていた。
FUJIFILM XH-1 XF18-135mmF3.5-5.6 R LM OIS WR

FUJIFILM

FUJIFILM
Value from Innovation

Photography First

原点への回帰。正統進化。

X-T5

約 4020 万画素センサー・画像処理エンジンの最新デバイス搭載で高画質・高速 AF を実現
小型軽量ボディに天面部 3 ダイヤル、3 方向チルト液晶モニターを備え、進化した " 写真機 " 登場

- 「X シリーズ」第五世代の裏面照射型約 4020 万画素「X-Trans ™ CMOS 5 HR」センサー、高速画像処理エンジン「X-Processor 5」搭載
- 5 軸・最大約 7.0 段のボディ内手ブレ補正搭載
- 動物・鳥・車・バイク・自転車・飛行機・電車を AI で検出できる被写体検出 AI を搭載
- 6.2K/30P 4:2:2 10bit での映像記録に対応
- 質量約 557g のコンパクトボディ

富士フイルムデジタルカメラサポートセンター TEL :0570-04-1060（ご利用いただけない場合:03-6625-2809）
受付時間:月～土 9:30～17:30 ※日・祝日・年末年始を除く

http://fujifilm-x.com/ja/

JAPAN
PROFESSIONAL
PHOTOGRAPHERS
SOCIETY

Photo Oka Katsumi